魔法少女リリカルなのは　～転生者によるIFな物語～

黒い鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～転生者によるＩＦな物語～

【Ｎコード】
Ｎ４５８０Ｚ

【作者名】
黒い鳥

【あらすじ】
【魔法少女リリカルなのは　～転生者による狂い物語～】のＩＦの世界での話……だったが、何やら前作の世界と繋がっている様子。そしてそんな世界に転生した原作非介入派である少女の前に現れた、最高の魔導師。
その二人の話による、原作の裏で行われる物語。

一話　彼女は転生者（前書き）

何となく思いついたので投稿しました。
たんに思いつき小説なため、超不定期更新になります。
ある意味、続編ですね。

一話　彼女は転生者

腰まで届くであろう焦げ茶色の髪を持つ少女、浮鳴遥（うきなるはるか）は転生者である。
よくあるテンプレな方法で死に、テンプレに能力を貰い、テンプレにリリカルな世界に転生してきた元高校生の少女。現在は小学三年生。

「はぁ……」

一つに纏められたポニーテイルが溜息と共に揺れる。
前世と同じ容姿で生まれ、前世と同じ両親から生まれたが、生まれた世界は前世とは違う。
リリカルでマジカルな世界なのだ。
そりゃぁ、テレビの向こう側で見ている分には楽しめたが、実の世界となると話が変わってくる。
もしかしたらあっさりと死んでしまうかもしれない世界なのだ。

実のところ、彼女の隣の席の生徒は、主人公高町なのはである。
全転生者が欲したであろう席を、彼女は手に入れたのである。
しかし彼女からすればまったく嬉しくないこと。
原作非介入派である彼女からして見れば、あまりにも嫌な席である。

ちらり、と高町なのはを見る。
すると目が合い、笑顔を向けてきた。
一応、こちらも笑顔を向ける。

――内心、恐怖しながら。

そもそも遥は高町なのはと言う存在に怯えているのだ。
何故、あれほどまでに裏無く人間に優しい心で接する事ができるのか。
人間、人を救おうとする気持ちがある場合、絶対に自身の利益を考えるものだ。
しかし彼女は九歳の癖して自身の利益など考えることなく、助けを求めてきた少年のために、友達となる少女のために、世界のために――動いたのだ。

「……」

そんな美しか存在しないような少女を、遥は人間とは思えないのだ。
九歳児と言う純粋なお年頃だから？　嘘だ。九歳児ならもっと我侭を言っている時期だ。

「……はぁ」

他人のために自己犠牲をする。
それは衛宮士郎と同じようなものだ。しかも才能がある分、なお性質が悪い。

「まぁ、私が関わらないところでマジカルしてね」

息しか吐いていないようなほどの音量で呟いた。

◆◆◆

屋上で一人、弁当を食べていたところ。
別に友達が居ないと言うわけではなく、食事のときは静かに食べたいのだ。
だが、その静寂な時間に――独りの少年が現れた。

「やっほー。転生者」

翡翠色の髪と眠たげな真紅の半眼を持つ少年が、彼女の前に訪れたのだ。

一話　彼女は転生者（後書き）

主人公は浮鳴遥さん。
十話も無いと思います。多分。

二話　彼は魔導師

さて、遥の容姿を語ってみよう。
まず原作主人公達に劣らないほどの美少女である。前世ではかなりモテたが、本人は興味なかったので『年齢＝彼氏居ない歴』に彼女は当てはまる。
もっとも『恋愛感情など一時の気の迷いによる精神的な病の一種に過ぎない』と言うモットーを掲げる彼女なのだから、彼氏が出来たー♪　なんて喜んでいる友人を見て思わず苦笑してしまうほどだ。

次に、髪。
焦げ茶色の、腰まで届く綺麗な髪をポニーテイルに纏めている。
次に、瞳。
大きく理知的な真紅の瞳である。

そんな彼女の前に――

「……」

真紅の瞳を持つ少年が現れた。
顔立ちは整っている方。イケメンとまではいかないが、カッコいい部類に入る顔である。
しかし、思わず目に付いてしまうのは、その瞳。
自分と同じ真紅の瞳だ。
その瞳からは卑しい感情や見下したようなモノは感じられず、ただ――観察しているかのような目である。

「……」

しかも、彼女の事を転生者と言ってきたのだ。
つまり彼は転生者の部類に入るのであろう。それはわかる。
だが、こう言った唐突な接触に、彼女はどうすれば良いのか頭を悩ませていた。

「……それで、貴方は何者かしら？」

転生者と呼んできた以上、誤魔化しは効かないであろう。
多分、彼は転生者などを知る事ができる能力持ちだ。
そう推察したと同時に、彼に質問した。

「オレ？　オレはお前の隣のクラスの彼方行方（かなたゆくえ）だが」

試すような笑みを浮べながら、あっさりと名前を明かしてきた少年
――彼方行方。

「私も自己紹介したほうが良いかしら？」
「どちらでも」

――すでに知られている。

「浮鳴遥よ。よろしくね」
「あぁ。よろしく」

余裕そうな声音。
余裕そうな表情。
接触してきた意図は？
何故こんな時間に？

そう言った事を冷静に考えていく。
あまり得意ではない魔法。それの部類に入る並列思考（マルチタスク）を全力で使い、相手に気づかれない短い時間で考える。

「ふむ。別にそこまで考える必要は無いぜ」
「……何が？」
「不得意なマルチタスクを使ってまで考えなくて良い、って意味だよ」
「――――」

一瞬、世界が止まった。
そう錯覚してしまうほどの驚愕を彼女は感じた。
絶句なんて生易しいものではない。多分、脳味噌の動きが止まったのであろう。
そう考えてしまうほどの言葉であった。

「……ん？」

ふと、行方が疑問を感じたような声を出した。
そして納得したかのような声音で、

「あぁ。能力無効化系能力者（ブレイカースキルホルダー）か」
「まあね」

彼女のスキルによって能力（スキル）を無力化した。
その瞬間、彼は確認をしてきた。
つまり今まで知る事ができていたが、能力を無力化された瞬間に知る事ができなくなった。
それだけわかれば、すぐに理解できた。

「もしかして、彼方君の能力って解析系？」
「そうだぜ。よくわかったな」
「……」

不信感が高まる。
能力を封じられたのに、余裕そうな表情と声音は変わらない。
だから、質問を変えてみた。

「……魔法の方にも自身があるの？」
「そうだな。能力も強力なものだが、魔法も原作の主人公達以上だぜ」
「……どのくらい？」
「他称、最高の魔導師（スペルマスター）」

はっきし言おう。
彼女のスキルの無効化スキルでは、魔法までは封じられない。
故に、魔法の強度を聞いてみた。そして、後悔した。

「それで、用件は？」
「あぁ。用件は――」

行方がそう言ったと同時に、結界を展開した。
苦々しい表情をしたと同時に、遥は――消えた。

「……空間移動（テレポート）？」

結界を閉じ、溜息を吐いた。

「……誤解されたか。抹消されると思われたか？」

周りと隔離するために展開した結界により、逆に警戒されたか。
そう行方は考え、

「ま、どうでも良いか」

そう言って彼は教室へと戻っていった。

◆◆◆

「思わず逃げてきちゃったけど……もう少し居た方が良かったかしら」

軽率な行動だったか、そう考えたが……相手の手札が分からない以上、逃げてきてよかったのかもしれない。こちらはまだ内容――相手の目的を聞いていない状態で逃げてきたのだ。
なら、良い感情は抱かれないであろうが、だからと言って敵として見られないはずだ。

そう考え、新しい手札を作ることにした。

「午後からの授業は適当に参加するしかないか……」

何気に小学校生活を楽しく送っている彼女からして見れば、この出会いは面倒臭いことであった。

二話　彼は魔導師（後書き）

一話一話が短い？　まぁ、それは見逃してください。

三話　彼等は苦悩する

行方と出会ってから三ヶ月。
あれから彼方行方は何もしてこなかった。直接的にも間接的にも。
普通に隣のクラスなので見かけるし、すれ違ったりするが、完全に他人面である。
もしかしてあんな時間、本当は無かったのでは？　と考えてしまうほどだった。

用意しておいた切り札が無駄になった感じだ。
しかし、彼が接触してきたおかげで自分がとことん魔法に対し弱いと言うことを教えられた。
我流であるが、少しそっち方面に鍛えてみようか？　そう考えることが出来たことには感謝する。

「ま、あの時、逃げたのは失敗だったみたいだけど……」

転生者を排除するのが彼の目的だった場合、すでに遥は殺されているはずなのだ。
普通な生活を送っている遥には隙が多く、いつでも殺せたはずだ。
だが、行方は先程言ったとおり何もしてこない。
つまり、行方には暴力的な目的があったわけではないのだ。
普通に用件を聞けばよかったかしら？　と少し後悔する。

「……よく考えれば、彼以外にも転生者はこの学校に居る可能性があるのよね」

一度調べた方が良いな、と思い新たな手札を作ることにした。

◆◆◆

「……ふむ」

一方、行方の方はと言うと、遥以上の悩みの種が出来てしまい、悩んでいた。
彼の悩みの種となるものはもちろん、転生者である。
その転生者は一ヶ月ほど前に地球に現れた。
それだけなら別に脳を使うほどでもなかった。単なる転生者程度なら、何が起ころうと解決できるからである。それだけの手札を彼は持っているからである。

――逆に言うと、持っていない手札の範囲で起きたことには非常に弱いのだが。

事実、遥を見つけたときには彼は一年ほどかけて彼女に対しての手札を作り、そして接触したのだ。
あまりにも酷い反則（チート）技さにどうすれば良いのか、と言う思考をしていたのだ。

「あ～あ。また酷い反則（チート）野郎が出てきちまったよ」

自室のイスに座り、背もたれに寄っかかりながら溜息を吐く。
原作開始まであと一年と少し。
遥と同じく原作非介入派である彼は、彼女と接触して同盟を組もうとしたのだが……用件を伝える前に逃げられてしまった。
その放課後に出会った転生者やら、一ヶ月ほど前に現れた転生者や

らで彼女と接触する時間がなくなってしまったのだ。いや、しつこく接するのもどうかと思い、時間を置いた、と言う点もあるのだが。
しつこく接すれば、ストーカー扱いされるかもしれないし。
そんな適当なことを考えた後に作業に戻る。

「さてと……依頼されたものぐらいはしっかりと造らなくちゃな」

今、彼が作っているのは一ヶ月ほど前に現れた転生者に頼まれた物品――名は、『零時迷子』。
本来の『零時迷子』は“存在の力”と言うものを毎晩午前零時にその宿主が消耗した“存在の力”を元に戻し回復させる一種の永久機関である。
しかしこの行方作の『零時迷子』は違い、“存在の力”の代わりに魔力を回復させる物である。

宿主の魔力情報を解析し、毎晩午前零時に『零時迷子』から同じ波長の魔力を増幅させる、と言う仕組みである。

「まったく……何をやってんだか。オレは」

原作に介入しないと決めときながら、原作以外で起こる事柄に対しては首を突っ込む。
原作でなければ安全？　んなわけない。
結局のところ、彼はお人よし――でもない。
ただ単に流されやすい人間なのである。
情に流されるのならまだ良いが、その場で流されてしまう。

そんな自分に溜息を吐いた後、作業に戻った。

「まぁ原作には絶対に介入しないけどな」

行方が幼い頃にこちらに転移してきたときに養子に向かい入れてくれた男性のことを考える。
彼のためにも迷惑になるような行動は控えようと考えたのだ。

それでも転生者と関わってしまうのは、転生者だからかもしれないが。

「……ふぁぁ。眠い。寝よ」

作業を中断し、ベッドに身体を預ける。
子供の身体であれば疲労が溜まり、眠らずにはいられない。

平行世界の彼とは違い、まだ人間らしい日常を彼は送っていた。

翌日。
腕輪型のデバイスを身に付けながら学校に登校した。

「まったく……放課後も他の世界に行って素材集めしに行かなくちゃいけないぜ」
『お疲れ様です。マスター』

右腕に付けた彼のデバイス、ドラウプニル――略称ニルが行方を労う。
デバイスを持ち歩いている理由は簡単で、ただ単に話し相手が欲しかったからである。
かなりの人間不信者である彼はと言うと、信用できる人間が少ない

ため、話し相手が少ないのだ。

ありとあらゆるモノを分析できる彼の瞳（スキル）――構成解析（ゴッドノウズ）により、相手の思考や感情なども読めてしまう。この能力により、相手の能力や魔力の動きなども見ることが出来る。

故に、遥が魔法を苦手としていた事を見抜いたのだ。

魔力の動きが鈍かったから、苦手だと理解できたのだ。

「あ、行方先輩。おはようございます」

「ん？」

後ろから挨拶されたので振り向く。

そこには――

「あぁ。お前か」

三ヶ月前に彼の前に現れた転生者が居た。

「なんか、お前に先輩だ何て言われるの……奇妙な感じなんだが」

「いやいや、あっちの世界でも僕は貴方より後に転生してきましたし」

クックック、と特徴的な笑い方をする転生者を見つめ溜息を吐く。

「もっとも、あっちの世界とは少し性格が変わっているようだけどな」

「まぁ、色々あったんですよ。色々」

◆◆◆

今日も遥は屋上の隅で一人、弁当を突いていた。
最近、隣の某悪魔さんが一緒に食べない？　と誘ってきているが、

「私、独りで食べる方が好きなの。ごめんなさいね」

と言って諦めてもらっているのだ。
内心、どこの厨二病だよぉぉぉおおお！！……とか叫びながら屋上に向かっている。
それが彼女の日常であった。

そんな彼女の日常に、また影が差した。

「やっほー。転生者さん」

ついに来たか、と思い顔を上げると――そこには、彼方ではなく少女が立っていた。
どこか皮肉を感じさせないシニカルな笑みを浮べている、長い銀髪に翡翠の瞳を持つ美少女。
背からして一年生だと思われる。

「……」

予想外な自体が発生した。
そんなふうに頭が混乱している中、彼女は自己紹介を始めた。

「初めまして、僕は――――」

三話　彼等は苦悩する（後書き）

姿や見た目、口調も多少変わってしまいましたが、彼女が登場しました！

……え？　誰だって？　まぁ一人称でわかるんでは無いでしょうか？

それではこの辺で。

現在までに出てきた転生者：四人

四話　彼方より来た転生者

「僕は、キール・ローレライって名前なんだ。よろしく、浮鳴先輩」

リアル僕っ娘が現れた。

「……」

いや、そんなことはどうでも良い。

単に個性的な少女が目の前に現れただけだ。

問題なのは、個性（ボクっこ）ではない。問題なのは、目の前に現れた転生者（トリッパー）である。

明らかに転生者であろう彼女は……あれ？　もしかして男の子？

え？　もしかして髪が長く、さらには容姿が美少女な少年だったりする？

下の服装を見てみるが、スカートの下にズボンが見える。

スパッツ代わりとも言えなくも無いが、彼／彼女の一人称を聞く限り、男物のパンツを隠すためのズボンとしか思えない。

いや、だったら何故スカートを穿くんだ？

「……」

何てかなり失礼なことを考えている遥であったが、キールの方はただ苦笑するだけである。

「やれやれ、前世から男子か女子か、何て困惑させることがよくあったが、せっかくの美少女容姿になのに困惑している表情を見ると、

さすがに僕でも少し傷付くよ」
「あ、ごめんなさい」
思考放棄。
素直に謝り、今度こそ（多分）彼女への対策を考える。
転生者――それだけでも脳を働かせなくてはいけない存在だ。
敵味方関係なく、転生者と言う存在自体がイレギュラーであるから考えなくてはいけない。
しかしキールの方はと言うと、その真剣な表情を浮かばせている遥を見て、
「別に警戒する事はないよ。行方先輩もそうだけど、僕達の役目（でばん）はもう終わっている。だから、僕達は原作に関する全ての事象については警戒しないでくれ」
「……どう言う意味かしら？」
「そのままの意味だよ。原作介入を狙い他の転生者を抹消しようとする愚かな転生者達とは違う、と言う意味だよ。だから君に害意を与える気も無いし、悪影響を与える訳でもない」
「……」
「……」
「……」
――事実口異（ライアーカット）
ここで、キールが発言した内容がどれだけ真実かどうかを見抜くために彼女は能力（スキル）を使った。内容は、虚偽の部分だけ頭から無くす、と言う能力である。
「……」

そしてスキルの結果――全てが真実である事がわかった。
故に、彼女は怪訝な表情をさせた。
『行方先輩もそうだけど、僕達の役目(でばん)はもう終わっている』
「……出番って、どう言う意味かしら？　まだ原作は始まっていないのに」
「簡単な話だよ。僕達は……っ……っ……っ……」
唐突に言葉を止めてしまったキールに対し、またもや怪訝な表情をしてしまう。
キールの方も、驚いた表情をしながら喉に手を当てている。
「……ふむ。悪いが言えないみたいだ」
「そう」
スキルで確かめているため、言葉に偽りが無い事を知る事ができた。
「それで、貴方達の目的は？」
「何。簡単な話さ」
クックック、と喉を鳴らすような笑いをした後、
「同盟を組みたいのさ。現在は僕と行方先輩だけだけど」
……同盟？
「何の同盟かしら？　そもそも、同盟なんて組む必要なんてあるのかしら？」
「まず、転生者に関しての情報が得られる」

「ごめんなさい。私、転生者とかにも興味ないの。平和に暮らせれば」

そう、転生者とか何だとか最近は彼女の周りが忙しいが、結局のところ、彼女は平和に暮らしたいのだ。だから原作に関わるつもりも無いし、転生者にも関わるつもりも無い。

「そう？　だけど、その平和を手に入れるには――A，sを乗り越えなくちゃいけないよ？」

「……A，s」

「そう。蒐集が行われる時期だ」

「何で私に関係あるのかしら？　自慢じゃないけど、私はBランクも魔力値が無いわ」

「確かに、自慢じゃないね」

クックック、と喉を鳴らすような笑いをする。

皮肉や嘲笑、見下しの類では無いことはスキルを使わなくてもわかる。

「違うよ。正直言って、転生者（ぼくたち）からしてみればヴォルケンリッターなんて目じゃないよ。警戒すべき存在は、僕達と同じ転生者（そんざい）だ」

「――A，sで転生者達が暴走するの？」

「さぁ？　そこまでは言わないよ」

「……」

詐欺師と話している感覚に陥る。

どこまでが本当で、どこまでが嘘か。

「――え？」

いつの間にか、事実口異（ライアーカット）が使えなくなっていた。
何故？　どうして？
そう思考を巡らせるが、答えは出てこない。

「貴方、何をしたの？」
「ちょっとした能力で君の能力を封じたのさ」
「……」

能力を無効化する能力を発動してみるが、現状は変わらない。
何が起こっているか理解できない。

「それで、同盟に入るのかい？」
「……その同盟の目的は何なのかしら？」
「簡単だよ。原作介入を求めない転生者同士で助け合う同盟だよ」
「……本当にそれだけかしら？」
「……」

ただ笑みを浮べるだけでキールは何も言わなかった。

「……却下するわ」
「そうかい。それじゃ行方先輩にも伝えておくよ」
「えぇ。お願いね」

そう言ってキールは去っていった。

「……戯言ね」

弁当箱を片付け、教室へ戻っていった。

◆◆◆

そして一年後の無印で、同盟を組んでおかなかった事に後悔する事になる。

「はぁ……はぁ……」

偶々手に入れてしまったジュエルシードが、こんなことになるとは……。

そう思い、溜息を吐きそうになる。

だからと言って状況は変わらない。

「あら？　もうへばったの？」

突如、目の前に紫色交じりの銀髪の少女が現れた。

へばった……それは当たり前だ。

「何よこの異空間……さっさと解除しなさいよ！」

夜の街道が永遠と続いている。

その終わらぬ道を、遥はずっと彷徨っていたのだ。

目の前の少女によって作られた異空間の中を。

「ごめんなさいね。だけど、これも必要な事なの」

優しい笑みを浮べながら、赤い瞳を鈍く光らせた。

遥を異空間に閉じた相手は笑いながら、自身のウサ耳をぴょこぴょこと動かした。

四話　彼方より来た転生者（後書き）

作者です。活動報告にも書きましたが、何故自分のところには感想が来ないのだろうか？　そう悩み続けている毎日です。

レベルが低いのか？　それよも面倒臭いのか？

色々と悩ましながら毎日を過ごしています。前作でもこんな話をした一日ぐらいは来たりしましたが、すぐに感想が来なくなりました。

良い部分とか悪い部分とか、指摘すら来ないので何にもわからなくて……。

主観的と客観的の違いですね。

何故来ないのだろう……。

作者が何か悪いのだろうか……。

……マイナス（ネガティブ）思考ですみません。

それではこの辺で。

五話　彼女の原作直前

この一年間、平和な日々が続いた。
魔導師だとか転生者だとか、そんな単語が出てきそうにない日々を送った。
だけど、それでも我流であるが魔法を鍛えてみている。
自身が魔法に対して弱すぎる、と言うことを彼女は自覚している。
故に少しでも対策を作れるよう鍛えてみているのだが……そこまで成果は無かった。
もっとも、C＋ランクからBランクには上がったが。

「……んっ！」

腕を天に向かって伸ばし、背を伸ばす。
背中からパキパキと心地の良い音が鳴る。
朝から寝相を悪くして寝ていたことにより背中の状態に奇妙な感覚を感じていたのだ。
九歳で背骨が悪くなる、とか絶望的なことにはならないように寝る前に気をつけようと誓ったのだ。

そんなことを誓っているうちに、チラホラと一年生が見えてきた。
初々しく、少しソワソワしている。

「今年は何組になるのかしらねぇ」

今日は私立聖祥大学付属小学校の入学式である。
つまり遥の小学三年生生活の始まりの日でもある。
彼女が原作の舞台である聖祥に入学した理由は単純で、大学まで続いているからである。

この海鳴市には大学が聖祥以外存在せず、かなり遠いところにある。故に、エスカレーター式の学校に入学してしまったのだ。学力は必要だが。

「ええっと……うん。またなのはちゃん達と同じクラスか」

三年間同じクラスである主人公の名前を見つけ、溜息を吐く。
依然、転生者である彼方行方は同じクラスにならない。アチラで何か細工しているとしか思えない。
自身もそう言った能力があればよかった、と悔いながらも自身の教室へ向かう。
席は名前順なので、相島結城君と中端黒兎君にはさまれる事になる。
隣の席の子が月村である時点で、彼女は諦めていた。

そしてHRの時間。
いつもなら自己紹介の時間なのだが、今日は少し違った。

「みなさ～ん。今日は新しいお友達の紹介しますね」

その担任の言葉に浮鳴はギョッとした。
原作開始直前で――転入生が現れるなんて、転生者としか考えられなかった。
そして遥の予想は的中。
銀髪銀目のイケメンな少年が入ってきた。おかしなことに、まだ小学三年生と言う幼い年頃なのに、イケメンと言う造形がすでに完成している。
そんな少年が微笑んだ瞬間――

「初めまして。今日転入してきた中島貴樹です。よろしく」

――クラス中の女子が頬を紅潮させた。

『ニコポ』『撫でポ』
恋愛系洗脳能力。
微笑んでも相手の頭を撫でても異性から高い好意を得られる、と言う能力。
これが効かないのは、すでに異性に好意を抱いている者か、もしくは転生者か。

転生者である遥には通じず、彼女は少し引いていた。
男子勢の幾割が嫉妬の対象として見ていた。多分、好きであった少女が頬を紅潮させたことに気づいたのだろう。

「やってらんねー」

思わず口を悪くしてまで呟いてしまった。

◆◆◆

昼休み。
いつも昼食の時に使っている屋上は中島と女子達で占領されてしまっているので、遥は珍しく中庭で食事する事にした。
何故、彼女が中庭にあまり行かないと言うと……

「……ん？　珍しいな。お前が来るなんて」
「もしかしたら初めてなんじゃない？　彼女が来るのは」

彼方行方とキール・ローレライが居るからだ。

キールの噂は聞いており、外国人だが日本語ペラペラ。しかも社交性的な性格でクラスの中心のようだ。先生からも優等生と認められている彼女だが、よく一年上の彼方行方とよく話している姿を見かけるとか。それも中庭でよく昼食を一緒に取っている姿を見かけているとか。

人気はあるが、そこに恋愛が絡んでくることは無いらしい。

遥は計算しながらの振る舞いなのでは？　と考えているが、まぁ恋愛発展にならないような振る舞い以外は彼女自身の性格が起因しているのであろう、と結論付けていた。

閑話休題。

「一緒に良いかしら？」

「構わないが」

二人に近寄り、彼女は座って弁当を広げた。

「今日、中島貴樹って転生者が現れたんだけど、貴方達は把握していた？」

「「……」」

その言葉に、少し驚いたような表情をした。

しかし二人とも種類の違う驚き方をしている。

行方の方は中島貴樹と言う名前に。キールの方は転生者と言う言葉に。

「彼、『ニコポ』や『撫でポ』を持っていたけど……」

「え？　それは本当かい？」

「あぁ。それは知っていた」

二人の反応は先程から違い、キールの方は知らず、行方の方は知っていたようだ。
そのことに遥は違和感を感じた。

「……先輩。もしかしてすでに中島と接触していたのかい？」
「まあね。ちょっとした不可侵条約を張ったんだが……まさか転入してくるとは思わなかった」
事実口異（ライアーカット）を使用しながら話を聞いているので、彼等が嘘を吐いていないことがわかる。

「だけど　　、彼は『ニコポ』と『撫でポ』なんて持っていただろうか」
「いや、　　は持っていなかった。　　の不安要素が関与しているんだと思う」
「なるほどね」

ところどころ、彼等の会話が聞こえなかった部分があった。
声が小さかったとかそんなものではなく、何かによって知覚することを遮られたと言う感じであった。
遥にはこの現象に身に覚えがあり、前回のキールも彼女の前では話せなかった内容があった。
それと同じだろうと結論付け、質問しなかった。

「……どうやら貴方達、彼のことをよく知っているようね」
「まあね。　　からの付き合いだし」
「もっとも、　　もそこまでの付き合いは無かったがな」

聞こえない部分があったりと、奇妙な感覚に陥る。

「……一つだけ質問」

「ん？」

「彼は貴方達の同盟に……」

「いや、入っていない。思いっきり原作介入する気だしな」

「そう」

それで会話を終了させた。

昼休みも後半に入ったので、さっさと弁当の中身を片付ける事にした。

五話　彼女の原作直前（後書き）

今回登場した転生者：五人

六話　彼の原作直前……彼女の能力（前書き）

暴力的な戦いはあまりないだろうけど、能力同士の戦いはありそうになってきました。暴力はいけないもんねっ！

六話　彼の原作直前……彼女の能力

翡翠の髪を持つ少年、行方は考える。
昼間に転生者の一人である遥に聞いた、中島貴樹が転入してきたことに関してだ。
中島貴樹に関してはすでに確認済みで、彼の能力も把握している。

名前：中島貴樹
魔力：ＳＳＳ
能力：『五属制御（エレメンタルハンド）』『ニコポ』『撫でポ』

『炎』『電』『氷』プラス『水』と『風』の変換資質を持つ能力五属制御（エレメンタルハンド）。
さらには恋愛系洗脳能力であるニコポや撫でポ。
そして魔力値ＳＳＳにイケメンと言う、ある意味テンプレな少年。
知りたくも無いが、彼については結構行方は知っていた。

かなりの下種野郎であることを。

「……」

そんな彼に行方は、原作主人公（なのは）達を売ったのだ。
自分は介入するつもりは無いから、彼女をどうにしても別に構わない、と。
つまり、中島を下種だとしたら、行方は外道なのだ。
これが物語であったら、凄いアンチが来そうだな、などと行方は適当なことを考えたり。

「ふむ。だが……さすがに予想外だったな」

中島が転入する事をまったく考えていなかった。
いや、考えられなくもなかったはずなのだが……それは無いかな、と無意識のうちに思考停止してしまっていたのだ。

「ま、気にすることは無いか」

予想できなかった――だからなんだ？
百戦錬磨（くろうと）の最高（スペルマスター）の魔導師が、力（しろうと）だけの屑に負けるわけがない。高慢ではなく傲慢でもなく、単なる実体験。
例え最強（SSSランク）の魔導師が百人現れようとも、彼は勝てる自身がある。
そしてそれだけの魔力・技術・経験・能力を保持している。

別に予想する意味が無い事を悔いても意味が無い。
だからあっさりと考える事を変える。やはり考える内容は、浮鳴遥に関して。

『マスター』
「ん？　何だ。ニル」

唐突に彼のデバイスが話しかけてきた。

『遥さんの能力は何なのでしょうか？』
「……あれ。言っていなかったっけ？」
『はい』

自身のデバイスに言っていなかったことに違和感を覚えながら、彼女の能力を説明する。

「浮鳴の能力は――スキルを作るスキルだ」
『スキルを作るスキル……それはつまり、神様のような能力では？』
「まぁ、才能を作る能力とも言えるしな。名付けるなら、『想造力（スキルメイカー）』か？」

想ただけで力を創造する能力、想造力（スキルメイカー）。

「アイツの能力はそれこそ反則級だ。だからアイツの能力値（ステータス）の中で魔法系数値がかなり低かったんだよ」

浮鳴遥はその能力が強力な分、魔法に関しての能力値がかなり低い。魔力値はB（アレ）以上は上がらないだろう。そう行方は予測している。使える魔法も少ない。例え行方が干渉したとしても、そこまで変わることはないと考えている。

「もっとも、魔法だけが弱点じゃないけどな」
『と、言うと？』
「製造時間も必要だし、スキルによっては環境や時間、題名や条件などが必要になってくるしな」

全能な能力、と言うわけではないのだ。

「オレがアイツを勧誘する理由は、そんな強力な能力を持っているからだよ」
『まぁ、確かに彼女の能力は凄いですが……』
「そう。確かにあいつの能力は凄い。凄いからこそ――オレは警戒する」
『……』
「まるで、核爆弾かのようなほどの存在だろ？　アイツ」

能力が目当てで彼女を欲しているのではない。
彼女が爆弾のようなほど、何が起こるかわからない存在(ブラックボックス)だから監視下に置こうとしているのだ。
馬鹿な人間に取られたり、嵌められたりして強力な能力を渡してしまう危険性だってあるのだ。

『ですが、遥さんは至って理知的です。彼女がそうそう騙されることは無いと思うんですが？』
「洗脳とかあるんだぜ？」
『その時はマスターが解けば良いのでは？』
「随時オレが近くに居るわけでもないし、そもそもオレを含めた転生者達は全員――『万華鏡写輪眼』の【神魂命(かみむすび)】によって強力な幻術を掛けられているしな」
『……』

とある転生者が持つ瞳術【神魂命(かみむすび)】の前では転生者であろうが、最高であろうが、最強であろうが……誰にも勝つことが出来ない。
いや、勝つとかそんな話ではない。

「唯一、アイツはオレの敵ではないことは確かだが」
『そうですね。そもそも、原作知識が無い方でしたし』
「前世が前世だ。そもそも【リリカルなのは】すらない無い世界から来たんだから」

さすがの行方も、何が何だかわからなくなるような世界であった。
もっとも、この世界はすでに行方が知っている【魔法少女リリカルなのは】の世界ではない事だけは確かであったが。

◆◆◆

《助けて》

「……そう言えば、もう原作開始なのよね。忘れていたわ」

そして、原作が始まる。
あらゆる不安要素を含んで。

六話　彼の原作直前……彼女の能力（後書き）

名前：浮鳴遥（うきなる　はるか）
性別：女
魔力：Bランク
能力：想造力（スキルメイカー）
　無効脛（ライフゼロ）：スキルを無効化するスキル。作中では行方に使用。
　腑罪証明（アリバイブロック）：どんな場所にも居ることが出来るスキル。作中では行方の目の前で使用。
　事実口異（ライアーカット）：真実以外の言葉を除外するスキル。作中ではキールに使用。

七話　彼女は白いウサギ

原作が始まった。
そのことに関して遥は、ただ事実を受け止めただけであった。
考えていることは、出来るだけ巻き込まれないようにしよう、と言う逃げの思考であった。
そのための能力。戦闘にあまりにも特化していない能力を神から貰い、そして転生してきたのだ。

何が第二の人生を手に入れてまで痛い思いをしなくてはいけないんだ。
二次創作とか出てくるオリ主達の思考が理解できない。
運命を変えて幸せな未来にする？
馬鹿馬鹿しい。中二病（ヒーローごっこ）はさっさと卒業しろ。
結局やっていることは他人を救う事ではなく、自身の自己満足だ。

そんな愚痴を口から漏らさず、内心で吐きながら今後のことを考える。
どこにでも行ける、居れる腑罪証明（アリバイブロック）に、どんな能力でも無力化できる無効脛（ライフゼロ）、あらゆる病気を操り応用で傷さえも治すことさえ出来る五本の病爪（ファイブフォーカス）、相手の視界と同じ光景を見ることが出来、相手の考えていることがわかる欲視力（パラサイトシーイング）、相手の言った真実以外を除外できる事実口異（イアーカット）。
あらゆる能力を創造し、例え巻き込まれてもすぐに脱せられるよう手札を用意してきた。
巻き込まれないようにするのも大切だが、巻き込まれた場合どれだ

け早く脱せるかも考えなくてはいけないのだ。
それほど十分に手札を持ち、さぁ原作に巻き込まれないよう今日は早く帰り、ユーノからの念話が来ないよう結界を張ってから一日を終えよう。
そう考えていたのに――

◆◆◆

「……」

親からお遣いを頼まれ、外に出ていた遥は偶然にも、原作に出ていなかったジュエルシードを拾ってしまった。
拾った瞬間、しまったと気づき捨てようかと思ったが、もしかしたらいつか暴走して遥自身が危ない目に遭うかも知れない、と考え明日の朝にでも主人公の机の中に入れておこう、と決めたのだ。
そして、帰宅しようとしていた道で――ウサギと出会った。

「……うさぎ？」

真っ白い毛並みを持つ真っ赤な瞳のウサギが、彼女の目の前に現れたのだ。
そして彼女の目を数秒ほど見つめたほど、どこかへ飛び跳ねていってしまった。

「こんな街中で、うさぎと会うとは」

原作にはウサギなんて出てこなかったので、これはリリカルとは関係ないだろうと決め付け帰路に戻った。しかし、歩いているうちに気がついた。

――人が居ない。

「……」

ウサギと出会った辺りから人を見かけなくなった。
もうすぐ夜だが、それでもまだ太陽は橙色である。つまりいつもなら街の人達が居る時間なのだ。
なのに、居ない。

「……封時結界？」

術者が許可した者や、結界に進入できるもの以外との空間位相をずらす魔法。
それをいつの間にか喰らっていた。

「……」

これを行った人物の候補として行方が頭に浮かんだが、決め付けはしなかった。
他の転生者が、自分がジュエルシードを手に入れた事を見たのかもしれないし、もしかしたらフェイト達が現れたのかもしれない。
前者なら全速力で逃げるが、後者ならジュエルシードを渡してしまおう。
そう考え、少しの間待っていたのだが……

「……誰も現れないわね」

異常なほどに静かな世界と化している。
待つのが面倒臭くなったので、結界の終点を目指して歩き始める。
もしかしたら誰かが見張っているかもしれないので、能力を使用せずに歩き始める。

そして数分後。

「駄目ね」

まっすぐ歩いてみたものの、結界の壁にすら当たる事はなかった。
結界を視認することは出来ているが、どうにも辿りつく感じがしない。
遠近法とかそんなものではなく……もっと違うものを感じる。

「……」

風景に違和感を感じたので、買い物袋から卵を一つ取り出し下に落としてみる。
置いたのではなく落としたので、当然割れた。
それを見届けてから、彼女はまっすぐ歩き始めた。

「……」

そして数分経ったが、卵が割れた地点に戻ってきてしまっていた。

「なるほど。そう言う類のものね」

術者は対象者の前に現れず、対象者の精神や体力を消費させていく。

そう言う類の術だと考察した。
普通の道ならば【Ａ－Ｂ－Ｃ】であるが、この術の効果により【Ａ－Ｂ－Ａ】となってしまっているのだ。永遠と終わる事のない道筋。

「だけど、私には通じないわ」

自身が持つ腑罪証明（アリバイブロック）により、結界の中であろうとなんであろうと、どんな場所に行ける。つまり永遠と終わらない空間からもあっさりと抜け出せるのだが――

「……あ、あれ？」

腑罪証明（アリバイブロック）が発動しなかった。
そのことにより、初めて遥は動揺した。本当の意味で出られなくなってしまったのだ。

「……」

すでにこれが原作とは関係ないことには気づいている。
しかし、相手がどんな能力を使っているかわからないのだ。
結界と彼女の能力を無力化している能力は、また別物なのであろう事を推測している。
結界の所為で人々が居なくなり、予測であるが……幻術系の力により永遠の道を作られており、そして何かの能力で無力化されている。

「……」

何故、自分がこんなことに巻き込まれているか考える。
転生者だから？　ジュエルシードを拾ったから？
こんなことなら、行方（かれら）達と同盟を組んでおけば良かったと後悔する。

最高の魔導師を自称する行方なら、少なくても魔法の腕には自身があることが伺えるからである。

「さっさと出てきなさいよ。何が目的なのよ」

しょうがないので、正々堂々出てきてもらうことにした。
幻術使い相手に正々堂々も無いかもしれないが。

しかし、相手は反応を示してくれた。

「……」

建物の物陰から白いウサギが出てきた。
一時間ほど前に見かけたウサギだ。

「――え？」

だが、出てきたのはウサギだけじゃない。
大きな満月が突如現れ、夜となったのだ。

「くすくす」

しかもウサギがありえない笑い方をした。
明らかに、使い魔だ。

「……出来れば、人型の姿になってくれないかしら」
「別に良いけど、きっと貴方、驚くわよ」

ウサギが遥の目を見た瞬間、ウサギの姿が消えてしまった。
そして――背後に気配。

「――初めまして」

背後を振り向く。

そこには、光の加減によっては紫色交じりにも見える白銀の長髪を腰まで伸ばした、赤き瞳を持つ少女が街灯の上に座り込んでいる。

服装は女子高生が着る様なもので、ブレザー＋ミニスカートである。

そして、綺麗な髪の上からウサギの耳が生えている。

その姿を見て、遥は自身がすごい表情で驚愕していることに自覚しながらも、それでも驚かずにはいられなかった。

「鈴仙（れいせん）・優曇華院（うどんげいん）・イナバよ。鈴仙って呼びなさい？」

そして、危険（ヤバイ）だと思った。

七話　彼女は白いウサギ（後書き）

この小説ではリジェティカ・エイルッスを出すつもりはありません。
いつか出す作品で出すつもりです。

八話　彼女の原作介入

「はぁ……はぁ……」

遥は屈みながら、乱れた息を整えていた。
髪の毛も乱れていたがそちらに集中がいかず、そのままの状態で移動を始めた。
その代わりにポニーテイルのためのゴムを解き、ストレートにする。
顔見知りに自身の姿を特定されたくないために家でしか外さないゴムを外したのだ。

「なんなのよ一体……」

すでに結界は解除されており、ウサギの使い魔は目の前から居なくなっていた。
そして、遥が拾ったジュエルシードも、無くなっていた。
言ってしまえば、奪われてしまったのだ。

「……」

敵は幻術使い。
いつの間にか奪われ、いつの間にか目の前から消えていて、いつの間にか結界が無くなっていた。
彼女が長時間結界を維持してまですぐに奪わなかった理由はわからない。
推測だが、能力が使えないかどうかの確認をするまで現れるつもりが無かったのであろう。

だが、遥が能力による脱出を図ったが失敗したのを視認して、前に現れたのだろう。

そして奪われ結界が解かれた後に、遥は全速力でその場から逃げた。文字通り逃げた。能力とか考えられず、逃げた。

相手は使い魔。

戦闘はもちろん出来るだろうし、幻術を見抜く能力だって思いつかない。

遥の想造力（スキルメイカー）は何の能力でも作れるわけではない。

規定・空間・場合など、色々な規則を以て能力を作ることが出来る。

逆に言うと、条件外のものになると能力を製作できない。

そして、幻術と遥の相性は悪かった。

ただそれだけのことだ。故に、幻術対策がまったく出来ないのだ。

「あ〜あ。嫌になるわね……」

空は本当に暗くなっていた。

幻の夜空ではなく、本当の夜空。

溜息を吐きながら、彼女は家路に戻る。

――この時、能力を使って帰らなかったのが仇となった。

「……え？」

曲がり角の向こう側で思わず見てしまった光景。

そして、少女と目が合ってしまった。

高町なのはと、目が合ってしまった。

「はる、かちゃん？」

「――――」

彼女は金色の毛のフェレットを抱きかかえており、その視線の先には黒い『何か』が存在していた。

最悪だ、と思わず呟いてしまったが、その声音は『何か』の叫び声によってかき消されてしまった。

そして『何か』は飛び跳ね、なのはを踏み潰そうとする。

「ちっ……！」

しかし遥がすぐさま彼女の体を抱きかかえ、すぐに腑罪証明（アリバイブロック）を行い少し離れた場所に移動した。

その現象になのはとフェレットは驚いていたが、遥はなのはを降ろし、

「驚いていないで。今はこの状況をどうするかだけ考えて」

と言うと、思い出したかのように『何か』を一人と一匹は見た。

そして、フェレットが遥を見つめ質問してきた。

「貴方は魔導師ですか？」

「……一応ね」

「でしたら、これを使ってアレを封印してください」

フェレットはどこから取り出したのか、赤い宝石を見せてきた。

それをほんの少し見つめた後、

「無理ね」

あっさりと否定した。

「え……」

「私は半人前どころか三流よりもっとしたのレベルよ。それも戦闘向きじゃないし、才能も無いわ」

「で、でも……」

「むしろ、彼女の方が適材じゃないのかしら？」

遥がなのはを見ると、それを応用にフェレットもなのはを見た。いきなり自分が上げられた事に少し驚いた。

「え……私！？」

「そうよ。見たところ、私以上の魔力量あるし」

「ど、どのくらい……？」

「私が十円だとしたら、貴方は五百五十円ほどの価値はあるわ」

「ど、どのくらいかわかり辛いかも……」

「あ、あの……その方は魔法とは……」

「関係ないわね」

『ユーノ様』

と、そこで赤い宝石が反応した。

「わ、しゃべった」

『そこの遥様よりも、彼女との方が適合率が高いと思われます』

「れ、レイジングハートまで……」

フェレット……もとい、ユーノは赤い宝石（デバイス）の発言に表情を険しくしながらもどうするか考えていた瞬間――

「なのは、平気か！」

上空から大量の魔力弾が降ってきて、『何か』に攻撃していく。
銀色の光を放つ、火の弾や風の弾、水の弾や氷の弾に雷の弾である。
そして現れたのは――中島貴樹である。

「貴樹君！？」
「えっと……彼は誰でしょうか？」
「クラスメイトよ。もっとも、彼も高ランク魔力量の魔導師だけど」

その言葉に驚くユーノ。
この世界は魔法技術が無い世界のはずだ、と考えるが今はそれよりも、

「なのは！　悪いが俺は封印魔法を持っていないんだ。だからお前がアイツを封印してくれないか！？」
「わ、私が……？」
「あぁ！」

勝手に進んでいくが、遥は気にしない。
後はテンプレ通りに終わるであろうと思ったからだ。

その後、なのはは貴樹に頼られたためか、嬉しそうにレイジングハートを起動させ、そして『何か』を封印した。
そのすさまじさにユーノは呆然としていたが、遥自身は今後何を話せば良いのか、内容を考え始めていた。
中島貴樹が介入する事を前提として、自分がどうすれば原作にこれ以上介入関わらないように出来るか、頭の中で構築し始める。

八話　彼女の原作介入（後書き）

今回は雑でした。あと、ｇｄｇｄ。
実はと言うと、今日は投稿するつもりがありませんでしたが……一応思い浮かんだので投稿。結果、雑になってしまいました。

すみません。

Ｐ．Ｓ
作者はポニーテイル萌えです。
異論は認める。

九話　彼女の以上／異常、終了……彼の以下／異化、始めよう。

中島貴樹――彼は転生者である。
魔力値ＳＳＳランクで、五属制御（エレメンタルハンド）の稀少技能（レアスキル）を持つ魔導師。
しかも『ニコポ』と『撫でポ』も貰い、転生してきた転生者である。

そんな彼は原作が開始するまで我流で魔法の腕を鍛えていた。
そしてそらなりに強い魔導師となった頃に原作が始まり、高町なのはの元に向かった。
そこで黒い『何か』を魔力攻撃を行い、なのはを魔導師として覚醒させ、封印させた。

――そこで、気づいた。

浮鳴遥……クラスメイトで、月村すずかの隣席の少女。
クラスで唯一、彼に好意を抱いていない少女である。
そんな彼女がユーノ近くに存在していたのだ。

「アイツも転生者だったのか……」

面倒臭そうな表情をしている遥を見ながら呟いた。

◆◆◆

公園。
あの場に居たらまずい、と言うことで移動したのだ。
そこには当然、遥も居た。

そして魔法やジュエルシードのことを聞き、なのはと貴樹は参加する胸をユーノに伝えた。
しかし、遥は――

「私はパス」

参加しようとしなかった。

「え……でも、ジュエルシードってものは危ないんでしょ？　だったら、回収しなくちゃいけないんじゃ……」
「そうね。だけど、さっきも言ったとおり私には魔導師としての才能は無いし、足手纏いになるだけじゃない。落ちこぼれも良いところだわ」

自虐的な言い方ではなく、ただ事務的な言い方をしていた。

「それに、適材適所って言う言葉があるでしょ？　全然適材じゃないわ」
「……」

その間、貴樹はずっと考えていた。
この女、何が目的だ？　と。
しかし、遥の目的はあっさりとしていたものだった。

「簡単に言っちゃうと、私は関わりたくないの。そう言うのは……時空管理局だっけ？　その組織にさっさと連絡して回収してもらうべきよ。そう言う危ない事、専門家に任せるべきでしょ」

右手の甲を見せるかのように上げた瞬間、爪が一気に伸びた。

「え……」
「とりあえず、その傷は治しておくわ」
五本の病爪（ファイブフォーカス）によってユーノの怪我を治す。
その能力に驚いている三人に遥は背を向け、
「私の介入劇は、ここで終わりよ。以上／異常、終了」
去っていった。
ちゃんと買い物袋を持って。

◆◆◆

「甘く見ていたわ……」
帰路に戻りながら、遥は呻いた。
「原作介入をちょっとでもしちゃうなんて……」
自分の行動を反省しながら空を見つめた。
思えば、このお遣いを頼まれた時点で間違いだった。
頼まれた時、必死に拒否すれば自分は介入しなかったのでは？　と考える。
そうすれば、ジュエルシードを拾わずウサギの使い魔とも出会わなかったのでは……。
「……あ。彼等にうさぎの事ぐらい言っておけば良かったかも」

ま、別に良いか。
そう結論に達し、遥は家に戻った。
――その後、かなり叱られたが。

◆◆◆

翌日。
遥は親に長い時間説教を受け、少し寝不足気味であった。
浮鳴家の家は学校に近いので歩きで登校しているため、原作主人公達が乗車しているバスには乗っていない。そのため鉢合わせる事はないが、今日と言う今日は面倒臭く感じた。
遥が欠伸をしていたところ、背後から……

「おはよう。浮鳴先輩」
「……あぁ、キール。おはよう」

キールが挨拶してきた。
長い銀髪の少女はニヒルな笑みを浮べながら、接してきた。

「まったく……先輩が原作に関わらない詐欺を行うとは思わなかったよ。なんだい、バニングス先輩に習ってツンデレでも始めたのかい？」
「うるさいわね。私だって、関わりたくなかったわよ」
某金髪の少女がバスの中で誰がツンデレよ！……と叫んでいたらしいが、遥は知らない。

「クックック……いや、失礼。確かに浮鳴先輩からは原作に関わりたくない意志はしっかりと感じられる。だが、少し油断しすぎなのでは？」
「……まぁ、私もそれくらいはわかっているわ」
自分でも失敗した、と自覚していた。
改めて他人から言われるとさらに自覚させられる。
「……と言うより、何で貴方は知っているのよ」
「僕は感知系能力者なんだよ。行方先輩も知っていると思うよ？先輩が介入してしまった事を監視魔法（サーチャー）辺りで」
「……」
そもそも、遥の実力は行方の能力で知られてしまっているが、遥はと言うと二人の実力を知らないわけだ。正直、キールの方はと言うとまったく未知数なのだ。
恐ろしい事に。
「一つだけ、質問させてもらう」
「何かしら」
「――何で原作に対する防衛なんて練っているの？」
一瞬、何を言われたのか理解出来なかった。
「現実的な暴力沙汰から逃亡するための防衛能力は理解できるけど、原作を介入しないための力とか……意味が分からないな」
「……」
「よく言うだろ？　幽霊は怖がっている子の元へ現れるって。つまりアレだよ。君は原作を意識しすぎたから原作介入しちゃったんだ

よ。数々の二次創作でも原作に介入しないと言った転生者達も、最後の最後にはちゃっかり介入していたりするだろ。結局は、心のどこかで原作を意識しているから介入しちゃうんだよ。その意識を、無くさない限り、君はまた介入しちゃうよ」

「……」

確かに、その通りかもしれない。

介入したくないとかほざいていたくせに、かなり原作の事を考えていた。

好きの反対は嫌いではない。無関心だ。

「……そうね。少し考えを改めてみようかしら」

「うん。それが良いと思うよ」

肉体年齢では一歳年下のキールであるが、かなり大人っぽい。

確かに転生者の中身の年齢は見た目とは一致しないものだが、それでも年上と言う感じをさせる。

「……ねぇ、キール。貴方の前世って――」

「ストップです。浮鳴先輩」

前世のことを聞こうとした瞬間、遮られた。

禁忌（タブー）だったか？　と思いキールを見てみるが……キールは遥ではなく、前を見ている。

彼女達はすでに学校の門を過ぎている。

つまり、彼女達の前にあるのは校舎だけなのだ。

――だが、キールは校舎より少し前の位置の場所を見ていた。

そこには一人の少年が立っていた。

遥と同年齢であろうことが伺える背丈。
顔は平凡そうな、どこにでも居そうな顔だ。
黒髪黒目。服装は普通の服屋で買えそうな服を着ていた。
それでも遥の目には、普通と言う印象が浮かばなかった。

「初めまして、ボクと同じ転生者のお二人さん」

彼は挨拶をしてきた。
それと同時に封時結界を張った。
自身の力で張るタイプではなく、既に用意しておいた物を発動する借り物タイプの結界だった。

「転生者ってことは、それなりに強いんだろ？」

戦闘狂……否。

「つまり、殺しがいがあるってことだ」

――戦闘凶。

ナイフを逆手で持ち、上に掲げ宣言した。
まるで主演として開始の合図をするかのように、言った。

「これより、零崎狂識（ぜろざきくるしき）による零崎を――以下／異化、始めよう」

殺人宣言を。

九話　彼女の以上／異常、終了……彼の以下／異化、始めよう。（後書き）

超展開。
原作に関わらないと誓った瞬間、殺しの宣言が来ました。おいおい……。

本当はユーノ君達との会話を多くするつもりでした。
使用した能力の説明だとか……しかし書き下ろすのが書いている途中で難しく感じたので、断念し投稿。

遥の以上／異常、終了。
これは魔法との関わりを異常で終えると言う意味と、魔法と言う異常への介入を終える、と言う宣言。

狂識の宣言は逆になります。
以下はこれから先。異化は非道的な世界に成る。
そう言う意味ですね。

次回は戦闘になるかもしれません。
それでは、この辺で。

九．五話　彼女はウサギで使い魔（前書き）

無印辺りでは原作をマジで回避する物語だからリリカル成分がかなり足りない……。なので、今回は他のキャラで話を書きました！
時間軸で言えば、遥達が戦闘した日の放課後です。

次回は遥の話です。

九．五話　彼女はウサギで使い魔

ウサギの耳を生やしている少女、鈴仙・優曇華院・イナバ。
利き腕である右手の中指には紫色の宝石が嵌っている指輪と、人差し指には藍色の宝石が嵌っている指輪を嵌めている。
彼女の身長は小学三年生ぐらいであり、それは主の消費する魔力を節約するために小さい姿をしている。主が同じくらいの背をしているから、とも言えるが。

「……駄目ね。この辺りにはジュエルシードが無いわ」

主と違い、魔法が優れている鈴仙は魔法的手段でジュエルシードを探知してみたが見つけられなかった。彼女の『瞳』を使えば見つけられなくも無いが、主と違って『瞳』を使えば大量に魔力を消費する事になる。故に一般的な魔導師と同じ方法で探査している。

「今現在、ジュエルシードは一個。あの転生者から奪った物だけとは……」

原作を知っていればあっさりとジュエルシードを手に入れられるだろうが、生憎主は原作を知らない。
否、【魔法少女リリカルなのは】などと言う創作物が無い世界から転生してきたのだ。
知る事などできない。

「――ん。魔力反応」

突如神社周辺に出現した魔力に少々驚きながらも、彼女は呟き確認する。

幻術魔法により姿を隠しながら、ジュエルシードの魔力反応がした元へ飛んでいく。

鈴仙が向かった先の神社には大きな犬がいた。
さしずめ、ジュエルシードと融合したのであろうと推測した。
封時結界を展開し、手を銃の形にする。

「バンッ」

中指に嵌っている指輪が紫色の光を放ちながら、指先から銃弾型の魔力弾を一発放つ。
すると魔力弾が途中で増殖し、一から百に増えた。
その光景に驚いて動けないでいる犬に全て当たり、あっさりと戦闘不能になった。
（女だけど）ガンマンみたいに（指先だけど）銃口に息を吹いてから近づき、ジュエルシードを封印した。

「それじゃ、次に行く――」
「あ、あの！」

次のジュエルシードを探しに行く準備をしていると、声を掛けられた。
未だに結界を展開しているため、許可した者以外は入れないはず。
侵入者（れいがい）を覗いて。

振り向く。
そこには彼女の主と同じ学校の制服を着た少年と少女、そして使い

魔であろうフェレットが居た。
このメンバーぐらいは知っている。原作の主人公達だ。
「あっちゃー。少し遅かったか……」
転移使ってでも早く来るべきだった、と反省していたら、気づいた。
男の子の方が鈴仙の姿を視界に捉え、驚いている。
「な、何でお前が……」
「それは当然、私もジュエルシードを狙っているからよ」
「そうじゃない！　何で優曇華がここ居――」
居るんだよ。
そう言おうとした瞬間――殺気が鈴仙から溢れ出た。
思わず口を閉ざしてしまうほどの。
「何で私の名前を知っているかとか聞きたいのは山々だけど……でも、これだけは言わせてもらうわ。私の事を師匠以外が優曇華と呼ぶ事を、私は非常に嫌っているわ。だから、鈴仙って呼びなさい。鈴仙・優曇華院・イナバ……の、鈴仙」
何故彼が彼女の名前を知っているか心当たりがあったが、敢えて言わず、主張するかのように……そしてなのはとユーノに自己紹介するように、言った。
「師匠……そいつの名前は八意永琳（やごころえいりん）って名前か？」
「……誰？」
初めて聞く名前に、鈴仙は首を傾げた。

「違うのか？」
「違うわ。私の師匠兼主人は……そうね。『狗』とでも称させてもらうわ」
――狗？
幻想卿関連で狗……犬と言えば、と考えている間、
「ねぇ、ユーノ君。あの娘の頭からウサギさんの耳が生えているんだけど……ユーノ君みたいにしゃべられるみたいだけど」
「……あのね、なのは。僕は一応人間なんだよ？　今は変身魔法でこの姿になっているけど」
「えぇっ！？　そうなの！？」
「そうだよ。……あの使い魔のことだよね？」
「使い魔……？」
「そうだよ。動物を依り代とした魔法生命体のことだよ。主と契約をして、そして主から魔力を常に供給してもらう事によって魔法を発動できるようになったりするんだ」
「へぇ……」
「高性能の使い魔を生み出す場合、その消費魔力の量は凄まじい。だけどその分、一般の魔導師よりも上をいく使い魔も居たりするんだ」
「じゃあユーノ君。あの鈴仙ちゃんって、どのくらいすごいの？」
鈴仙の方をまっすぐなのはは見て、ユーノに聞いた。
ユーノもつられるように鈴仙を見て、
「多分……Sぐらいだと思う」
重い調子で言った。

「なっ！？　Ｓランクだと！？」
「えっと……ユーノ君。昨日、遥ちゃんもＢだとかＡＡＡとか言っていたけど……どう言う意味なの？」
「ランク、と言うのは魔導師ランクのこと。つまり魔導師の実力レベルさ」

ユーノは鈴仙がこの時間、襲ってこない事を疑問に思いながらも話を続ける。

「昨日の彼女が言ったのは魔力量のこと。つまり魔導師ランクとはまた違う物だけど……彼女が言ったとおり、なのははＡＡＡランク。つまり彼女は――なのはの三段階ほど上の実力持ちってことだよ」
「……」

ユーノが、なのはが五百五十円ぐらいだとすると、彼女は千円ぐらいだね、と苦笑いしながら言う。
しかし、その圧倒的実力差になのはは絶句してしまう。
思わず驚きながらも、なのはは隣の貴樹を見る。
強い彼なら――そう思いながら見たが、彼は首を横に振った。

「……」

“この”中島貴樹はそれなりに頭が良い。
そしてユーノが言った通り相手がＳランクならば……勝てるはずがない、と考えた。
魔力値がＳＳＳランクと言えど、それが＝（イコール）で実力になることではないことぐらい知っている。
そして何より――

「何で霧と雲のマーレリング指に嵌めているんだよ……」

彼女の右手に嵌っているリングを見つめ、溜息を吐いた。
『幻想卿』＋『ＲＥＢＯＲＮ！』が合わさっているのだ。能力が未知数なんてもんじゃない。

「私の実力を考察しているところ悪いけど、私はそろそろ帰らせてもらうわ」
「――え？」
「確かに貴方達もジュエルシードを狙っているようだし、持っているみたいだけど……そこな魔導師三人と戦ってまで奪うつもりは無いわ」

さすがに面倒だしね、と呟き――転移魔法を展開した。

「なっ、移動魔法！？　彼女は逃げるつもりだ！」
「逃げるとか言わないでよ。お互い、やることは戦闘じゃなくジュエルシードの回収なんだし」
「で、でも！　それはユーノ君の何だよ！」
「……」

なのはが会話に介入してきたので、そちらを見た。
赤い瞳がなのはの姿を捉えた。
真剣な表情をして――瞳に、黒色の勾玉模様を浮かばせて。

「え……何？」
「ううん。別に。ただごめんなさいけど、私の師匠も必要としている物だから――譲れないのよ」

そう言って、転移魔法を発動した。
鈴仙が居なくなった事により、自動的に結界は消えた。

九．五話　彼女はウサギで使い魔（後書き）

まぁわかるでしょうけど、この作品に出てきている鈴仙は【東方】に出ている本物の鈴仙とは違います。幻術とか使いますけど。単なる魔改造されたウサギの使い魔です。姿形口調声が似ているだけの。

十話　彼は凶器／狂気（前書き）

【零崎】

人を快楽だとか悦楽だとか、そう言った理由で殺すわけではない殺人鬼。

ただ殺したいから殺す、殺人鬼。そこに理由は無く、無意味にただ殺す存在。

作品：戯言シリーズ・零崎シリーズ、に登場

十話　彼は凶器／狂気

零崎狂識――名前からして、殺人鬼であろう少年。

「零崎……ねぇ」

「……なるほど。彼は僕達と同じ“前世持ち”か」

「……？　前世の記憶なら転生者は全員持っているはずでしょ？」

転生者……簡単に言うと死んで転生した者。
多く存在する二次創作では、必ずと言って良いほど神がその転生に絡む。
そして神が関わらずとも、転生者は前世の記憶を保持しながら次の人生が始まる、と言う物語が多い。
遥もその類である。

「ん～……ちょっと違うんだよ。普通の転生者と“前世持ち”の転生者は」

「……後で教えなさいよ」

「了解」

いつもより真剣な表情をしながら、しかしそれでも笑みを消さないキールを見据えて、目の前の少年を見る。
手には数字が刻まれた、よく切れそうなナイフが一本。それしかないのに、圧倒的凶悪さがこの場を支配している。

「え、嘘……」

「どうしたんだい？　浮鳴先輩」

「あのナイフ……ＥＣディバイダー？」

数字が刻まれている武器――【一魔法少女リリカルなのは《このせかい》】ではＥＣディバイダーと言う物が大体は当てはまる。
この時代ではまだ出てきていない武器であるが、神からもらったのであれば、納得が出来る。

「あ、もう見抜いちゃった？　ご名答！　僕が神様に頼んだ改造ＥＣウイルスによって強化された肉体と武装なんだぜ！」

自慢と言うよりも、世間話するような口調で言ってきた。
つまり調子に乗った転生者ではないと言うことだ。

「……どうしよっか。魔法が効かないだろうし……逃げる？」
「無理だね」

あっさりとキールは言ったが、遥自身もそれに関しては頭に浮かんでいた。

「まぁ、そうよね。アイツが零崎（さつじんき）を名乗るってことは、最終的に人を殺せれば良いんだし」

校舎を見つめながら、遥は呟く。
ここで二人して逃げれば遥とキールは無事であろう。だが、学校にいる生徒や教師の命は保障しかねない。こんな殺人鬼を誰が保障してくれるもんか。

（何か方法ある？）

相手に作戦を聞かれない様に念話に切り替えた。

（簡単な話さ。僕達とは戦ってはいけない、と戦意喪失させてどこかへ撤退させてしまえば良いのさ）
（……どうやって？）
（君には『五本の病爪（ファイブフォーカス）』があるじゃないか）
あらゆる病気を操るスキル――五本の病爪（ファイブフォーカス）。
（……でも、これは病気を操るんであって、ウイルスを操るものじゃないわよ？）
（そうだね。――でも、ウイルスを死滅させる病気も作れるんじゃないかな？）
「……」
その発想は無かった、と思ったが、
（私、あのウイルスの成分知らないわよ？）
（僕が知っている。このデバイスに載っているから、それを見ながら調整してみて）
（時間が少し掛かるけど……）
腕輪を外してこちらに渡してくる。
渡してもらって、デバイスだと気がついた。
「僕のデバイスの“テール”さ」
「テール……？　これ、インテリジェント？」
「元、ね……」
笑いながらも、少し悲壮感を含ませた笑みを浮べた。
そのことに首を傾げながらもデータ採取を始める。

「さて、殺人鬼君。僕が相手になろう」
「へぇ。それじゃ、相手になってもらおうか」

◆◆◆

「さて、どうしようか……」

キールは冷静にECウイルスの事を考え始める。
未来の技術では感染者との対戦方法が編み出されているが、この時代にはまだ存在していない。
つまり対策が無い――普通ならば。

「まぁ、転生者（ぼくたち）には関係ないけどね」

ポケットから小銭を取り出す。
狂識がナイフを刺すつもりで突っ込んでくるが――

「戦闘能力があるとしても、戦闘技術はまだまだだよ」

電撃を浴びせた銀貨を相手に向かって撃つ。
それは科学的計算方法により――超電磁砲（レールガン）となる。

「……っ！」

いち早く攻撃に気づいた狂識は右に避けたが、左腕が吹っ飛ばされた。
それを見届けた後、すぐに距離を置き、腕を再生させる。

「すでに病化しているのか……」
「……ふむ。君の能力は御坂美琴（みさかみこと）の能力かな？」

どちらとも相手の能力を分析し始める。
情報とは、相手を打ち負かす弱点にもなるからである。

「なるほど。確かに超能力ならＥＣウイルスの対魔なんて関係ないしね」
「お生憎だけど、これは超能力じゃないよ」

肩をすくめながらキールは言う。
そして“くい”っと指を動かした瞬間――狂識の四肢が全て落ちた。

「……へ？」
「さぁ、どうする殺人鬼。凶器は地面に落ちたがどうやって人を殺すんだい？　もしかして、刃（は）に掛けて歯（は）で僕を殺そうとするつもりかい？」

キールの言葉を聞きながらも、周りをしっかりと狂識は見た。
そして細い光を見つけ、

「……まさかこの世界に曲絃師が居るとは思わなかったよ」
「単なる糸使いだよ」

驚嘆した。
彼は前世の世界に存在した《病蜘蛛（ジグザグ）》の技術ほどでもないが、かなりの糸使いの技術をこの魔法の世界で見ることになるとは思わなかったらしい。

「まぁ、これでも元時空管理局元帥だ。それなりには強いよ」

シニカルな笑みを浮べながら、キールは言った。

十話　彼は凶器／狂気（後書き）

【ECウイルス】（エクリプス）
人工的に生み出されたウイルス。感染者には強力な破壊衝動と殺人衝動が襲い掛かる。その代わり、身体を兵器化とする。
ウイルスの侵蝕が進めば進むほど、超人的な能力を得ていく。

例：肉体再生・肉体硬化・肉体弾力化など

【ECディバイダー】
感染者専用の武装。
これを発動した瞬間から肉体再生以上の能力が発揮され、さらには完全に魔法が効かなくなる。物によって違うし、デバイスのように変形も出来るようだ。
しかしデバイスと違い、明らかに質量兵器に分類される。

質問ですが、『週間ユニークアクセスが多い順』っていつを基準に変更されるのでしょう？

十一話　彼の予約と条約

「……」

遥はキールの戦いを見て、聞いて、驚愕する。
超電磁砲（レールガン）撃った癖に、御坂美琴の能力じゃないと言うのにも驚いた。
しかし、元時空管理局元帥と言った言葉の方が驚いた。

――“前世持ち”

これがキーワードになるのだと、遥は考えていた。
普通の転生者とは違う転生者……キール。

「て言うより、普通に勝てるんじゃなかしら……？」

すでに相手は戦闘不能と言って良いほどの状態である。
異常なまでの戦闘の能力・思考・方法を誇るキールの前に、魔導殺しを備えた殺人鬼であろうと倒れてしまう。

「……」

もう少し、深く考えたほうが良さそうだと思い直す。
彼方行方に、キール・ローレライ。
さらに目の前の殺人鬼の名字を名乗る少年。
この世界は、単なる転生者が複数居る世界ではないらしい。

◆◆◆

――『立体視点(ソリッドポイント)』

一定範囲内なら三次元的に細(すべて)かい場所まで見ることが出来る能力。
距離はと言うと、ミッドチルダの都市クラナガン全域を見渡せるほど。

「……あちゃー。行方先輩、やっぱ居ないや」

いつもなら既に現れているはずの彼方行方が、まだ登場していないのに疑問を抱いたのだが……海鳴市全域を見たが、彼は存在していなかった。
確かに、やり方次第ではキールでも目の前に居る殺人鬼をどうにかすることが可能だ。
ただし、殺す事を前提とした手段だが。

「どうしようかねぇ」

だが、彼には予約が居るのだ。
行方やキール以外ならともかく、行方やキールが殺人鬼を殺してはいけない。
そう言う、予約であり条約なのだ。

それと――

「……」

超面倒臭そうな気配が、学校(こちら)に近づいてきているのだ。
立体視点(ソリッドポイント)で原因を見つけたが、背筋が凍るような思いをした。

さっさとこの戦闘を終え、教室に逃げ出したいほどの存在である。
「さぁ、殺人貴君。どうするんだい？」
出来ればさっさと逃げ出して欲しいんだけど、と言う本心を隠しながら聞く。
狂識は四肢を再生させながら、考える。
「……そうだね。もうちょっと居させてもらうよ」
ナイフを拾い自分に突き刺す。
リアクトだ、と遥は気づいたが、
「……あれ？」
「残念ながら、リアクトは出来ないよう小細工をすでにさせてもらっているよ」
リアクトが発動せず、ＥＣウイルスの真価が発揮できない。
何故か。
「……う～ん。ちょっと、面白くない展開だな」
「そうかい？　なら、さっさとどこかに行ってほしいんだけど。……そろそろ浮鳴先輩も、君のＥＣウイルスを死滅させる病気を製作し終えた頃だろうし」
「ちょ」
いきなり自身の名前を出されて間抜けな声を遥は出してしまった。
しかも酷いネタバレだ。作戦内容を敵に言ってしまったのである。
（今回の目標は、目の前の零崎狂識をここから居なくさせることだ。

つまり、戦意喪失してどこかに行ってもらえれば良いんだよ）
（……じゃ、つまり、私の事を言って、これ以上戦うのは危険だと知らせたわけかしら）
（そう言うことだよ）

念話で次の作戦内容を伝えた後、キールは狂識を見据える。

「さぁ、どうするんだい？」
「……なるほど。確かに彼女は脅威的な存在らしい。どう言った能力かは知らないけど――つまり、殺せば良いんだよね？」

最悪な展開になった。
むしろこれから狙われる原因を作ってしまった。暗殺されるかもしれないのだ。

「ど、どうするのよキール！」
「……しょうがない。少し本気を出して彼を止めるしか――」

「――は？」

いつの間にか、狂識の体中には大量の『鍵』が刺さっていた。
一般的な銀色の鍵に、自動車の鍵に、閂（かんぬき）に使われるような鍵に、バチカン市国の国章に使われている『天国の鍵』と呼ばれている物と同じ形の鍵。

ありとあらゆる鍵が、狂識の体に刺さっていた。

「ぐっ、がはっ」

喉にまで刺さっていたため、引き抜いた際に口から血を吐いてしま

った。
そして喉が再生したのを確認してから、校長の銅像の上に座っている少年を睨む。
そこには聖祥小学校の服を着ている、白髪(しろかみ)に黒目の少年が居た。
顔立ちは整っている方であるが、何故かずっとは見ていられないほどの、『何か』を彼からは感じる。
手元には鍵が存在しており、それを見せびらかすように空中に上げて掴む、と言う動作を繰り返していた。
彼は笑みを浮べながら、
「やめて欲しいんだけど」
と、言った。
「……何が？」
「いやいや、俺がこれから通う学校の人間達を、アンタは殺そうとしていただろ？　そのくらいの殺意をアンタから感じるぜ」
「……」
二人の少年が話している間、一方キールは驚いていた。
銅像に座っていた少年の気配を察知できなかったし、今でも感じられない。
それどころか、先程までは姿を立体視点(ソリッドポイント)で捉えていたのだが、数分前に急に消えて、この場に現れたのだ。
だから、キールは黙って二人の会話を見届ける事にした。
少しでも、情報を得るために。
「まったく……廃校にする存在は代表的には俺達だろ。他の、しか

もこの学校の人間じゃない奴に、廃校にされたくないね」
「……廃校は前提かい？」
「さぁね。俺は気まぐれな性格をしているから、何もしないで卒業するかもしれないし。だから、俺から学校を奪うなよ」
「……」
狂識は自身の体中に刺さっている鍵を一度見たあと、
「ところで、君は一体なんて名前なんだい？」
と、聞いた。
その言葉に嘲笑するような笑みを浮べながら、
「普通、自分から名乗るもんだろ」
と言った。
「ま、俺は心が寛大だからな。そこの人を殺す事しか出来ない鬼と違って、俺は他人にちゃんと自己紹介が出来る人間。わ～、すごいすごい～、ってね」
「……一々イラつく言葉で言うね」
「さて、それじゃお望みどおり、自己紹介しよう」
狂識の言葉には答えず、先程聞かれた質問を敢えて答え始めた。
「初めまして、これから私立聖祥大学付属小学校に通う――人類最低で過負荷（マイナス）な男、現実否定主義者の水俣破白（みなまたはしら）だ。よろしく頼むな」

◆◆◆

異世界。
どこかの世界に、二人の少年が居た。

「悪いな。付き合わせちまって」
「そう思うんだったら、この幻術を解いて欲しいんだが」

片方は、行方。片方は、藍色の髪持つ少年。
藍色の髪を持つ少年は、行方と同じくらいの背であることから同い年である事が伺える。

「それで、『狗』。お前はどうするんだ？　これから」
「もちろん時空管理局に居る奴らと、零崎狂識に復讐するさ」

瞳には、黒い勾玉模様を浮かばせながら。
『狗』と呼ばれた彼は、そう言った。

「……じゃあ、一つだけ言っておく。海鳴市に、現在殺人鬼が居るぜ」

そして、海鳴市が荒れるような一言を行方は言った。

十一話　彼の予約と条約（後書き）

今回、遥は空気でした。

現在の転生者：遥・行方・キール・狂識・破白・中島・？？――合計、七人

十二話　彼女の同盟加入（前書き）

今更だけど、ちゃんとした内容に成ってしまったので、十話ぐらいで終わるかも、何て予定は消えた。

今回は短いです。

十二話　彼女の同盟加入

「――どう言うことかしら」
「ん？」

中庭。
そこでお馴染みと化しているメンバーで昼食を取っていた。
メンバーは行方・キール・遥である。

「どう言うことって、何が？」
「今朝の戦闘の時、何で来なかったのかしらと言うことよ」

行方に向かって遥は質問する。
あの過負荷（マイナス）を名乗る少年が現れた後、殺人鬼（ぜろざき）の少年はどこかへ行ってしまったのだ。殺人鬼にも、戦って良い相手かどうか判断できる。そして破白は戦って良い相手では無い、と結論に達し逃走したのだ。そしてその後、破白が教師の元へ行ったところで、やっと緊張の糸が解（ほぐ）れたのだ。

「……別にオレはヒロインがピンチに陥ったら現れる主人公じゃないんだぞ？」
「わかっているわよ。そんなご都合主義が無い事を」
「まぁ、確かにアレは僕も流石にヤバイと思ったね。そもそも行方先輩はどこに居たんだい？」
「異世界」
「「……」」

遥はジト目を、キールは苦笑を行方に向けた。
そして数秒経った後、遥は溜息を吐いた。

「……本当に、この同盟に入って良いのかしら」
「ん？　入るのか？」

行方が唐揚げを箸で拾いながら聞いた。

「入るつもりだったんだけど、ね。ほら、昨日原作開始しちゃったじゃない？　私」
「悪い。異世界に行っていたから知らね」
「……」

遥は引き攣らせた笑みを浮べた後、溜息を吐いた。

「まぁ、しちゃったのよ、私。だからこの同盟に入れば何とかなるんじゃないかしら、と思ってね」
「その判断は悪くないね」

遥の言葉を、キールが肯定した。

「正直言うと、僕達の同盟って言うのは口約束じゃないんだよ」
「……と言うと？」
「とりあえず、僕達の同盟に入ってくれない限り言えない事だってあるし、聞かせられない内容だってある。これは僕達の意図ではなく、世界からの制限なんだよ」
「……」
「だが、僕達の同盟に入ればその制限が無くなるんだよ」
「……途中で抜けたら？」
「得た分失う」

キールと遥が会話していたところ、行方がいきなり介入してきた。
行方の方を見ると、エビフライを食べていた。

「……」
「……何だよ」
「いえ、別に」

海産系の甲殻類が好きな遥にとって、目の前で淡々とエビフライを食べる行方の行動は理解しがたかった。しかしその感情をグッと抑え、弁当に入っている昨日の残り物の毛蟹の身を口に含む。
ふと、遥が行方の方を見ると鞄から本を取り出していた。

「それは？」
「契約の書」

行方が本を開くと、そこには契約を記すためのページが備えられていた。
ページの中心だけ四角形に空白が出来ており、その周りは意味不明の文字が大量に書かれている。
その空白の場所に契約内容を記すのだと遥は理解した。

「オレが作った契約書が纏まった本だ。異世界の古代語を組み合わせた契約（ギアス）のページだ」
「これに私が同盟に加入すると書かない限り、私は加入できないわけね」
「そう言うことだ」

弁当箱を片付けながら、行方は筆箱を取り出しシャーペンを取り出した。

「……シャーペンで良いの？　血とかで書くのだと思っていたけど」
「確かに術式は古代語で描かれているが、作られた術式は最新のものだぞ？　そう言った操作は製作者なら簡単に出来るさ」
実際には簡単じゃないんだけど、とキールは呟きながら自身の弁当箱を片付けていた。

「で、どうする？」
「……加入したメリットを教えてくれないかしら？」
「これだ」
行方が自分の鞄からまた違う本を取り出した。
先程よりも表紙が黒い本である。

「それは？」
「オレが製作した、オレの魔導の二分の一が入っている魔導書だ」
「『孤独の書』だね」
「……」
夜天の書のような表紙であるが、全然違う事を、受け取って理解した。

「基盤は夜天の書だが、夜天の書以上の防衛能力だ。と言うか、攻撃能力の方はそこまで無い」
「……闇の書とは違うのよね」
「夜天の書の方だから暴走とかは無いぞ」
「でも、私そこまで魔力無いんだけど…」
「『孤独の書』自体に魔力が内包されている。書自体にリンカーコアがあり、その中にある魔力が減少する度に増殖するようになって

いる。だから魔力の心配はしなくて良い、と言うデバイスだ。アルカンシェルを撃たれようと、完全防御してくれるぞ」
「……」
遥には苦笑いを浮べることしか出来ない。
「それをやるよ」
「そう。ありがたいわね」
シャーペンを受け取り、遥は『契約の書』のページに自身の名前を書き始めた。
「同盟の名称はあるのかしら？」
「ＳＯＳ団」
「またふざけたものを……」
“浮鳴遥はＳＯＳ団に入る事を誓います”と書き、シャーペンを置いた。
すると文字がページに浸透していき……
「これでもう消せないぜ」
「……恐ろしいわね」
消しゴムを取り出し、消そうとしてみるが、無理であった。
「すでに術式の一部と成っているんだ。他の文字が消えないように消す存在の意味を無力化しているんだよ」
「禁書世界の魔導書みたいな状態ね」
遥は行方の事を、ただ魔法が得意だとしか思っていなかったが、改

めて実力を教えられた。
文字通り、最高の魔導師なのであろう、と。

「んじゃ、放課後にお前の家に行って良いか？」
「構わないわ。だけど、家の場所分かるかしら？」
「安心したまえ。僕は感知系だと言っただろ？」

キールの言葉を聞き、何だかストーカーみたいね力ね、と遥は思ってしまった。

「んじゃ、そん時にこの世界の真実を教えてやるよ」

鞄を持ち、行方は立ち上がった。

「それじゃあ、放課後にね」

キールもそれに習い、教室へと向かった
そして残った遥は……

「……そろそろ次の授業ね」

次の授業の仕度をしに、教室へと戻った。
『孤独の書』を持っていきながら。

十二話　彼女の同盟加入（後書き）

次回はこの世界について。

急遽書き出した番外編（前書き）

カップルがイチャイチャする日が今日だと思い出し、急遽書き出しました。
時間軸は、中学三年ぐらいです。

急遽書き出した番外編

厚着姿の少年、彼方行方は現在『翠屋』の箱を右手に提げながら、雪が積もっている道を歩いている。
箱の中にはケーキが入っており、二人分のケーキが入っている。
行方は器用に箱の中の時間をずらして傷まないようにし、自身には温暖化魔法を発動している。

「……うん。思った以上に、遥から貰った手編みマフラーは暖かいな」

数日前にとある少女、浮鳴遥から貰ったことを思い出しながら呟く。
首元だけは温暖魔法を使わなくて良いほど暖かい、と行方は感じていた。

雪が降っている。
白く輝く氷の結晶が空から舞っている。
そしてそんな空を見上げながら、彼は呟いた。

「さっさと帰るか」

早足の状態で帰宅した。

「ただいま」
「お帰りなさい」

玄関(そこ)には彼の養父――ではなく、遥が立っていた。
行方の養父は出張が多いので、友人が少ない行方は遥を呼んでいたのだ。
遥の方も友達が少ないわけではないが、だからと言ってグループを作るタイプではないため、クリスマスは暇だったので行方の家に来たのであった。
そして、遥の言葉で行方は先程ケーキを買いに行っていたのだ。自腹で。

「しっかし……キールの野郎は予定入っていたか」
「……キールは女の子でしょ？　野郎って言うのはおかしくない？」
「気にするな」

行方は箱の中からケーキを取り出し、さらに盛り付ける。
さらにコップを取り出し、冷蔵庫からジュースを出して二人分注ぐ。

「今食べるの？　普通夜なんじゃないかしら」
「多めに買っておいた。今食べる用と夜食べるようだ」
「貴方は乙女か」
「腹が減っていたんだよ」

自分と遥の前にケーキが乗った皿とジュースが入ったコップを置く。

「てか、お前は食べるの？　食べないんだったらケーキ戻すけど」
「いただくわ」

女の子は甘いものが好きなのよ？　それって本当なのか？
そんな話をしながら二人でケーキを食べていく。

「甘いものが好きと言うと、リンディさんだよな」
「私達は直接会ったことないけど……あれ？　行方は会ったことあるんだっけ？」
「前回の人生でな」

行方は自分のイチゴショートケーキの上に乗っている大きなイチゴを、遥の皿に移してやる。
先程食べたそうな表情を少しだけしていたのを行方は気づいていたからだ。

「……ねぇ」
「ん？」
「後でアーチを一緒に見に行かない？」
「別に良いけど」

行方は今夜のメニューを考えていたところを、いきなり言われたので素っ気無く返事してしまった。
しかし遥は彼の性格をそれなりに知っているので、別にそこまで思ったりしなかった。

「偶には二人っきりでさ、ゆっくり歩くのも良いと思わない？」
「ん……そう言えば、転生者とかそっち絡み無しではあんまし話したりしないもんな」

偶には良いかもな、と呟いた後ジュースを飲み干す。
そして遥はチョコケーキを食べている最中、ふと行方が彼女の顔をジッと見ていることに気づいた。

「な、何？」
「クリームが付いているぞ」

行方は彼女の頬についているチョコクリームを指ですくって、それを――遥の口に指ごと突っ込んだ。

「んぐっ」

「……頬を少し紅潮させているが、まさかお前、オレが少女マンガの男の子のように自分の口に含むとでも思ったのか？」

そんなテンプレ存在しねぇよ、と言った後に指を濡れ布巾で拭く。

「……女の子の口に指を突っ込む、ってどう言う神経しているのかしら」

「すみませんねぇ。こちとら、異性感情とか前回の世界で消えているもんで」

「でも、今回の世界では存在しているんでしょ？」

唇を少し尖らせながら、上目遣いで遥は行方に言った。

「まぁ、あるけど……そんなに無いぞ？」

「どのくらい？」

「幼稚園児と同じレベル」

「低っく！？」

予想外の行方の返答に。思わず驚いてしまった遥。

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

「よく性欲を発散するためだとか、快楽を得るためだとか言うけど……」

頬を紅潮させながら遥は言う。
単に恥ずかしいだけなのだが、対する行方は首を傾げながら、
「そもそも、その快楽って言うのがわからないんだよ」
と発言する。
「……まぁ、貴方らしいわね」
「そうか？」
「そ、そうよ。……その分だと、結婚相手とか出来そうにないわね」
「恋愛とかしないしな。たまに告白とかされるけど、どうも冷めた感じで受け取っちまうんだよな」
「……初耳なんだけど。その告白、どうしたの？」
「普通に断ったけど」
行方は皿やコップを集め、洗い場に置きに行った。
その後ろで、遥は行方の返答に苦笑していた。

行方が作った夕食を食べ終えた後。
「……女の私よりも美味しいなんて」
「言っとくが、前回のオレは独り身で行動していたんだぜ？　構成（ゴッド）解析（ノウズ）で奪った知識を使った料理技術とかもあるし」
「ちょっと頑張ってみようかしら……」
そんなことを言いながら、ふと時計を見た。
「そ、そろそろアーチを見に行かない？」
「……ん？　そうだな。ちょうど良い時間だろ」

行方も時計を見て、仕度をし始める。
遥の方もハンガーに掛けておいた上着を着始める。
ふと、行方が首に自作のマフラーを巻いているのを見て、少しニヤニヤしてしまった。

「……その変な笑みは何だ」
「え？　変な笑み？」
「鏡見て来い」

行方の言葉には従わず、一度後ろを向いた。
そして落ち着いた頃にまた行方の方を見る。

「さ、行きましょ」
「……腕に、腕を巻きつかせるとか凄く歩きづらいんだが」
「巻きつかせるとか……もっと良い言い方あるでしょ？」

遥は少し頬を紅潮させながら、遥はそう言った。

「は、早く行きましょう」
「たっく……わかったよ」

行方も笑みを浮べながら、そう言った。

◆◆◆

「と、言う夢を見たんだが」
「「黙れ！」」

いつもの中庭で、キールの夢落ち発言に対して遥と行方は叫んだ。

急遽書き出した番外編（後書き）

行方の

「正直、何で自慰とかするのかわからないんだよね。する方法も知らないし、する必要を感じないし」

発言ですが、これは作者の本音を文にしたものです。

二十四日以内に書こうと二十三時から書き始めたのに……数分間に合わなかった

ｏｒｚ

十三話　彼等の“前世”（前書き）

今回の最初の方の関しましては、作者も最近になって気づいた事です。
主に番外編書いている途中で気づきましたが。
今回は説明の話なので、少しｇｄｇｄ感があります。

十三話　彼等の“前世”

場所は浮鳴家。
遥は自身の部屋にキールと行方を招き、ジュースやらお菓子の袋など、下の階から持ってきながら、

「座って」

と言った。
行方の方はと言うと女の子の部屋は初めてなのか、興味深そうに部屋を見渡していた。
キールはと言うと、本棚に入っている書物のタイトルを見つめていた。
部屋の中央に置かれている大きいとは言えない白い円（まる）テーブルの周りに三人は座った。
ふと、行方は自分の事を遥が見つめている事に気づいた。
少し待ってみるが、何も言ってこない。

「……」
「……何だ？」
「いえ、女の子の部屋は初めて？……って聞くつもりだったけど」
「だけど？」
「今更だけど、私や貴方って上だろうが下だろうが名前で呼び合わないなぁ、って気づいて」
「……ふむ」
腕を組んで行方は思い出そうとする。

「確かに、オレは“お前”としか言わないな。……どうする？　ハルハルとでも呼ぼうか？」
「普通に遥で良いわ。私も行方と呼ぶから」
「それじゃ、僕もそろそろ遥先輩と呼ばせてもらおう」
「構わないわよ。……それにしても、行方って顔に似合わずニックネームとか付けるのね」

基本、行方の表情をは変わらず無表情である。
例え笑ったとしても、ほんの少し変わる程度である。

「まぁ、感情表現出来なくなったのは転生してからだしな」
「そうなの？」
「まぁな。色々合ったし……」

懐かしむように呟く行方に、遥は少し違和感を感じた。
まだ転生してきて九年しか経っていないのだ。
なのに、懐かしむ……？

「にしても、これが女子の部屋か……」
「行方先輩は“前回”も含めて入った事なかったのかい？」
「無いね。“前回”はあの三人のためだけに動いていたからな。恋愛どころか異性との交友すら考えていなかったし」
「彼女達も異性なんだがね……」
「オレ、異性だとかそこまで関心ないし」

遥が知らないところで、色々合ったらしい会話が始まっていた。
行方の話は介入できないので、とりあえず……

「キールの部屋は入った事ないのかしら？」

部屋のことを話すことにした。

「キールの部屋か？　こいつの部屋は入った事あるけど、正直乙女チックじゃなかったぞ」

「どんな感じ？」

「『どうぶつ〇森』で言うんだったら、モノクロ系の部屋だったな」

「また懐かしいのを出してきたわね……」

この世界には存在していないゲームを思い出しながら、遥は呟いた。

「ちなみに、行方先輩のは超普通だったよ。最初入らせてもらった時は逆にびっくりしたかな？」

「何で？」

「行方先輩のことだからオカルトグッズだとか部屋に飾ってあると思ったんだけどね」

クックック、と特徴的な笑い方をキールはした。

「で、結局どんな感じの部屋だったのかしら」

「普通の書物が入った本棚に、勉強机、ベッドだけだったよ」

「普通の書物って……失礼だな」

遥の質問にキールが答えるが、その回答内容に憮然とした声音で行方は呟いた。

そして行方はコップにジュースを注ぎ、一気飲みした後、

「……さて、本題に入ろう」

そう言った。

◆◆◆

「まず、この世界はよく二次創作とかであるような転生者複数系のリリカルワールドじゃない」
「えぇ。それはわかっているわ」
そもそも貴方達が理解不能な存在だし、とかは言わない。
「この世界で重要な言葉は“前世”だ」
「前世……」
「そうだ。まず、オレとキールに関してだが……一度このリリカルワールドをすでに体験しているんだよ」
「――は？」
行方の言葉が理解出来なかったので、間抜けな声を出してしまった。
「簡単に言うとね、遥先輩。僕達は一度死んでリリカルの世界で二度目の人生を送ったんだよ。その上でまた転生して、同じ物語の世界に転生してきてしまったんだよ」
「ちょ、ちょっと待って！」
思わぬ発言に遥がストップを願った。
「そ、それじゃあ貴方達は三度目の人生って事！？」
「そう言うことになるね」
「今のところリリカルワールドはオレとキールだけだが」
「――リリカルワールド、は？」

遥は、行方の言葉に疑問を覚えた

「その話はまた後だ。……オレとキールだが同じ世界に住んでいたんだが……他にもオレ達が知っている顔の転生者とか存在する」
「中島貴樹――彼も僕達の世界の住人だよ」
「……え？　でも、彼は単なる転生者にしか見えなかったけど」
「そうだ。つまり、前回の世界の記憶を引き継いでいる奴も居れば、引き継いでいない奴らも居るってことだ。オレはそう言った奴を、中島合わせて二人存在している事を確認している」

片方は転生者じゃなくて、転生者の養子だけどな、と呟く。

「僕達はこの現象を『リセット』と呼んでいる」
「『リセット』……」
「そうだ。だが、全てが再生されたわけじゃない事もオレ達は確認している」
「……？」
「例えば、オレ。前回の世界では呪いとも呼べる術式に半身が侵蝕され、意識が殆ど無かった」
「はい？　つまり……」
「魔物と化していたんだよ。だが、この世界では生まれ方は同じだったのに、その呪い――名称、孤独（デュナール）は存在していなかった」
「例えば、僕。僕は転生者であり、憑依者であるんだが……今回も同じ存在に憑依したんだよ」

しかしキールはと言うと、苦笑染みた笑みを浮べながら、

「だけど、今回の世界の彼女――本物のキール・ローレライは茶髪から銀髪に変わっているし、かなり女の子らしい容姿になっていた。

さらに年齢も違った。前回のキールはティアナ君達と同じ年齢だったのに、今回は高町先輩達の一歳だけ年下と言う年齢だったしね」

いきなり言われた内容に対し、遥は頭の中でまとめる。

【彼方行方】
前回：変な魔法にとり憑かれていた。
今回：普通に健康的であった。

【キール・ローレライ】
前回：年齢はティアナと同い年。容姿は茶髪で中性的であった。
今回：年齢はなのはの一つ下。容姿は銀髪で女の子らしいものだった。

「……能力とかも引き継いだの？」
「まあな。……言っとくけど、目を開けたら戻っている、って言う状態だったから、お前等と違って神とはオレ達は出会っていないぞ？」
「僕なんて、そう言った上位種とは出会わずに二回も転生したんだぜ」

ちょっと乱暴な口調でキールは言った。

「……じゃあ、キールが今朝発言していた、元時空管理局元帥って言うのは」
「そう。前回の話さ。――僕の稀少技能（レアスキル）の立体視点（ソリッドポイント）により、ミッドチルダの都市クラナガンを見ていたからね。犯罪者だろうが何だろうが、すぐに見つかったさ。おかげで殉職する少し前ぐらいに名誉元帥の階級をもらったのさ」

戦闘能力だけが成果に繋がるわけじゃないよ、とキールは呟く。

「……ちなみに行方は？」

「影から世界を救っていた。主に馬鹿な転生者どもから」

「製作エミヤ一万を使った、アンチ管理局の転生者三十人＋次元犯罪者大勢との戦は歴史に残ったよね」

キールの発言に、遥は思わず頭をクラクラとさせてしまった。

エミヤ、ってＦａｔｅのエミヤシロウ？　それを一万作って、大量のアンチ管理局の者達と戦った？

ふざけている。

「安心しろ。今回の世界ではそんなこと起きないから」

「ま、行方先輩と言う魔物と遥先輩と言う化物、そして僕（キール）と言う偽物が揃って戦いに出れば、彼等を全滅させることが出来るんじゃないかな？」

「失礼ね」

いきなりの化物発言に、思わず憮然とした発言をしてしまった。

ふと、行方は思い出したかのように呟いた。

「そう言えば、この世界にもあの偽エミヤは居るんだよな……オレが倒していないってことは存在しているんだよな……まだ確認していなかったらからアイツが“引継ぎ系”か“可能性系”か解析していないな」

「ちょっと、フラグ建てないでもらえるかしら」

不吉な発言に遥は険しい表情を浮かばせた。

……？

「引継ぎ系？　可能性系？……なんのことかしら」
「あぁ。悪い悪い。説明していなかったな」
「先程も言ったように、僕や行方先輩は前世から地位や名誉とか以外のほとんどを今回の世界に引き継いでいるって言ったよね？」
「……その転生者が、引継ぎ系？」
「そうだ。そして、中島のように前回は魔法に関する特典しかもっていなかったはずなのに、今回は『ニコポ』に『撫でポ』を持っているとか、そう言った前回とは少し違ったりする奴等を可能性系と呼んでいる」
「……複雑ね」

もっとも、遥からして見ればあの厨二病は初見なのだが。

「そうそう。引継ぎ系と言うのは、僕達以外にも存在するんだよ」
「……貴方達以外にも『リセット』に巻き込まれた転生者が居るの？」
「違う」

キールの発言に対し遥が質問したが、行方が否定した。

「前回のリリカルワールドの『リセット』に巻き込まれ引き継いだのはオレ達だけだ。――だが、前世から引き継いでいるのは、オレ達以外にも居るってことだよ」
「……どう言う意味かしら？」
「つまり、だ」

目を細めながら、行方は発言した。

「零崎狂識は【戯言シリーズ】の世界からの転生者であり、水俣破白は【めだかボックス】の世界からの転生者だ。他にも、【ＮＡＲ

ＵＴＯ】の世界からの転生者もオレは知っている。……つまり、だ。
アイツ等は好きなキャラクター達の真似をしているわけじゃなく、
本物なんだよ」
「……」

行方の言う事は、こうだ。
遥達の前世の世界では物語であった世界から転生してきた転生者が
居ると言う事だ。

「特に、零崎狂識の殺人衝動はＥＣウイルスから来る物じゃなく、
零崎だから発症するものだ。それと、水俣破白の劣等感は奴自身が
本物の過負荷（マイナス）だから湧き出る物。正直、この二人はマジでやばいと
オレは思うね」

行方の言葉で、遥は沈黙してしまった。

「まぁ、簡単に言うとクロス物の世界だってことだよ」
「そんな簡単な話かしら」
そしてキールの言葉に、頭を抱えた。

十三話　彼等の“前世”（後書き）

今回のまとめ。

リリカル：行方やキールのように前作からやってきた転生者達＋α。
戯言零崎：狂識は零崎一賊として生きたが死んだ。だけどこの世界に転生した。
めだか箱：過負荷（マイナス）として生きた破白。しかし『リセット』の影響により死んで、そのまま転生。
鳴門物語：十代目火影の時代からやってきた転生者。名称、現在不明。

破白は『リセット』の影響なので神とかそう言った存在と出会っていません。
さらに『貰っていた可能性』により、中島貴樹は恋愛系洗脳能力を保持。
キールも何だかんだ言って、容姿と年齢が違う可能性により変更。

こんな感じかな？
意外と長くなってしまった。

十四話　彼女の今後……彼等のこれから（前書き）

名前：彼方行方（かなた　ゆくえ）
性別：男
能力：『構成解析（ゴッドノウズ）』
詳細：無限とも言える魔力と魔術を持つ大魔導師。
魔力の方は無限にあるのではなく、無尽蔵に体内で増やすことができる。
最高の魔導師であるが、魔法的補助がないと近接戦闘が出来ない。
本人曰く、魔術強化していないと「ＲＰＧで言えば、鍛えられた農民にすら負ける」レベルである。
邪な心無く、【魔法少女リリカルなのは】の主人公三人を幸せな未来へと導いた。自分は不幸に成ったが。

十四話　彼女の今後……彼等のこれから

話が終わったのが午後五時頃だったので、ちょうど良い時間だと言って行方とキールは帰宅してしまった。一番しゃべった行方が、一番ジュースを飲んでいたからか、ジュースの料金分のお金をいつの間にかテーブルの上に置いて帰っていった。

「何でこう言うところは律儀なのかしら」

律儀と言うより、義理堅い？

そんなことを思いながら、遥は二人から聞いた彼等の前世の話を思い出していた。

行方――彼は大切な者のためだけに人生を犠牲にした少年。

キール――憑依体となった本物キールの名前を世界に広げるために、名誉元帥まで上り詰めた少女。

はっきし言うとこの二人、第二の人生を他人のためだけに捨てたのだ。

キールは最終的には自分のためにもなっているかもしれないが、そのためだけに生き抜いたようなものだ。別に時空管理局に入らず趣味に走ったって良かったのに。

「目標、かぁ……」

遥自身、自身の将来がまだ決まっていないのだ。

原作ばかり意識していた分、自身のことをあんまし考えていなかっ

た。
しかし原作のことを忘れてみると、ふと今後のスケジュールを考えてしまう。
「そうね。この前先生も言っていたし、将来のことでも考えてみようかしら」
もっとも、あの二人も今回はそこまで大きな動きをするつもりは無いらしい。
本人達曰く、疲れたとのこと。

『僕のこのデバイスね今じゃストレージ機能だけど本当はインテリジェントだったんだよ。……けど』
『けど？』
『前回の世界の任務中にね、人格部分の核を攻撃されて壊れちゃったんだよ』
『……』
『確かに毒舌な奴だったけど……それでも、長年の相棒だったんだよ。その失った時の気持ちが、今でも忘れなれないんだよ……』

その時に話していたキールの表情が悲壮的だったことを、思い出した。
アニメで見ていた頃は、インテリジェントデバイスって凄い頼もしいんだな、とか思っていたけど……使用者が失ったときにあれほど嘆いてしまうとなると、持つのが怖くなってしまった。
キールには失礼だが、本当の意味で、原作（まほう）に深く関わらなくて良かったと思ってしまった。

「……まぁ、普通に生きるで良いわよね」
普通が一番、ともよく言う。
だからそれで良いだろうと、結論付ける。

◆◆◆

「……」

ふと、零崎狂識は動きを止めた。
先程まで集落に居た人々を殺していたところだ。
数時間もしたら管理局が来るであろう、と思って違う世界に転移してきたところなのだが……

「そこに居るのは誰だい」

自身に向けられている殺気を感じて、問う。
そこは地と砂しか存在しない世界なので隠れる場所が無いのだが、何故か殺気を感じるのだ。

「透明化能力かな？」

とりあえず殺気がする場所をナイフで一振り。
しかし切った感触はせず、なのに殺気の位置は変わらない。

「……どう言うこ――」

――足を誰かに握られた。

「土遁・心中斬首の術」
地面の下から聞こえた声と同時に、狂識は地面に引きずり込まれていく。
しかし自身の足をとっさに切り話し、少し離れた場所に膝から下が無いまま跳躍した。
そしてそこで、両足を再生させた。
「……良い判断なんだろうし、再生できるとわかっていても、あっさりと自身の肉体を切れるお前はやっぱり人間ぽく無いな」
狂識の膝から下をどこかに放り投げながら、“彼”は出てきた。
「……君は？」
「『狗』とでも呼んでくれ」
藍色の髪を持った少年が、地面から現れた。
「どうして僕を狙うんだい？　管理局かい？」
「んなわけないだろ。お前に復讐するために、目の前に現れたんだよ」
「……」
ここで狂識は考える。
基本、彼は会った人間を皆殺しにしている。
たまに生き残りなどと言う例外なども存在するが、それでも普通は殺人鬼なんかに復讐しようと行動する者は居ない。
「第２３管理世界の集落で、お前は時空管理局に雇われてそこの人

間をほぼ殺しつくした」
「あぁ……アレね。いや、思わず大きな力を手に入れて興奮していたんだよね。だから殺せる＋お金がもらえるって言うことで規定人数以上殺しちゃったんだよね」
集落の人間のほとんどが稀少技能保持者（レアスキル）であった。
しかも管理局を快く思わない人間達ばかりであり、クーデターを恐れた上層部は排除するために狂識が雇われたのだ。もっとも、数人ほど子供を残して研究所に送るようも狂識は言われたのだが。
公式的には疫病に掛かってしまった集落の人間達の集団自殺と言うことになっている。

「なるほど。君はあそこの生き残りか」
「あぁ。そうだ」
「それで、僕を殺しに来たと？」
狂識は手を甲にディバイダーを刺し、リアクトする。
彼の手元には一回り大きくなった、刺々しいナイフが存在していた。
そして柄の部分には引き金（トリガー）などが加えられていた。
「前回は発動できなかったけど、今回は最初からリアクトさせてもらうよ」
「……何のことだかさっぱりだが――」
突然、少年の体中から青色の『力』が溢れ出した。
それは象り始め、頭の方は耳の形を、そして尻尾の形などにもなっていく。

「そちらが本気なら、こちらも最初から本気でいく」

黒色の勾玉模様を浮かばせた赤い瞳――『写輪眼』を発動させながら、彼は殺し合いを始めた。

十四話　彼女の今後……彼等のこれから（後書き）

よく考えると、水俣破白君は無印中そこまで活躍しないんですよね。

リリカル世界に忍者追加。

アンケート……と言うより、頼みごと。
次回作の舞台をどの物語にするか作者は決めかねています。
なので出来れば皆さんのお力をお貸しください。
ちなみに次回作の主人公は行方達ではありません。

1：魔法少女リリカルなのは
2：魔法先生ネギま！
3：ゼロの使い魔

同じ事を言うようになりますが、どうか作者にお力を分けてください。
それではこの辺で。

十五話　彼は殺人鬼、彼は復讐者（前書き）

戦闘シーン苦手かもしれません。
ちょいｇｄｇｄ。

十五話　彼は殺人鬼、彼は復讐者

――《火遁・豪火球》

『狗』の口から等身大の火の玉が放たれた。
それを面白そうに狂識は見つめながら、迫った瞬間……切り裂いた。

「って、熱っ！？」

そう、切り裂いたのだ。
一般的な魔法とは違い消えず、そのまま切り裂かれてしまったのだ。
なので熱は残ったままだったのだ。

「……君、魔導師？」
「一応その分類に入らなくも無いが……普通の魔法使いではないな」

腰に下げているポシェットからクナイを取り出す。
それを見て、狂識は首を傾げる。

「デバイスじゃないのかい？」
「オレのデバイスは現在とある研究者に完成させてもらっているところだ」
「へぇ……その状態で僕と戦うと？」
「勝てるさ。オレなら」

拘束で印を結び、『狗』は《水遁・爆水衝波》により大量の水を放つ。

「うっそ」

攻撃魔法ではなく、大量の水を出すだけの魔法。
感染者に対しての魔法ではなく、周りの環境への魔法。

「考えているねぇ」

辺りが湖のようになっていく。
さすがにこの量の水を無効化出来ない。

「《水遁・水鮫弾》の術」

水が鮫の形を象り、狂識を襲う。

「と言うか、無駄だよ」

刹那、『狗』の背後に狂識が居る。

「それこそ無駄だ」

しかし『狗』は予想していたかのように、『力』によって象られた尾で狂識を弾く。
あまりの高密度の『力』であったため、分断（リアクト）が間に合わずそのまま吹っ飛ばされた。

「がっ」

「――まだだ」

飛ばされている狂識の下から『狗』の声が聞こえた。
驚き、目だけでも下に向けると泳いでいる『狗』の姿があった。

「犬掻きかい？」
「普通の泳ぎだよ」

クナイを上に向かって刺そうとするが、狂識の驚異的反射神経により、空中で回転しクナイをナイフで弾き飛ばしてしまった。
そしてそのまま、ナイフを泳いでいる『狗』に向かって刺そうとするが――先程と同じく尾で手を弾かれてしまった。

この間、一秒近くの時間での攻防。

感染者としての能力を扱い、空中浮遊をする。
しかし『狗』は逃がさないと言わんばかりに尾を狂識に巻きつけ、無理矢理水中に潜る。

「（つうか、この尾は何だよ……！）」

狂識は水の中のため言葉を発せないため内心で毒づく。
普通の魔導師でないことは確か。転生者である事も確か。
だが、狂識には心当たりは無かった。
もっとも狂識が知らないだけで、知っている人は知っているであろう見た目。

――《口寄せの術》

親指を噛み千切り、血を出す。
それを反対の手のひらに押し付け、鮫を口寄せ（よびよせ）する。

（確かに魔法は聞かないかもしれないが、魔法的攻撃以外なら通じるだろう？）

（……ッ！）

『狗』が狂識に向かって念話を送った。
その内容に対し本格的に面倒臭くなったと感じる。

（悪いけど、今の僕は殺す気が沸かないんだけど。だから、次でね）

殺人衝動に任せて殺し合いを行う時の方が多い狂識にとっては、殺人衝動（それ）が沸かない限り戦闘意欲も沸かないので――はっきし言うと、殺人鬼タイムの時よりも弱体化している。
故に、能力を発動し……一瞬で水から飛び出る。

「っ！？」

しかし、いつの間にか鮫が狂識の肩に噛みついている。

「お前の能力は肉体の超活性化による高速移動及び瞬間再生だろ？」

水の中から『狗』も出てくる。

「人から見れば転移にも見えなくないほどの速度だが、オレの『写輪眼』は音速だろうと光速だろうと見切る」

ふと、体に異物が入り込んでくる感覚がしたのを狂識は覚えた。

「確かにお前は自身の殺人衝動の所為でオレの集落の人々を殺し尽くしたのかもしれない」

自身を見てみると、薄ぼやけた剣の先が出てきている。

「そして、管理局に雇われたからオレの集落を襲ったのかもしれない。――それでも、オレはお前をためらい無く消す」

段々、力が抜けていくのが彼自身、感じられた。

『君を転生しさせてあげよう』
『貴方は誰だい？』
『僕かい？　僕は神様さ』
『神様、ねぇ……』
『信じられないかい？　まぁ別に良いけど』
『その神様が、殺人鬼（ぼく）に何のようだい？』
『だから、君を転生させようってことさ』
『何のために？』
『僕が楽しみたいが為だよ』
『……』
『転生先の世界は【魔法少女リリカルなのは】の世界だ。ちょうど、殺人鬼（きみ）にぴったりな能力があっちの世界にはあるね。それを君の能力にしよう』
『……はぁ。勝手に進まないんで欲しいんだけど』
『良いじゃないか。別に。……さぁ、君はどうする？　物語の世界に転生して、何をするんだい？』
『……そうだな。僕は――』

「一賊(かぞく)に……会いたいなぁ……」

もしかしたら、殺人とかはどうでも良かったのかもしれない。
そう思いながら、彼は消えていった。

「……もしかしたら、最初から発動していれば良かったかもしれないな」

――《万華鏡写輪眼『須佐能乎(スサノオ)』》

『狗』の両目には三つの鱗紋と、その頂角を中心として形成されている三つの三日月の紋様が瞳に浮かんでいる。これが瞳術を彼が発動している合図でもあり、証でもあるのだ。

彼の背後には《須佐能乎》と呼ばれる武将のような巨人が存在している。
その武将は《十束剣》と呼ばれる、刺した対象を幻術世界に肉体ご

と封じる剣を掲げていた。
これ零崎狂識に使い、彼を幻術世界に封印してしまったのだ。
「さて、残りはあと二人。……いや、脳味噌どもを合わせれば、あと五人になるのか？」
《須佐能乎》の展開を解き、彼は転移した。

◆◆◆

「緊急会議だ」
円いテーブルの周りに行方とキール、そして遥が集まっている。
行方とキールは私服だが、遥だけはパジャマ姿である。
寝ようとしていたのか、少しだけ眠たげな様子。
「いきなり何よ……伝えたいことがあるんだったら念話で良いじゃない」
「念話が使えない奴に言われたくないんだが」
「……」
「それで、会議とは？」
どうも遥の部屋に集まった事に関しては誰も気にしていない。
部屋の主はと言うと、そのことに疑問すら覚えていなかった。と言うより気づいていない様子。
「零崎狂識が異世界で倒された」

「……え？」
「ほぉ」
行方の言葉に遥は驚き、キールは興味深そうな声を出した。
「誰が倒したかはわかっている。『狗』と呼んでいる奴だ」
「『狗』？」
「あの鈴仙君の主人さ」
幻術使いのウサギを思い出した。
「そいつは【ＮＡＲＵＴＯ】の忍術を魔力を消費して再現している奴だ」
「……住処は？」
「海鳴市（ここ）だよ。遥先輩」
遥の質問に何故か行方じゃなく、キールが答えた。
「奴の目的は復讐。あと二人ほど居て、管理局に一人と放浪している転生者が一人だ」
「復讐って……危なくないかしら？」
「安心しろ。条約は結んである」
お前のことも言っておいたから、もう襲われる心配するな。
そう遥は言われるが、肩をすくめるぐらいであった。
「って、言うより。誰なのよ、『狗』って」
「……知らないのか？」
「うん」

ふと、キールを見てみると愉快そうな笑みをしていた。
遥は何だか聞くのが怖くなってきたが、行方はその感情を無視して――

「お前の後ろの席の“中端黒兎”だよ」

暴露した。

「って、私の後ろ！？」
「そうだ。ちなみに、中(なか)って言う字で中(うち)って書いてあるだろ？　さらに端(はし)は端(は)とも読む。つまり、中端(うちは)――『うちは一族』の転生者だよ。アイツは」

中端黒兎――うちはコクト

「うっわ。気がつかなかった……」
「もっとも、アイツも前世が忍者だ。気づかれないようにしているだろ」
「……それで、他には？」

遥が頭を抱えている中、キールは冷静に行方に質問していた。

「他には、ってまだあるかしら？」
「あぁ。こちらが本題だ」

二十円から百八十円ほど行方の表情は真剣になり、

「オレが前回では倒した偽エミヤ……本名、衛宮城江（えみや しろえ）が八神はやてに接触した」

十五話　彼は殺人鬼、彼は復讐者（後書き）

零崎狂識君、本調子じゃない＋相性が悪い相手だった故に、あっさりと退場。
言っておきますが、これは転生者バトルロイヤルじゃありませんので！

三つの鱗紋――簡単に言うと、『ゼルダの伝説』のトライフォースの紋様です。
それともう一つの紋様は、簡単に言うと円になりきれていない少し太目の線です。
中端黒兎君は、五話で名前だけ出てきました。
故に後書きの出てきた転生者のエンカウントにも入れておきました。

現在の結果

リリカル：１
ネギま！：２
ゼロの魔：０

一月一日までやっておりますので、どうかお願いします。
それではこの辺で。

十六話　彼の神魂命（かみむすび）（前書き）

名前：キール・ローレライ
性別：女
能力：『立体視点（ソリッドポイント）』『電脳侵入（マザーコンピュータ）』『固定登録（アブソリュートタイム）』『魔力変換資質【糸】』
詳細：前回の世界では名誉元帥にまで上がりつめた実力者。
冷静に周りを見る力を持ち、物理的精神的な距離感覚を測る能力を持つ。政治家相手にも怯まない八歳児。魔力値はＡＡ＋ほどだが、魔導師ランクはＳ＋はいくほど。
彼女は引継ぎが出来なかった転生者やイレギュラー要素の能力を引き継いでいる。その影響により彼等の性格・口調も少々引き継いでしまって混ざり合っている。人格はキール本人であるが、口調や頭の回転の速さなどは彼女本来のモノではない。
色々な意味で行方とは対照的な存在。彼女も他人とも言える存在のためだけに第二の人生を費やした存在。幸か不幸かは知らない。

十六話　彼の神魂命（かみむすび）

遥は普段よりも三十分早く家から出て、学校に向かおうとしたのだが……

「……何で貴方がいるのかしら」

「連絡用の念話を覚えさせるために来たんだよ」

家の前に行方が居たのだ。

「お前、魔法の腕を鍛えたとか言っていたけど、念話すら使えていないんだろ？」

「痛いとこ突くわね」

そのため、昨夜に直接二人が遥の部屋に現れたのだ。

「念話なんて初歩中の初歩だから、指導してやるよ」

「その上から目線は何よ」

「そのまんまだよ。これでもオレは最高の魔導師（スペルマスター）と呼ばれるほどの実力を持っているんだから」

正論なので遥は黙ってしまった。

そもそも、転生者と言えど魔法で対抗する限り、最高の魔導師（カナタゆくえ）に勝つことなど不可能なのだ。それでも魔法で対抗したいと言うのであれば、十万三千冊分の魔導書知識を所有した状態で来なくてはいけないわけだが。

閑話休題。

「さて、魔力値がBランクでもお前の魔導師ランクはCも行かない。Dすら怪しい」

「悪かったわね」

能力が凄まじい分、魔法力が凄まじく低いのだ。

そのための魔導的防衛装置魔導機具『孤独の書』なのだが。

チートなんて、所詮はこんなもん。

「……あれ？　そう言えば、キールと念話での会話をしたことがあるわ」

狂識との戦闘の時、普通に使えていた。

「多分だが、キールが念話出来るよう繋いでおいたんだろう。つまりお前の実力じゃなく、キールのおかげってことだ」

「さっきから辛辣な言葉ね」

「オレは事実を言っているだけだ。基本オレは真実以外言わないぞ」

優しい嘘なんて吐かない少年、彼方行方。

「んじゃ、登校している間に覚えてもらうぞ」

「えぇ。頑張ってみるわ」

◆◆◆

「……どうした。浮鳴」

内端黒兎――藍色の髪を持ち、赤色の瞳を持つ少年。
顔立ちはイケメンと言えるほどではないが整っている方である。
そんな彼が教室に入ってきて目に付いたのが、遥が机に突っ伏して、いかにも落ち込んでいます的なオーラを出している場面であった。

「ちょっと、ね……」
「……？」
「念話を使えないほど才能が無いとは思っていなかったわ」

結局、浮鳴遥には念話を習得する事が出来なかった。
行方のいつも通りの無表情が、この時ばかりは怖かった。
だが、黒兎の一言で表情を変える。

「携帯電話じゃ駄目なのか？」
「……」
「もしくは、お前の想造力（スキルメイカー）で念話（テレパシー）系能力作れば良いだけなんじゃないか？」
「……」

何とも微妙そうな表情に変えた。

「……そうだ。お前にも謝っとかなきゃな」
「何をかしら？」
「二日前の夜、優曇華にお前を襲わせジュエルシードを奪った件だ」
「あぁ……アレ」
「悪かったな」
「構わないわ」

ふと、遥は気になった事を黒兎に質問した。

「ねぇ、あの時何故か能力が使えなくなっていたんだけど……教えてくれないかしら？」
「ん？　あぁ。なるほどな」
何がなるほどか分からないが、ちゃんと教えてくれた。
「オレの万華鏡写輪眼『神魂命（かみむすび）』の力で能力封じさせてもらった」
「……」
原作に出ていない万華鏡であったことに、黒兎は原作には原作から見て過去か未来の人物ではないであろうか、と遥は予想した。
「どんな能力よ」
「こんな能力だ」

【永続型転写封印秘術・神魂命】
万華鏡写輪眼を直接見た相手に強力な幻術を施し、さらに転写封印する。
受けた対象は幻術を掛けられたことを自覚することなく、さらに第三者と目が合った場合に対象が受けた幻術と同じ幻術をその者に掛ける。そしてその第三者にも同様の転写封印を施す。なお、この術は術者が解かない限り永続的に転写封印が続く。転写封印が止まるのであって、幻術が解かれるわけではない。最終的には生物全てはこの術を施される事になる。
簡単に言うと、樹形図式に幻術が施されていく。
「精神侵蝕型の幻術だから掛けられた事を自覚する事が出来ないし、

オレかオレ以上の幻術能力を保有していない限り解除できない。……ちなみに、初代火影――千手柱間の細胞を持っているオレでさえ、『神魂命（かみむすび）』を再発動するには五年が掛かり、あと三年は必要である状況だ」

「……いつの間にか掛けられていたのね」

「これにより、次元世界に居るオレより上の能力を持っている奴等は、オレを前にしている間は能力を封じられる事になっている。だからお前の想造力（スキルメイカー）も封じられたし、行方の能力及び魔法力も大半が封じられたんだよ」

「あ、行方も掛けられ――何かしら」

黒兎が遥をジッとした目で見つめている事に気づき、聞いた。

「いや、名前で呼び合う仲になっているとは聞いていなかったからな」

「別に良いでしょ」

「まぁ良いけど」

そこで隣席のすずかが来てしまい、会話が終了した。

◆◆◆

いつもの時間で、いつもの中庭。

「ふぅん、黒兎は自分の万華鏡写輪眼のこと話したんだな」

「まあね」

授業中からずっと製作している念話系（テレパシー）。
作り終わるのは夕方ぐらいかな、と思いながら携帯電話の話しをした。

「別に、一対一なら電話で構わなかったが三人だっただろ？」
「あ、そうね……」
「まぁ、確かにお金も掛かるしね」

酷く現実的なキールの言葉が何故か頭に残った。

「それに、行方先輩は携帯電話を持っていないんだよ」
「え？　そうなの……」
「……僕は友達が少ない」

行方の呟きに、遥は呆れ、キールは苦笑した。

十六話　彼の神魂命（かみむすび）（後書き）

遥の予想通り、黒兎は原作の時間軸に生きていた者ではありません。

前に質問した『「週間ユニークアクセスが多い順」っていつを基準に変更されるのでしょう』と言うモノでしたが、今日変更されました。

……火曜日の２７日。マジで基準がわからない。

現在の結果

リリカル：３
ネギま！：３
ゼロの魔：０

ゼロ魔が不憫すぎる……のか？
とりあえず、これからもお願いします。

十七話　彼は過負荷（前書き）

作者はライスバーガーを食べた事ないんですよね。
食べる機会が無いと言うか。

十七話　彼は過負荷

「ライスバーガーって、オレ食った事無いんだよな」
「と言いながら私のバーガー取らないで欲しいんだけど」

いつもの中庭。
行方が遥の弁当の中身を奪ったりする、と言うひどく日常的な光景がここにある。
遥が原作に関わらないとちゃんと決めた瞬間から、本当に原作と言う言葉が見当たらなくなった。

「……そう言えば行方先輩」
「ん？　何だ」
「あの負完全君はどの教室に居るんだい？」
立体視点（ソリッドポイント）でも見当たらないんだけど、と補足しながら行方に聞いた。

「あぁ。アイツか……知らん」
「知らん、って……」
「オレだって見かけていないんだ。正直、本当にこの学校に転入してきているかすら怪し――」

「いやいや、オレはここに居るぜ？」
背後からふざけたほどの劣等感を感じ、行方は振り向く。
そこには他人の鞄をイスにしながら弁当の中身を食べている。
よく見ると、それは高圧的で生意気で傲慢で数字しか気にしていない教師として有名な人の鞄であった。

「キール……感知できていたかしら？」
「この状況を見て、感知できていた何て言えるわけないだろう」
遥の質問にキールは苦い笑みを浮べる。

「単刀直入に言う。お前はどうやってこの場に現れた」
「何を言ってるんだ？　オレは君達が昼食を始めた頃からずっと居たが？」
「言い方を変えよう。どうやって姿――いや、お前はどうやって視界から消えているんだ」
「……負無負無。ちょうど的を得た良い言い方だな」

食べ尽くしたのか、弁当をすぐ傍に置き、話し始めた。

「そう言えば、君とは初めましになるよな。初めまして、水俣破白だ」
「……彼方行方だ」
「負無負無。オレと同じ過負荷がしたから来て見たが……君だったか。行方君」
「……」
『孤独』に浸かっていた頃の気配が未だに残っていたようだな、と行方は考える。

孤独の悪魔（アーヴェルス・デュナール）の半身……つまり善悪の半分である悪の部分全てを生贄に捧げて生み出した術式は、ある意味過負荷（マイナス）のようなものである。善がプラスと捕らえるなら、悪はマイナスだからである。もっとも、虚数空間によって性質が少々変わってしまったが。

閑話休題。

「質問に答えて欲しいんだが」

「あぁ、悪い悪い。簡単さ――オレが持つ三つの能力（マイナス）の内一つの過負荷（マイナス）、消身消命（アウトフィールド）によってオレは君達の視界の外に居たのさ」

◆◆◆

【消身消命（アウトフィールド）】

自身の存在価値を消すことにより、相手の視界に映らない能力。正確には視界に映っているのだが、破白には存在価値が無いため、覚えておく必要は無いと記憶からすぐに消してしまうモノ。つまり、価値の無い石ころが地面に落ちていたとしても、それを記憶に留めておくことが無いのと同じ原理である。そのため、監視カメラやビデオ越しに彼を見たとしても、記憶に留めておくことが出来ない。

「元々は虐めを受けていた時に発言した過負荷（マイナス）何だがな。他人に虐める価値が無い、と思わせて身を守る――と言うモノなんだよ。……もっとも、存在価値を無くしているから現実に干渉することが出来ないけど。干渉しようとするとした瞬間、過負荷（スキル）が解けるんだけ

ど」

知られざる英雄（ミスターアンノウン）に近似している、しかし過負荷（マイナス）方向の能力であった。

「あと二つもあるのかよ……」

「まあな」

ニタリ、と笑みを気色の悪い笑みを浮べながら、

「でさ、行方君」

「……何だ？」

「君に聞きたいことがあるんだけど」

「……」

「オレ、原作知識って無いんだよ」

行方が過負荷（マイナス）寄りだからか、もしくは偶々なのか。

理解不能なはずの過負荷（マイナス）が言おうとしたことを、行方はすでに予想していた。

当然である。物語の世界から転生してきた転生者達は、原作知識など持っていないからである。

「良いぜ。その代わり、オレ達ＳＯＳ団と内端黒兎メンバーにお前が意図した害意を加えないことが条件だ」

「はっ、過負荷（オレ）に約束事か？」

「違うよ。これは交渉さ」

行方は『契約の書』を取り出し、

「この書のページに書かれた内容を破った場合は得た物を失う、と

言う力がこれには存在する」
「……なるほどな」
「ちなみに、無効化した場合も失うぞ」
ニヤリ、と笑みを浮べながら行方は言った。
「……負無(ふむ)、なるほど。オレの現実を否定する過負荷(マイナス)――現壊突破(シーンクラッシャー)も幻効一致(オーバーミスティク)に対しても有効だな」
「で、どうする？」
「約束を守るから、教えてくれ」
契約は成立した。

◆◆◆

破白が去った後、行方は背後にいる遥とキールの方を向いた。
「大丈夫……じゃなさそうだな」
「よくあんなのと話せるわね……」
「さっきの彼も言っていた通り、行方先輩も過負荷(マイナス)寄りだからだよ……」
二人とも表情がよろしくない。
過負荷(マイナス)と対峙するだけで普通の者は、あまりの劣等感(マイナス)を感じ気持ちが悪くなる。
「……今日はもう休んだ方が良いぞ」
「……ごめん。保健室に行くわ」

「僕も」
「オレから先生に言っておくよ」
この場から消えた破白のことを思いながら、行方は溜息を吐いた。

十七話　彼は過負荷（後書き）

今回は孤独（デュナール）について触れました。
人間としての善悪、正や負の感情は二つで一つの存在である、と言うことをテーマとした術式でした。

純粋悪が肉体を這うなどと言う、恐ろしい状況を行方は前作で体験していたと言うことになるんですよね。そりゃぁ、精神も狂うはずだ。

さて、破白登場。彼は一体何をするんでしょうか？

次回は温泉に行きます。

現在アンケート結果の変化話し。

リリカル：４
ネギま！：３
ゼロの魔：０

十八話　彼とウサギについて（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も小説の執筆を頑張っていこうと思っています。

ちなみに作者は、お年玉を本気で親からも貰えるとは今年まで知らなかったです。
友達から親からも貰った、と聞いたときはへ～良いなぁ、としか思っていませんでしたが……その家ではそうなんだろう、としか考えていなかったんですよね……。

さて、戯言はこの辺で。それでは本編を。
今回は説明の回なのでgd gd感があるかもしれません。

十八話　彼とウサギについて

「ふぅ……」
「いや、極楽だねぇ」
「そうね」

遥・キール・鈴仙は現在温泉に入ってゆっくりしている。
隣の男子の陣では行方と黒兎が入っている。
休日、彼等は旅館に来て温泉を満喫していた。

「あの、誘ってくれてありがとうね。……その、先日は悪いことしたのに」
「あぁ。もう気にしなくて良いわ」

ジュエルシードを無理矢理奪った加害者と被害者。
しかし遥の方は本当に気にしていない。何故なら、

「だってあのままジュエルシード持っていたら、原作介入しちゃったかもしれないし」

『無印』の要、ジュエルシード。
これを持っていただけで原作介入しているとも言えるのだ。
だが、遥は奪われたことにより“持っていない状態”となり、原作から離れたのだ。

「まぁ、今では敵対しているわけでもないしね。そこまで気にしな

くていいんだろ？　遥先輩」
「そうね」
一番の理由は、これだ。
敵対しているわけではない、と言うことだ。
遥にはこれだけの理由があれば転生者とも仲良く出来る。……中島と言う例外を除いて。
「そもそも、貴方達の標的は管理局に居る奴と似非エミヤ何でしょ？」
「……まあね」
すでに遥は黒兎の行動目的を聞いている。
『復讐』――それである。
「妙なアンチ転生者よりもきついかもしれないわよ？　管理局の皆さん」
戯言だと自覚しながら、遥は呟く。
そもそも黒兎は、とある集落に転生した少年である。
集落の人間のほとんどが稀少技能（レアスキル）保持者であった。
しかも管理局を快く思わない人間達ばかりであり、クーデターを恐れた上層部は排除するために殺人鬼（ぜろざき）を雇ったのだ。
もっとも、数人ほど子供を残して研究所に送るようも殺人鬼（くるしき）に言ったのだが。
そしてその研究所に送り込まれた黒兎含める数人の集落の子供達は、使い魔動物との融合実験をさせられたのだ。使い魔は主人と接続（リンク）を行って形成されるため、今は珍しき融合騎と同じ事を出来るのでは

ないか？　と言う考えを持った研究者によって編み出された理論。
それを実際にやってみたところ――施設に居た、黒兎以外の八割の少年少女が死んでしまった。

結局のところ、主に忠誠する高性能な使い魔を生み出すのには主自身が高い魔力資質を持っていなくてはいけない。それだけではなく、例え忠誠を誓ったとしても絶対の迷い無く融合する意志が無くては成功しないのだ。
理論が完成したとしても、使い魔との融合が可能か？　などと言う不安が生まれてしまうのだ。

だが、黒兎はと言うと自身の幻術によって契約した『犬』の使い魔を操り不安な心を排除させ、永久融合を行ったのだ。黒兎と契約した『犬』は高位魔力……人間以上の魔力を備えていたため、主に忠誠を誓うことが無かったのだが、幻術によって縛られたため融合が成功したのだ。
もっとも、ただ協力体制ではないため黒兎自身は単なる魔力タンクとしてしか操っていないが。

◆◆◆

「オレの場合、尾獣をイメージして『犬』の魔力を制御している。故だろうか、尾獣のような形態になることが可能だ」
「イメージによる魔力構成……魔法の原点だな。本来魔法と言うモノはイメージによって発動されるが、現在の魔法はイメージによって発動、と言う曖昧過ぎるものをやめて演算と言う“楽”な方向に移した」
「魔法の原点、ねぇ」

行方と黒兎のほうはと言うと、すでに風呂場から出て休憩所に居た。行方は牛乳、黒兎はコーヒー牛乳を片手に持ちながら話している。ちなみに遥はフルーツ牛乳派である。

「……で、その研究所はどうなったんだっけ？」

「正義の味方もどき衛宮城江によって襲撃され、潰れた。……物理的に」

宝具を投影し、そのまま研究所を破壊したのだ。

エミヤが自身に酔っている中、黒兎達被害者は建物の下敷きとなり苦しんでいたのだ。

「オレ自身は平気だったさ。だが……他の奴等は全員死んだ」

「……復讐、ねぇ」

それが『うちは一族』の宿命なんだろうか、と行方は思いながら牛乳を飲んだ。

「話題を変えよう。すでに旅館（ここ）の近くにあるジュエルシードに口寄せ契約をしたのか？」

「忍具を呼び寄せるタイプのものだがな」

原作に出てくるジュエルシード……しかも虚数空間に落ちることが確定しているジュエルシードを落ちる直前で呼び寄せるつもりなのだ。

「そか……なら別に構わないが」

「オレの目標としているジュエルシードの数は三つ。うち二つはオレの手のひらの上。……あと一つか……」

彼のデバイスの完成にはジュエルシードが三つ必要なのだ。
一つは、彼のデバイスに装着するため。
一つは、そのジュエルシードの魔力をデバイスに喰らわせるため。
一つは、製作してくれている研究者に報酬として渡すため。

「頑張れ。オレは積極的には協力できないが」
「頑張る。そうじゃなきゃ、オレの目的は遂行できないしな」

行方自身、黒兎の復讐を止めるつもりは無い。
止める必要性を感じていないからである。

「……そうだ。オレが製作した『零時迷子（改）』の調子はどうだ？」
「あぁ。バッチリだ」

行方の製作した『零時迷子（改）』。
黒兎の肉体に埋め込められた魔道具は、黒兎の魔力を毎晩正午零時に全回復させるもの。
高性能な使い魔である鈴仙は、魔力の消費が激しい。
そのためこう言った魔道具できっちり大量に回復しないと供給が維持出来ないのだ。

例え、黒兎がＳＳランクの魔力値を保有していても。

「……鈴仙はお前の幼馴染の使い魔だったっけ？　【東方】系の特典か？」
「あぁ。多分な」
「だからだろうな。基本魔力消費量を変更する事が出来ないのは」
「……だろうな」

黒兎は思い出す。
幼馴染の少女が、死んで逝った瞬間を。
「元々アイツの幻術を指導していたのはオレだったんだよ。だから、師匠って呼ばれていたんだよ」
「そして主人が死にそうだったため、お前と契約したと言うことか」
見る人が違えば、鈴仙が死にかけだった主人を裏切ったと思うかもしれない。
「もっとも、優曇華自体は渋ったけどな」
「だろうな。アイツはアイツで忠誠心が強そうだし」
飲み終えた瓶をゴミ箱に投げ捨てる。
外す事は無い。
「鈴仙が写輪眼を保持している理由は、お前から魔力が供給されているからか？」
「だろうな。オレと契約してから使えるようになっていたし」
もっとも、万華鏡写輪眼を開眼させることも出来ない、さらには魔力消費量も激しいと言う劣化品だが。
「そのリングは？」
「これか？」
彼の中指に嵌められている『雨のマーレリング』を見つめる。
「優曇華は奪ったなんて失礼な言い方をしたみたいだが、これは戦

利品だ」

オレの復讐対象の一人からのな、と補足する。

「鈴仙が『雲』と『霧』なのは？　てか、お前が『霧』じゃないのは？」

「オレが『雨』なのは火遁より水遁が得意ってのもあるんじゃないか？　『霧』属性も備えているが、優曇華に渡したから。……つまり、オレの魔力によって『霧』属性を持つようになり、元々供給されていた幼馴染（アイツ）の魔力に反応し『雲』属性を持つようになったと思うけどな」

使い魔は主人の魔力によって属性が変わるんだろうか？
そう行方は思いながらも、まぁ良いかと適当に納得した。

「……そろそろ遥達も出てくるだろうな」
「だな」

チラリ、と休憩所に備えられている小型のテレビを見る。
そこには緊急ニュースが映し出されており、

「……今頃海鳴は巨大な樹の発生で混乱しているんだろうな」
「だな」

ちなみに、今日は連休ではなく単なる日曜日である。
ようは逃亡していたのだ。彼等は。

十八話　彼とウサギについて（後書き）

温泉に行った＋黒兎について＋サッカー少年によるジュエルシード覚醒からの逃亡

アンケートの結果、次回作は【リリカル】になりました！　ちなみに四票。

【ネギま！】が三票、【ゼロの使い魔】が０票。

ご協力してくれた読者の皆様、ありがとうございます！

ちなみに今作から出る予定の人物は、

中端黒兎、キール・ローレライです。

なお、【ネギま！】の方も一票差でしたが多かったので、要望があれば書きたいと思っております。……と言いましても【リリカル】を中心としますが。

それではこの辺で。

ザ・マイナスワールド：ブレイクフィクション（前書き）

名前：水俣破白（みなまた　はしら）
性別：男
能力：『消身消命（アウトフィールド）』『幻効一致（オーバーミスティク）』『現壊突破（シーンクラッシャー）』
詳細：『現実嫌い（ドリームラナウェー）』と言う異名を付けられてしまうほど現実を拒絶する少年。別に彼の過去に複雑でシリアスな物語があったわけではなく、ただ当たり前のような不幸（マイナス）があっただけである。
元々は【めだかボックス】の世界に居た人物だが、『リセット』の影響により死亡しこの世界に転生してきてしまった。改心する努力はしようとしていたものの、その直後に死んでしまったのであっさりと諦めてしまった。つまり、過負荷（マイナス）な心は健在。何をするか、行方ですらわからない存在。

ザ・マイナスワールド：ブレイクフィクション

私立聖祥大学付属小学校三年『　』組、水俣破白。
彼は白髪と言う一般とは異なる点以外では特異点は見つからない、
と言う普通の少年だ。

普通に家族に朝の挨拶をし、
普通に学校に登校し、
普通に帰宅をし、
普通に寝る。

彼は彼なりに普通な人生を送っている。
そしてこれからも、自分はこんな普通な生活を送るのだろうと思っていた。

普通に家族から虐待を受けながらも。
普通に学校の教師や生徒から虐められながらも。
普通に帰宅途中で近所の高校生から暴力を振られながらも。
普通にゴミ箱にあった新聞紙で体を覆いながら家の外で寝ながらも。

彼はどうにも思わなかった。
ただ、ちょっと面倒臭いなとしか思っていなかった。
虐められるのは慣れているし、暴力を振るわれるのは常々だし、家の中に自室が無いのは普通だし。
それでも、自身に干渉してくる現実（かれら）に一々リアクションするのは面倒臭い。
そんな適当（どうでもいい）なことを考えながら、今日も学校に登校する。

◆◆◆

上履きが隠されている――なんて幼稚な虐めなど誰も受けていない。
彼は上履きの中に接着剤でくっ付けられた画鋲に目もくれないまま、履く。
当然足の裏から出血するだろうが、彼は気にせず履いた。
しかし彼の表情には苦痛による歪みが浮かんでおらず、むしろいつも通りの不敵な笑みを浮べながら廊下を歩いていた。

教室に入ると、自身の机やイスが無い事に気づいた。
今回のようなケースは初めてだったので、しばしば考えた後に近くにあった他人の机やイスを自分の席として扱う事にした。

「あ、水俣君？」

――何て行為を行う直前、クラスメイトから話しかけられた。
破白がそちらを振り向くと、そこには顔立ちが整った少女が居た。

「……なんだ？」
「机とイスを探しているの？」
「そうだけど？」
「アッチに居た人達が、水俣君の机やイスをどこに隠したか言っていたよ」

少女――時津麻香（とぎつ まか）は教えてくれた。
このクラスの中で唯一、彼女だけは破白には味方的なのだ。
彼女はクラスの中でも一段と優しい性格をしており、教師公認の虐

めを受けている破白にも手を差し伸べているのだ。
しかし破白はと言うと、その彼女の善意に対し淡々とした声音で聞いた。

「――で？」
「で、って……」
「どこに隠していたか言っていた。それで？」
「……」

破白が聞くが、麻香は答えない。
そもそも破白自身は麻香のことを味方だとは思っていない。
彼女の周りが破白の味方だと勝手に言っているだけで、破白自身は彼女が自分を手助けしてくれている場面を見たことが無い。
事実、今だって破白の机などの位置を教えてはくれていないのだ。

それは意地悪ではなく、彼女自身もどの程度虐めに関わって良いのかわからないのだ。
彼女自身も人間であり、クラスメイトから疎外されたくないと言う気持ちがある。
だからどの程度関わって平気なのか、どの程度関わったら自身は仲間外れにされてしまうのか。
そんな彼女のことを彼は味方だと思っていない。敵だとも思っていないが。

「別に教えてくれないんだったら、くれないで構わないさ。そこら辺の机を使うし」
「それって、いけないことだよ」
「オレは悪くない。だから別に良いんだよ」
「……」

正論であって、暴論。
彼は隠された側――つまり被害者なのだから別に悪くない。
しかし、だからと言って加害者の物を勝手に使って良いと言うわけではない。
つまり正論を言いながら、暴論も吐いているのだ。

「嘘だよ。一々文句言われるのも面倒だし、そんなことはしないよ」
そう不敵な笑みを浮べながら、破白はその場に座った。
確かにこの世界では机隠しなどは初めてであったが、前世ではよくあったことだ。
むしろやっとここまできたか、とすら思っている。

「えっと、ごめんね。力に成れなくて……」
「別に。いつものことだから」

笑みを絶やさずに彼は言った。
それを見て、麻香は自身の覚悟の無さに、そして力の無さに歯を食いしばりながら自分の席に戻ったのだ。

「まったく……気にする事ないんだけどね」

笑みを浮べながら、呆れたような溜息を吐いた。
そして破白はそのまま、床に座りながら授業を受けた。
そのことをクラスメイトや教師などに馬鹿にされながらも、一日を終えた。

「なるほど……リリカルでマジカルな世界、ね」

帰宅途中。

珍しく本当の意味で上機嫌な笑みを浮べている破白は、今日の昼間にＳＯＳ団メンバーと接触し原作知識を手に入れたのだ。

少々退屈過ぎた日常だったが、知識（これ）によって少しは刺激的な人生に出来るかもしれない。

「それに、過負荷（どうるい）と出会えるかもしれないし」

人類最低な存在――過負荷（マイナス）。

この世界には自分と同じ存在は居ないかもしれないと諦めていたのだが。

「うん。少し過負荷（マイナス）なりにも頑張ってみる価値はあるかもな」

過負荷（かなたゆくえ）に近似した存在は存在したが、過負荷（どうるい）は未だ居ない。

しかし行方から聞いた限り、不幸な少女達の物語らしい。

ならば、それなりに不幸（マイナス）な存在がいる可能性があるのだ。

そう思うと破白の気持ちも上機嫌になってしまい、思わず――

◆◆◆

「……」

翌日。

麻香は朝早く登校し、教室に入った瞬間……動きを止めてしまった。

「な、なに……これ」

彼等のクラスにあった机やイスが全て、壊れていた。

ザ・マイナスワールド：ブレイクフィクション（後書き）

裏の物語。いつも通りですが、短いです。
過負荷（マイナス）な人間って、かなり面倒臭いですよね。行動を考えるの。
前に行方や遥が次回作では出ない……と言っていましたが、もしかしたら出てくるかもしれないです。予定は未定ですが。

十九話　彼等の日常（前書き）

時間が結構飛びます。
原作に関しては、【ザ・マイナスワールド】シリーズで話したいと思います。
今回は行方の恋愛感情に関する問が出てきます。

十九話　彼等の日常

温泉に行ってから数週間ほど経った。
すでにフェイトの姿は確認され、さらには次元震の反応もあった。
現在のところ、原作に沿って進んでいる様子である。
転生者でＳＳＳランクの魔力値を持つ中島貴樹であるが、彼も素人なので二次創作のオリ主如くうまく立ち回れているわけではないらしい。
故に、原作通りに進んでいるようだ。

そして、遥達はと言うと……

「ねぇ、浮鳴さん」
「……何かしら」

クラスメイトの女子に声を掛けられた遥は、彼女から放たれている圧力に少々恐れながらも、返答した。

「浮鳴さんって、ええっと……その……」

何かを言おうとしている途中で何やら顔を紅くし始めてしまった。
それに対し、拍子抜けしてしまった遥は催促してみた。

「私が、何かしら？」
「そ、その……と、隣のクラスの彼方君と付き合っているって噂があるんだけど……本当？」

「……」

彼女の言葉に、思わず遥は絶句してしまった。

『ニコポ』はすでに好意を異性に抱いている相手には通ず、そして目の前の少女が行方に恋していたとしても別に遥は……まぁ、少しぐらいは驚くかもしれない。

しかし、あの魔術師と自分が付き合っている？　しかも噂として流れている、って！？

「な、何その話！？　で、デタラメよデタラメ！」

「そうなの？　だけど、『届いてはいけない領域　～ＳＯＳ～』の二人と一緒にお昼を食べているし……」

「『届いてはいけない領域　～ＳＯＳ～』って、何よ」

「彼方君とローレライさんの二人って去年からよく中庭でお昼を済ましているでしょ？」

「そうね」

「実は二人とも、ファンが多いのよね。ローレライさんは公式で、彼方君は非公式だけど」

「……そんなのあったの？」

「最近は中島君のファンクラブも出来てきたけど、やっぱり二人の方が多いわね。ほら、何て言うか……大人っぽい雰囲気があるし」

精神年齢が二人とも大人だからです、とは言えない。

「そんなにファンクラブがあるほどなら……」

何で交わろうとしないの？　と聞こうとして、これが愚行だと気づく。

どうせ牽制しあって干渉できず、『届かな（略』と言われるようになっているのだろう。

「その点、浮鳴さんと彼方君が一緒に居るところを何度か見ている人も多いし……」
「……」
気づかなかった事実に、少し恐怖を抱く。
ちなみに行方は魔力感知ならともかく、気配感知など出来ないので彼自身もバリバリ気づいていなかった。
「ま、まぁ私達はちょっと都合があって集まっているのよ」
「そ、それは……？」
「……ごめん。言えない」
原作だとか転生者だとか、言えるはず無い。
「まぁ、安心して頂戴。私は『恋など精神病の一種に過ぎない』と思っているし」
「そ、それはちょっとどうかと思うけど……」
よく考えると行方達から異性に関する話しなど聞いたことが無い。もしかしたら、行方達も遥と同じような考えを持っているのかもしれない。
今度聞いてみよう、と遥は思った。

◆◆◆

「……で、何で私はここに居るのかしら？」
「偶には良いじゃない？」

「うん。偶には良いと思うよ」

翠屋――高町なのはの両親が経営している喫茶店である。
実はと言うと、すでにアースラは到着しており現在主人公達は学校に来ていない。
その放課後、何故かアリサとすずかに捕まり翠屋まで連れて行かれたのだ。
一年生の頃から同じクラスだったのでそれなりに交流はあったのだ。
もっとも、中島が来た辺りから少々疎遠になったが。
ちなみにアリサの奢りだ。ごちになります。

「それで私に何かようかしら？」
「ふっ、聞いたわよ。隣のクラスの彼方って奴と付き合っているんでしょ？」

面倒臭いのに巻き込まれた、と遥は正直に思った。

「情報源は、貴方かしら？　つ　き　む　ら　さ　ん」
「ん？　何の事か、私には何が何だか……」

すずかは隣の席なので、聞こえていたのだろう。
しかも半端に。

「別に付き合っているわけじゃないわよ？　ほら、私って『恋愛感情など一時の気の迷いによる精神的な病の一種に過ぎない』って持論を持っているし」
「そう言えば、そんなこと言ってたね……」

性に関する事柄には無関心――それが遥である。

「それに、多分キールや行方だってそんなもんだろうし」
「あぁ。聞いたことがあるわ。その二年生の話」
「うん。結構有名だもんね」

自分が知らないだけで、結構あの二人は有名人のようだ。
内心溜息を吐きつつ、彼女は携帯電話を取り出した。

「二人に聞いてみるわ。どうせあの二人も近いような考えだろうし」
ちなみに、キールを遥が意図的に巻き込んでいる事を二人は知らない。
まず最初にキールの方に連絡してみた。

「あ、もしもし。キール？」
『どうしたんだい？　浮鳴先輩』
「唐突で悪いけど、貴方にとって恋愛感情とは？」
『……ふむ』

考え込むような雰囲気が電話越しに伝わる。

『ある視点から見れば哲学的な内容に成るが、僕個人で言うと政治的利用価値があるもの、かな？』
「……え？」
『相手が自分の事を愛している、と錯覚させてから陥れる。まぁつまり、色々な使い道があるモノってことだよ。相手を落とし入れる材料になるし、それを使って――』
「ごめん。もう良いわ」
『……そうかい？　それじゃ僕はこの辺で』

ツー、ツー……と言う電話が切れた音が遥が電源ボタンを押すまで

続く。
遥を含めた三人はと言うと、キールの言葉に呆然としていた。
「……あの子って、本当に八歳？」
「……」
アリサの質問に、遥は答えられなかった。
確かにキールの前世は名誉元帥だったはずだ。しかしそこまで政治が絡んでいるとは思っていなかったのだ。もしかしたら、彼女は恋愛などせずに人生を迎えたのかもしれない。
「つ、次は行方君だよね」
「そうね……出来ればさっきのよりは良い台詞を期待しているわ」
「……」
最近買った行方の携帯電話に繋げ、会話を始める。
「行方？」
『……そうだが、どうした？』
「唐突で悪いけど、貴方にとって恋愛感情って？」
『……誰かに促されているな。お前がそんなこと言うなんて』
ギクリ、と擬音が聞こえそうなほどアリサとすずかは硬直する。
『確かお前の席は月村の隣だったな。そして、確かお前等は一年生の頃から同じクラスだったはずだからそれなりに交流はあるはず。しかしそれなりに交流があるはずのお前からは、そこまで異性の話を聞いたことが無いから少々気なり、そしてお前は自分の恋愛感情に関する持論を述べた。そして最近交流を持ち始めたオレのことまでズルズルと話が繋がった。んで、オレの恋愛感情に関することも

聞こう、と言うことになった。ってところだろ』
「……」
ちょっとした部分が違ったりしているが、ほとんど合っていることに恐怖を抱く。
『さらに月村が主となっているんだとしたら……そこに居るのは月村とバニングスだな。高町と中島の姿を見かけなかった。二人して今日は休んでいたようだし……つまりメンバーは遥（おまえ）、バニングス、月村だろ』
「何その気持ち悪いまでの推理力」
後ろの二人が引くほどである。
『んで、恋愛感情に関してだっけ？』
「そ、そうよ」
『それはオレが考えている、って言うのか？』
「そう」
『恋愛感情、ねぇ。……そりゃ、アレだろ』
これを聞いた後、三人は興味本位で聞いた事を後悔することになる。

『子供を作り世代を繋ぐ機能の一種』

ブチッ……ツー、ツー、ツー、ツー……ピッ

二十話　彼の過程（前書き）

名前：浮鳴遥（うきなる　はるか）
性別：女
能力：『想造力（スキルメイカー）』
詳細：強力な能力を貰った故に、魔導の才能が全然無い少女。
かなり慎重な性格で、揉め事の前に備えておかなくては落ち着けない。しかし土壇場で自身が想定していた展開とは異なる展開にはめっぽう弱い。
現在は行方と同盟を組んだ事により、魔導への対策が出来た。
万能タイプではあるが戦闘タイプではないため、戦いになったらあっさり逃げる。

二十話　彼の過程

「……そう言えばさ」
「ん？　何？」
アリサに誘われて彼女の家にすずかと一緒に遊びに来ている遥はゲームをしている最中で、ふと思い出した。ちなみにすずかは思いのほか、対戦ゲームが強いことが五分前に判明した。
「貴方達三人って、中島と仲良いみたいだけど……」
「ん～、まぁ仲は良いんじゃないかしら？」
「うん。まぁ良い方だと思うよ」
その言葉に遥はおや？　と疑念を覚える。
彼女達には恋愛系洗脳能力（ライアーカット）が効いていないのであろうか？
そう思い事実口異を発動しながら聞いてみた。
「彼は結構モテているみたいだけど……そこんところ、どうなのかしら」
「さぁ？　私達は恋する乙女☆　みたいなわけじゃないし」
「よく頭を撫でられたりするけど……子ども扱いされるのはちょっと不満かな」
完全に『ニコポ』や『撫でポ』が効いていないことが判明した。
もしかして原作登場人物には効かないのか？　と思い、

「なのはは？」
「あの子は……まぁ、恋する乙女☆　って感じね」
「あはは……」

基準が分からない。
アリサ達には『ニコポ』などが通じていないのに、なのはには通じている。

「……ふ～ん。そう言えば、貴方達は好きな人とか居るの？」
「唐突ね。さっきも言ったけど、私は別に無いわよ」
「私も……まだ経験は無いかな」

誰かの事が好きだから――それで『ニコポ』が通じないのかと思ったが、違うようだ。
なら……どう言うことだ？

「……ふむ」
「ところで、貴方は彼方とはどう言う関係なのかしら？」
「……まだそれ言うの？　別に、彼とはそこまでの関係じゃないわよ」
「そう言えば、彼方君って最近学校に来ているの？」

すずかの発言に、遥は少し驚いた。

「なんでそう思ったのかしら？」

事実、行方は最近学校に来ていないようだ。
この数日、キールと一緒に昼食をしている毎日だ。

「うん。彼方君って、ほぼ毎日図書館に来ているんだけど……最近

まったく来ないから」
「……え？　行方って図書館とかに行っていたの？」
「知らなかったの？」
「全然」

思えば、行方やキールの日常を遥は知らない。
遥自身は宿題とか適当なことで潰しているが、あの二人が時間を無駄にしているイメージが沸かない。

「……一体、何をしているのかしらね」

◆◆◆

「解答（アンサー）、戸籍偽造中です」
『何を言っているのですか？　マスター』
「いや、遥からの問いが聞こえたから」

電子モニター化しているキーボードを高速で打ちながら行方は呟く。
愛機ニルにも手伝ってもらい、現在侵入しているサーバーのプロテクトを抜けていく。

「まったく……最近の転生者は、オレのことを何でも屋だと勘違いしているんじゃないか？」
『そうは言っても、マスターが海鳴市に訪れる転生者を管理していると言っても過言じゃありません。そう言った意味では破白さんもマスターには敵いませんし』
「過負荷（アイツ）に勝てる奴なんて居ないさ。もっとも、過負荷（マイナス）どもも誰にも勝てやしないが」

今作っている戸籍は、破白が頼んできたモノである。
……とある少女の戸籍を偽造。

「前世のオレでもやらかった事柄だぞ。……やっぱり、過負荷（マイナス）と言う存在は恐ろしいな」

彼が何をやらかすかは聞いている。
故に、

「さすが過負荷（マイナス）。台無しにするのが得意だ」

苦笑いをするしかない。
すでに彼は形骸化してしまった魔導師。
ただ惰性に生きることしか出来ない、腐った存在。

「――さて、帰るぞ。ニル」
『了解しました。マスター』

転移する瞬間、

「いや、まてニル」

魔力感知に引っかかった。

「魔導師だ。しかも……オレが排除すべき存在だ」
『久しぶりの戦闘ですか』

これより、最高の魔導師（スペルマスター）が戦場に出る。

二十話　彼の過程（後書き）

今週のジャンプの『めだかボックス』……の半袖がカッコ良すぎて泣ける。
そろそろ彼女の過負荷（マイナス）、正喰者（リアルイーター）について能力詳細が出て欲しいな（チラチラ
……とか。

次回、行方が戦うつもりです。

二十一話　彼の失った目標

そもそも、原作介入をしようとしない行方が戦わなくてはいけないなど本来は存在しないのだ。
反撃やらともかく、自分から出ることなど無い。
しかし、物事には例外が存在する。

彼方行方の例外――それは、行き過ぎた原作乖離である。

行方が把握している転生者達による原作乖離は大体行方だけで修正できるが、行方が知らない転生者が原作を乖離させようとすると明らかに知らない方向に進んでしまう。
言ってしまえば、行方は物事の全てを知っておかなくては落ち着かない、と言うことなのだ。
原作通りに進むんだったとするのであれば、行方は放置する。
しかし原作とはまったく違う展開になると――本格的に行方も介入しなくてはいけなくなる。
肥大化しすぎた原作からの被害から逃げる手段など、転生者には（・・・・・）存在しない。
介入しない、と言う意志すら嘲笑される。この世界はそう言う仕組み（・・・・・・・・）なのだ。

故に、原作乖離しないうちに元凶を叩くのだ。
相手の意志なんか関係ない。
善の行いだろうが、悪の行いだろうが、秩序と混沌が交わさった存在である行方には関係ない。

自分勝手だ、とか言われようとも行方には関係ない。
行方自身は単に、自分がやるべきことをやるだけである。そこに負の感情はない。
すでに人間として壊れている彼にとっては、他人の思惑などどうでも良いのだから。

『感知した場所は、「時の庭園」の近くの世界です』
「と、言う事は……そこから原作介入しようとしているのか」
原作ではそろそろアルフがプレシアに攻撃を受けている頃だったはずだ。
そんなことを考えながら転移魔法を発動する。
都合の良いことに、無人世界である。

無人世界に行くと、黒髪の少年がいることに気づいた。
見た目は平凡だが、それなりに整っている容姿。そして背中には大剣。

「平賀才人の姿を持った転生者か」
「は？」

行方の呟きに振り向いた少年――サイト（偽）。
行方のことは呟くまで気づかなかった様子から、そこまでの実力を持っていないことが伺える。
その間にも自身の能力構成解析（ゴッドノウズ）を発動し、彼の設定値（ステータス）を分析する。
「【ゼロの使い魔】の魔法にデルフリンガーに近似したアームドデ

バイス……それにガンダールヴねぇ」
『マスターは【ゼロの使い魔】の魔法体系を持っていませんでしたよね？』
「まあね」

そもそも行方が持っている魔法体系は【リリカルなのは】【ネギま！】【東方】その他と言ったもので、思っている以上にそこまで多くないのだ。
単にそれを持ち合わせた転生者と出会わなかっただけなのか、もしくは出会ったとしても解析をしなかったのか。
暴走状態の時は解析などせず、ただ破滅に導いていただけだし。

「な、なんだよお前！？」
「転生者だが」

その言葉だけで彼は悟ったらしい。

「なるほど……お前も原作介入する気なんだな！」
「いや。ただお前が原作乖離させすぎないよう釘を打ちに来ただけだ」
「……何だと？」

秘密裏にプレシアとアリシアを回収しようとしていた彼だが、よく目的不明な転生者が現れた事により眉を上下させる。

「まぁ、言ってしまえば――てめぇを無印終了時期まで動けないほどボッコボッコにしてやんよ、ってことさ」

◆◆◆

前世では幼馴染似である主人公達のために自らの人生を犠牲にすらした彼方行方。
だが、今回では自らの保身のためなら彼女達すらも売った外道に成り下がった彼。
原作介入しないのは、自らの幸せのため？
残念ながら違う。彼は自分の事など、そこまで大切に扱っていない。
なら、何故？　簡単なことだ

彼は『彼方行方・アーヴェルス・デュナール』と言う存在ではなく『彼方行方』と言う存在だからである。

すでに主人公達のことなどを意識していない。
他人。幼馴染に似ているだけの、単なる他人。
何故前回の自分は似ているだけであんなことしてしまったのだろう？

だからもう、彼には目的などない。
必死になるほどの目的など存在しない。
ただこの世界に転生してきた者の管理などをし、出来る限り原作崩壊によって起こる被害を少なくしようと動くだけだ。
その行動も、主人公達がミッドチルダに移住する頃――つまり中学卒業するまでである。
地球の平和がとりあえず保障されたら、あとは適当に生きるつもりだ。

そう思考してしまうほど、すでに彼は、以前の彼ではない。
すでに、今回の彼は別人と化していた。

◇◇◇

「ま、そうなるように私の方で彼を作り直したんですよね。正直、あの意志（おもい）は邪魔でしたし」

◇◇◇

「さて、悪いが痛めつけさせてもらう」
「はっ！　てめぇなんかにやられるもんかよ！　行くぞ、デルフ！」
アームドデバイスを展開し、さらに五体に増える。
「平賀才人が魔法使うのとか、思った以上にシュールだな」
『黒兎さんが所持している影分身に似たものでしょうか？』
「さぁな。あの偏在の魔法と影分身……どっちの方が燃費が悪いか分からないし、偏在の方は消えても分身体が得た情報を得ることが出来ないしな」
そう言った意味では影分身の方が良いように聞こえるが、影分身はかなり脆いので少しでも攻撃を受けたらすぐに消えてしまうので、どちらの方が良いかは行方でも分からない。
「まぁ、とりあえずアイツを倒せば良いだけだしな。――ニル、第二形態に成れ」
『了解しました。モード、「世界樹の神槍（ユグドラシル・グングニル）」になります』
行方の右腕に装着されていた黄金の腕輪が、黄金の槍に変化する。

「「「「「「それで勝てんのかよ！」」」」」」
「発言するのは一人で十分だ。――すぐに一人になるけどな」
ニルを地面に突き刺す。
突如、槍が樹へと変化した。
「は？　何だそれ？」
彼の言葉を無視しながら樹は大きくなり、そして――枝を模したバインドがサイト（偽）に向かう。
「うそ！？」
それを避けようとするが、枝分かれするバインドの群を避けれず五人のサイト（偽）は吊るされる形で拘束され、
「ぐふっ」
樹から生えてきた、何十本と言う槍型のニルを模した魔法がサイト（偽）を串刺しにした。
何本物の魔力槍に刺突された彼は、あっさりと気絶した。
「ま、このデバイスが無くなれば次元移動出来ないだろうしな」
サイト（偽）のデバイスを踏み砕き、拘束から解かれたサイト（偽）を解析した際に知った住居の座標に転送した。
これで彼の仕事はお終い。これで終わりだ。
「ニル、戻れ」

『了解しました』

樹が消えていき、元の腕輪になった。
それを装着する。

『今回も一分しない内に戦闘終了しましたね』
「まあな」

はっきし言うと、行方は長期戦になれていない。
そのためさっさと戦闘を終わらせてしまう。
最高でも五分以内に終わらせておかないと、行方の体力が持たないのだ。
故に、戦闘の最初の方から一撃必倒系の魔法を使ってしまうのだ。

世界の都合なんて関係ない。

「さて、さっさよ帰るぞ。管理局に感知されるなんて真似は嫌だし」
『了解しました。マスター』

転移魔法を使い、帰還した。
淡々と自らの目的のためだけの日々を送る。

二十一話　彼の失った目標（後書き）

正直、行方で戦闘描写を書くの難しいんですよね。
彼は最強系転生者なのであっさりと終わらせてしまえるので。出し惜しみなんてしません。

さて、作者の都合。
冬季休業……冬休みが終わりに近いので本当に不定期更新になります。
一週間に一回は最低でも出したいと思っておりますが。

さて、すみませんが作者は七話の後書きで詐欺をしてしまいました。
たまにあの天使が出てくるかもしれません。本格的に物語に参加するのは次回作からですが。

あ、そうそう。次回作がリリカルに決まりましたが、皆さんはどんな物語が良いですか？　ハーレムものとギャグコメディー系以外なら書ける自身が少しだけ有りますので。
要望がありましたら、言ってください。

それではこの辺で。

閑話　彼が復讐者になった理由

「ふぅ……これで三つ目だ」

見つけたジュエルシードに口寄せ契約を施しながら、鈴仙は呟いた。原作を壊すつもりは無い黒兎は虚数空間に落ちてしまうはずのジュエルシードを直前で忍具口寄せの要領で呼び寄せるつもりである。

「一応これで私の仕事は終了ね」

そう呟きながらジュエルシードを元の場所に戻す。元々主人である黒兎は日常では学校に行かなくてはいけない＋黒兎の顔を覚えられてはいけない、と言うことで鈴仙がこの仕事を引き受けているのだ。

もっとも、今日でそれも終わりだが。

「あぁ～あ。それにしても昨日の次元震は凄かったなぁ」

なのはとフェイトの衝突によるジュエルシードの次元震は彼女も感知していた。
むしろ魔導師であればアレほどの次元震を感知するなと言うのは無理な話である。

「……」

ふと、自分が何故こんな事をやっているのか気に成った。

別に主人である黒兎に反抗するつもりは無い。さらに、彼が復讐者になった原因は彼女の本来の主人に当たる。だから責めるつもりはないし、止めるつもりも無い。

「だけど、貴方が居れば……師匠（マスター）を止められるかもしれないわね。……ねぇ、主人（マスター）」

◆◆◆

異空間。

白以外に何も存在していない世界に、蒼髪蒼目の高校生ぐらいの少年が居た。

彼の名は月影（つきかげ）。過去に行方と出会った事がある神様である。

「初めまして、オレは神――」

「え？　もしかして私転生するの！？　やったぁ！！」

「……」

喜んでいる少女を少々冷めた目で見つめる月影。

「言っとくが、オレ等の配分ミスでお前が死んだ、何て言う展開は無いぞ」

「え？　じゃあ何で私死んだの？」

「銀行強盗の流れ弾に当たって死んだ」

「……」

「まぁ、神は創った後は基本放置だからな。例え神の所為で人間が死んだとしても、どうでも良いんだがな」

現実は小説ほど甘くないようだ。
神々は結構乱暴。

「……え？　じゃあ、この展開は？」
「転生だぞ。ただ単に転生する資格を持つ奴等をオレ等は転生させているんだ」

ちなみに特典付きな、と補足する。

「じゃ、じゃあ！　東方の鈴仙を使い魔としてください！」
「……鈴仙自体は無理だから、彼女の見た目を持つ奴にするぞ」
「別に良いです！　あと、魔力は多めで――」

そんなこんなで転生した少女――ミアラはとある集落に転生することになった。

「……え？　何で？　普通ここは海鳴でしょ！？」

思わぬ展開に驚愕するが、叫んでもどうにもならない。

「マスター、どうかしましたか？」
「あ、ううん。なんでもない」

彼女が頼んだとおり、鈴仙が彼女の使い魔として従うことになった。
彼女が鈴仙を頼んだ理由は、単純に好きだからである。
元々は『狗神煌』が書いている【グリードパケット∞】を買ったのが始まりだった。

そこから作者に興味を持ち、そして彼女が鈴仙のことをかなり好きだったことがあり、そして自身も好きになっていったのだ。

『狂気を操る程度の力』は持っていなかったが、ミッドチルダ式の幻術を得意としている。
それに、師匠にも恵まれていた。

「……なんだ？」
「いや別に」

隣の家に住む少年、コクト・ウチハ。
彼は写輪眼を持つ転生者であり、幻術などが得意である。
【ＮＡＲＵＴＯ】の世界から転生してきた者。特典は『術の欠点（リスク）の排除』である。
これにより『須佐能乎』による細胞の蝕みや『イザナギ』の完全失明を無くしたり。

「一日ぐらいすれば元に戻る、とか……つまり最高でも『イザナギ』を一日に二回も使えるわけか」

その代わり【砲撃魔法の使用不可】【誘導魔法の使用不可】【下位防御魔法以外使用不可】【下位拘束魔法以外使用不可】【竜召喚の使用不可】【他人への補助魔法の使用不可（移動型以外）】と言うリスクがあるらしい。
彼自身はミッドチルダ式であるが、幻術魔法以外そこまで使えないらしい。
もっとも、前世で使えた忍術全て使えるらしいが。
忍術式、とでも言えば良いだろうか？

「しっかし……鈴仙・優曇華院・イナバとか……すごい名前だよな」

「師匠もそう思います？　なんでマスターは奇妙な名前にしたんでしょう」

わざと聞こえるぐらいの声音で話をしている二人（一人と一羽）。そう言えば、元々ウサギは獣肉食が禁止されていた時代に肉を食べたかった者がウサギを一羽と呼び始めたらしいが……。まぁ、どうでも良い。

「ん。そうだ」
「どうしたの？」
「ちょっくら都市にお遣い頼まれていたんだった。ちょっくら行ってくるわ」
「ちょっくら行ってらっしゃい」

二時間後、零崎狂識（さつじんき）が現れた事により集落は地図から消えた。

◇◇◇

「マスター。この後どうなるんでしょう」
「さぁ。わからないわ」

愛しい自らの使い魔にも憮然とした声音で返答してしまう自分を自己嫌悪しながらも、この状況についてどうにか打開策を考える。

「コクトが目覚めてくれればいいんだけど……」

気絶しているコクトを見ながら呟く。

彼女達は今現在、とある研究施設の牢獄のような部屋に閉じ込められている。
ミアラ達だけではなく、他にも子供達が居るが……気絶しているのはコクトだけである。
集落の異変に気がついたコクトであったが、敵の転生者の能力に翻弄されて倒されてしまった。

「まさか……【家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ！】の転生者がいたとは」

特典は『七属性全ての精製度Ａ以上のリング』や『匣兵器の知識』である。
そしてこの研究所で行われている実験は、使い魔を匣兵器の動物に使えないだろうか、と言うものである。
魔導師と無理矢理使い魔と契約させ、そしてそれを匣兵器化させ、修羅開匣のように備え付ける。
それにより魔導師＋修羅開匣者と言う兵隊を作るつもりだったらしい。
だが、途中から研究テーマは変わり、肉体の中に匣兵器を埋め込み使い魔の魔力を使えるようになるのでは？　となり、成功したのがコクトだけであった。
暴走しないように無理矢理写輪眼の瞳力によって制御したのだ。
彼の中に入れられた動物は『犬』で、雨属性である。

「この施設に来て三ヶ月か……」
「コクト、魔力の方は？」
「駄目だ。あっち側に制御されている」

この施設に捕まっている子供達は全員、魔力を研究者達にコントロールされている。

そのため、コクトですら限定された場所でしか写輪眼を使えない状況である。

「そろそろ優曇華の方も、やばいんじゃないか？」

「そうなのよね……」

争いごとに慣れているコクトはともかく、元々平和大国日本に住んでいたミアラからしてみれば、この状況は精神がガリガリ削られている状態である。

正直、喜んでいた頃の自分が馬鹿にしか見えない。

「はぁ……どうなっちゃうんだろう」

六時間後、施設は衛宮城江に襲撃された。

宝具を射撃し、壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）によって施設は崩壊した。

◇◇◇

「おい！　しっかりしろ、ミアラ！！」

近くから聞きなれた幼馴染の声がする。

いつの間に眠ったのだろう？　そう思いながら目を開けてみようとするが、開かない。

「あ、あれ？」

「マスター！　マスター！！」

優曇華の泣きそうな声が聞こえる。
何が起こっているのかミアラは判断できないが、何か良くないことが起こっていることだけはわかる。

「ふざけんじゃねぇ！　あの白髪やろう。何が私は正義の味方だよ。施設をぶっ壊しただけじゃねぇかよ！！」

珍しく荒々しい口調のコクトも気になる。
白髪に正義の味方と言えば、エミヤだろうか？
つまり彼を模した転生者が施設を壊し――え？

「ね、ねぇ……優曇華。いま、どうなっているの？」
「……施設が崩壊し、私と師匠、それとマスターしか生き残っていません……それに」
「それに？」
「マスターも体のほとんどが……瓦礫の下敷きになっています」
「……あぁ」

それで、わかった。
多分自分は落ちてきた物によって目を駄目にされたのだろう、と。
なのに痛みを感じないのは、体の機能がほとんどやられているのだろう、と。

「……コクト」
「……何だ」
「優曇華と使い魔契約してくれないかしら？　私、もう死んじゃうんでしょ？」
「……」
「継続契約にすれば優曇華の人格はそのままだろうし」
「……」

段々自身の体が冷たくなってくるのが分かる。
体から大切なものが無くなっているのが感じる。

「わ、私は……っ！」
「死ぬまで私と居る？　そして一緒に消える？　やめて欲しいわ。
コクトが独りぼっちになっちゃうじゃない」
「……」
「それに、私は貴方にそう簡単には消えて欲しくないの。だから、
お願い」
「……うっ……うっ」

泣いているであろう鈴仙の頬を触るが、感覚が無い。
もう感じていないだけなのか、それとも触覚までやられたか。

「あ～あ。転生してから満足って言える人生じゃなかったけど――」

自分は、笑えているだろうか？
そんな心配をしながら、笑う。

「二人と出会えて、良かったぁ」

◆◆◆

「……ん。帰ったか、優曇華」
「ただいま戻りました、師匠」

行方が用意してくれた家に住んでいる黒兎と鈴仙。

「エミヤが海鳴に来ているらしい。隙が出来たら襲うつもりだ」
「無理しないでくださいね？」
「あぁ」

Sランク魔導師と同じレベルの鈴仙だが、それでも転生者と戦うのは危険だ。
むしろ逆に倒される可能性の方が高い。
転生者には転生者を――つまり、黒兎でなくてはエミヤに勝てないのだ。
だから――常に抹殺（きたないことを）するのは黒兎なのだ。
正直、使い魔としては主に危ない橋を渡って欲しくない。
そう言うのは使い魔の仕事なのだ。

「……」

ミアラが居たころは、冷たくても優しかったはずの黒兎だが……今では残忍な復讐者でしかない。
鈴仙に厳しいわけではない。むしろ、鈴仙以外が敵として見ているふしすらある。
それでも、黒兎には復讐をやめて欲しいと思っている。
しかし鈴仙も主人を死なせた元凶を憎々しく思っているから、説得がうまくできない。
……それでも、あの頃の黒兎に戻って欲しいと思っている。
もう戻れない、あの頃に。

閑話　彼が復讐者になった理由（後書き）

黒兎に埋められた人体実験による能力は、ほかの時に詳しく説明します。

二十二話　彼女は『無印』からやってきた（前書き）

無印は終了していました。

二十二話　彼女は『無印』からやってきた

夏休み前。
中庭。

「さて、すでに無印が終わった。そして今のところ原作に沿った展開だ」
「内端先輩はジュエルシードを手に入れたのかい？」
「あぁ。プレシアが落ちる寸前に口寄せしたらしい」

報告。

「とりあえず夏休みまで集まる義務はないから」

宣言。

「それじゃ、楽しい夏休みを」

終了。

◆◆◆

夏休み終了まで十日前のある日。
高町家で課題をやっている少女達が四人。

「そこ、違うわよなのはちゃん。Ｐ３２じゃなくて Ｐ３４の文章を参考にするのよ」
「う～」

レミリアか、と心の中でツッコミながら手元のプリントを終わらせる。
すでに終わりそうな算数の問題を解きながらなのはの方を見る。

「漢字、違うわよ」
「う～厳しいよ遥ちゃん……」
「単なる間違いならともかく、途中から違う字になっているじゃない」

何度も同じ字を書かされる課題。
『開く』が途中から『門く』になっている。
ずっと同じ字を書いているからゲシュタルト崩壊を起こしているのだろうか？
そう思いながら算数の課題を終わらせる。

「早いわね」

アリサが少し驚いた表情で遥を見る。
彼女もすでにほとんどの課題を終わらせているが、それでも遥の終わらせている量に驚く。

「まぁ、一度終わらせているしね」
「苦痛じゃないの？」
「苦痛だけど……」

すずかの言葉に呆れたような声音で遥は返答する。

そもそも、遥は夏休みの最初の方に宿題をほとんど終わらせてしまっていた。

しかし課題を全て水浸しにしてしまい、ボロボロにさせてしまった。なのでなのは達に頼み、まだやっていない分の課題をコピーさせてもらったのだ。

「にしても……彼方にコピーさせてもらえば良かったのに、断られたの？」

「夏休みが始まる前に終わっていたらしい」

「ちょ」

生体時間加速（クロックアップ）と言う魔法を使い夏休み前に渡されていた宿題をすぐに終わらせたらしい。そのことを夏休み前に聞いた遥は呆れていた。

「な、夏休みの宿題なのに夏休み前に終わらせて良いのかなぁ？」

「さぁ？　ところでなのはちゃん。そこ、違うわよ」

「う～」

お礼と言う事でなのはの国語の宿題を見ていた。

なのはは理数系が得意であるが、文系が不得意であるため教えているのだ。

「ま、日記が駄目にならなかったのだけはありがたかったけどね」

◆◆◆

夏休みが終了し、登校した日。
珍しく遥が眠そうにしていた。

「ふぁ～あ」
「どうしたの？　遥ちゃん」
「ん。ちょっと昨日、眠れなくて……」

隣席のすずかは気になったのか、遥に声をかけてきた。

「なんか……こう、嫌な予感が昨日からするのよね」
「嫌な予感……？」
「そう」

いや、嫌な予感どころではない感じがしている。
前にも味わった事がある……気配？

「ど、どうしたの？　顔が青いよ」
「ちょっと……ね」

体が震える。
吐き気がしてくる。
気持ちが悪くなってくる。

何故？　どうして？

自問自答するが、答えが返ってこない。
否、答えを導き出したくないだけなのだ。

「……大丈夫？　保健室に行く？」
「……あんまし、意味無いからここに居るわ」

つまり、そう言うことだ。
先生が入ってきて、ホームルームが始まる。
それと同時に、

「今日は転校生を紹介する。入って来い」

先生がそう言って、教室に入ってきた新しい生徒。
見た目からして性別は女。
長い黒色の髪を三つ編みにしている、顔立ちが整っている少女。
見た感じは普通だが――雰囲気が違った。

周りを畏縮させるようなほどの劣等感。
ただ生きているだけで負けているとわかるほどの敗北感。
それら全ての負を感じるほどの――過負荷。

そんな彼女は、名乗った。

「初めまして、芦北有熾亜です。これからよろしくお願いします」

そんな彼女の顔立ちは、アリシア・テスタロッサと同じだった。

二十二話　彼女は『無印』からやってきた（後書き）

次回は多分、過負荷世界の話。

ザ・マイナスワールド：壊れたお話（前書き）

冬休みが終わったばかりでしたので小説が書けませんでした。
また普通に書き始めます。毎日更新は無理でも。

ザ・マイナスワールド：壊れたお話

攻撃魔法・防御魔法・拘束魔法に結界魔法など様々な魔法があるが、水俣破白にはそれを扱えるだけの才能は無かった。それでも転生者特有の多い魔力は彼にもあり、移動魔法は使えたので彼は使用しとある場所に転移した。

――『時の庭園』に。

「おいおい。もうほとんど歩ける場所が無いじゃねぇか」

高町なのは達が戻ってきたことから原作は終了したのだろう。
それを見越して破白は原作跡地にやってきた。

「いやぁ、さすがは最高の魔導師（スペルマスター）と言うだけのことはあるわな。崩落した『時の庭園』の座標まで見つけるなんて」

たまたま手に入れた優秀なデバイスに道を教えてもらいながら、彼は崩れた『時の庭園』を歩く。ところどころ虚数空間が見えるほどの穴があるのだが、彼は平然と歩く。
むしろその上をジャンプで飛び越える、なんて考えられない行為も平然と行う。

「……ん？」

上から物音がしたと思い見上げた瞬間――刹那、瓦礫が落っこちて

きた。
真下にいた破白はあっさりと潰された。
「……って」
しかし、落ちてきた瓦礫は不自然なほど粉々になりそこから破白は何でもなかったかのように起き上がった。
「いきなり二つも過負荷（マイナス）を使わされるとか、面倒な場所に来ちゃったなぁ」
なんてことを呟きながら破白は歩いていく。
結構広いなぁ、とか思いながら『時の庭園』を歩き回るが――
「……っ！」
突如、体の側面に衝撃が走る。
チラリ、と後ろを見ると厚（ごっ）い鎧を来た機械兵が破白を武装で薙ぎ払っていた場面が彼の目に映る。
「ぐはっ」
地面に何回かバウンドさせながら、体の中にある空気を吐き出す。
傷付いた体を一目見てから、何事も無かったかのように起き上がった。
実際、彼の姿は吹っ飛ばされる前と同じ姿に成っている。
……いや、戻っている。
「まったく……オレはジャンプ漫画の主人公じゃないんだからさぁ、気配とか察知できないわけよ？　機械と言えど不意打ちとか――最

低だな！！」

突っ込みながら魔力強化した大量の鍵を投擲する。

「閉(し)め殺してやるよ！」

投擲された鍵には回転が加えられており、ただ刺さるだけではなく抉られるように鍵が入ってくることがわかる。凶悪さを含んだ鍵である。

しかし――彼が渾身の力で投げた鍵は、刺さりもせず鎧に弾かれた。そのことに驚いている破白を無視し、兵は殴ぐる――

「……悪い。もう面倒臭くなった」

――と同時に兵は壊れた。

破白を殴った……と言うより、触れた瞬間に兵は壊れた。

分解した。兵としての機能を失った。見た目的に意味を失った。名前的に滅された。破壊された。

「いや、過負荷(オレ)が王道的に戦う場面なんて誰も期待してないよな」

うんうん、とどこか納得したように頷く。

そう頷きながら、彼は『時の庭園』の奥深くへ歩いていく。

「あぁ。そう言えば、元々ここは綺麗な庭園だったんだっけ？」

聞いた話によると、何年か前にはオドオドしい光景ではなく、花が咲き渡る園があったとか。

しかし現時点では、そんな美しい光景が損なわれている。

「なるほど。ますますオレに相応しい場所だな」
破滅的な光景を見ながら、奥地に辿り着く。
そこでは戦いの跡が残っており、虚数空間への穴が大きく開いている。
それを一目見て、
「よ、っと」
飛び込んだ。
魔法が使えなくなる空間にあっさりと彼は飛び込んだ。
そして虚数空間（そこ）で、飛行魔法を使用した。
「あぁ。やっぱり過負荷（マイナス）は無効化されないのか」
無効化されなかったら……、などとは考えなかったのか。
とりあえず彼は最底辺の場所まで降りる。そして、そこで見つけた。
「なぁんだ、結局アルハザード……だっけ？　そこに行けなかったのか」
アリシア・テスタロッサが入ったポットがそこには存在した。
「プレシアさんは……あら居ない」
どこか違う場所へ落ちたのか？　とか呟きながら破白はポットに触れた。
刹那、ポットは壊れアリシアの死体だけが出てきた。
そして彼女の頬を触って、数秒後……

「ん……あれ？　ここは？」

死んでいたはずのアリシア・テスタロッサは目を覚ました。

「ここは虚数空間だけど？」

「きょすうくうかん……？　あれ？　ママは？」

アリシアの質問に対し、破白は優しげな笑みを浮かべ――

「さぁ？　死んでいるんじゃない？」

◆◆◆

水俣破白――彼はと言うと彼方行方にお世話になっているため結構素直になっている、と言うのが行方のデバイス、ニルの見解だ。しかしまったくと言っていいほど、彼は素直ではない。

まず彼が行方に教えてある三つの能力。

消身消命（アウトフィールド）……存在価値の消失。

現壊突破（シーンクラッシャー）……破白が触れた物を問答無用で、どんなふうにも壊せる。

幻効一致（オーバーミスティク）……傑作（げんじつ）を戯言（まぼろし）に出来る。

幻効一致（オーバーミスティク）を簡単に言うと、大嘘憑（オールフィクション）きに類似している能力（マイナス）であり、これにより現象を戻してしまえる。

いわく、『因果を拒否する』能力である。

そして、大嘘憑（オールフィクション）きは『無かった事にした』ことを『無かった事にする』ことは出来ない……が、幻効一致（オーバーミスティク）は『無かったことにした』こ

とすらも『無かった事』に出来る。

ここまでは行方に説明しているが、言っていないことが多い。
例えば、無敵のような幻効一致（オーバーミスティク）にも弱点があったりする。
さらに言うと、破白には三つも過負荷（スキル）は持ち合わせていない。
効果は色々とあるが、実際にはたった一つしか過負荷（スキル）を持ち合わせていない。

名称は、『壊忌幻消（ポルターガイスト）』。

現実を否定する、と言う効果の能力であり、それ以上ではなくそれ以下でしかない過負荷（マイナス）である。

存在価値を否定し、目の前の現実を否定する能力。

これにより、虚数空間での『魔法禁止ルール』を否定しているため彼は魔法を使用できている。
そこら辺のチート転生者よりも反則（チート）級な水俣破白。

そんな彼は正義感ゆえにアリシアを生き返らせたのではなく――単に、現実なんてあっさりと壊せるんだぜ？　と言う劣等感から彼女を生き返らせたのである。

後に、彼女は現実否定の証明だけではなく、過負荷（マイナス）と言う存在になることを、この破白はまだ知らない。

ザ・マイナスワールド：壊れたお話（後書き）

水俣破白君がやったこと。

死人は生き返らない、と言う現実を冒涜。
プレシア・テスタロッサの悲願をあっさりと行う。
同時にフェイト・テスタロッサのジュエルシード集めと言う努力も無意味化する。
クロノ・ハラオウンの悲しみへの冒涜。
『無印』での高町なのは以外の行いを全て汚すと言う行いをあっさりとした。

「ていうかさぁ、娘が理不尽な死に方をしたとか親に自身の存在を否定されたとかさぁ、よくあることじゃん？　なんでそんなことで悲しくなれるの？」

二十三話　彼女の夢（前書き）

ニコニコにあった『【ＭＡＤ】カオスなＦａｔｅ／Ｚｅｒｏ』のアサシン場面で腹筋崩壊していました。

二十三話　彼女の夢

「【男子高校生の日常】……こっちでもやっていたんだな」
深夜アニメを見ていたためか、少し眠そうに行方は呟く。
それに対し遥は呆れていた。代わりにキールが話し相手となった。
「ところで遥先輩のクラスに転入生が入ったみたいだけど……」
行方の言葉を無視してだが。
「……アリシアだろ？　当て字で有熾亜ってなっているが」
「やっぱり貴方は知っていたのね」
普通、転入生が転入してきた日は当人の周りにクラスメイトが群がるのだが……彼女に対しては一切誰も寄らなかった。
あの高町なのはでさえも。
「近づけなかったと言うより、近づけなかったって感じだったわね。みんな動けないって感じだったし」
「動けない……それが有熾亜先輩の過負荷（マイナス）かい？」
「さぁね。私は彼女の負（マイナス）の雰囲気で寄りたいとは思わないし。そもそも私はスキル系だったら無効腔（ライフゼロ）で無力化しているし」
どんな場面で人道的（マイナス）ではない行動に移るかわからない。
そのためスキルを無効化するスキルを発動していたわけだが……

「どうせ過負荷（マイナス）なスキルでアリシアを蘇らせたんでしょうけど……なんで過負荷（マイナス）化しているの？」
「さぁ？　いつの間にか成り下がっていたようだが」
実はと言うと、破白もアリシアがいつの間に過負荷（マイナス）化していたのかは知らない。
知っているのは、アリシア本人だけである。

「話題を変えるが、Ａ，ｓについてだ」
「あぁ……そっか。それもあったわね」

……『Ａ，ｓ』。『無印』に続く、海鳴で行われる魔法関係の事件。
一歩間違えれば世界が消えるほどのロストロギア、『闇の書』の事件。

「だが、ここを乗り越えれば地球が消えるような事件は無くなる」
「確かｓｔｓでロストロギアが海鳴に落ちるはずだったけど……まぁそこまでのものじゃないから平気だろうしね」

ふと、キールが思い出したかのように、

「そうだ。先輩……出来れば一つだけ、能力を作って欲しいんだ」
「別に良いけど……どうしたの急に？」
「いや、前々から欲しいと思っていたんだけど忘れていてね」

その言葉に遥は疑問を覚える。
目の前の二人と言うと、大事なことは絶対に忘れない性質だ。
キールの方はと言うと、飄々としているのにどこか抜け目ない暗殺者で詐欺師のような雰囲気がある。
そんな彼女が、忘れる……？

「正確には、出したくなかった話題があるから言わなかった、だね」
「……なにそれ？」
「まぁとりあえず。作ってくれるかい？」
「それは構わないけど……どんな能力？」
「対感知能力。感知されないようにする力だね」
「……ふむ」

キールが持つ感知能力は『視界』『魔力』『物理』の三つである。
立体視点（ソリッドポイント）による視界感知に高等技術である魔力感知。
さらに電脳侵入（マザーコンピュータ）によって砂鉄を操り遠い場所にいる相手に直接ぶつけて察知すると言う物理感知。

「相手の感知系に逆感知されないようにしたいんだよ」
「……わかったわ。そのくらいなら今日の放課後ぐらいには出来ると思うから、教室に来て」
「すまないね」

昼休みの終わりが近づいてきたので、切り上げた。

◆◆◆

夕方の鐘（チャイム）が聞こえる。
昼時と夕暮れ時を区別しているような気がする。
そんなどうでも良い事を考えながら、遥は顔を上げる。
何故自分が顔を伏せていたか理由は不明だが、それでも遥は顔を上げる。

自分は教室にいて、そして自席に座っている。
夕方なのに何故自分はまだ教室にいるのだろう？
そう思いながら目をこする。チラリと時計を見て、また思う。
……なんで待て、何で今目をこすった？
……あぁ、なるほど。自分は寝てしまったのか。

だからみんながすでにおらず、そしてじぶんひとりだけがここにいるのか。

そんなことを思いながら、イスから立つ。
帰ろう、と思い鞄を持ちながら教室を出る。
扉を開けた瞬間――赤い光が差し込んだ。
眩しい、と思い腕で光を遮る。赤い光がこんなにも眩しいなんて……と思いながら廊下に一歩踏み出て――気がついた。

この赤い光は、夕焼けの赤色ではない。
そもそも、何故自分は夕方だと錯覚したのだろう？　光が赤かった所為だろうか？

今の時間は、朝だ。
時計では朝の八時ごろを示していた。それを気に留めず、そのまま教室を出てきてしまったのだ。
なら、この赤い光は何だ？　朝の時間帯で光が赤いというのはありえないはずだ。
そう思い恐る恐る、光を差している窓を見つめて――絶句してしまった。
悲鳴を上げる、と言う機能すら麻痺してしまうほどの光景が目の前に広がっていたからだ。

「血が……」

窓一面に血がべっとりとついているのだ。
まだ酸化(くろく)していないことから、真新しいことが伺える。
ふと、窓の下を見ると『何か』が存在している事に気づく。

「な、なんで……貴方が、ここにいるの？」

遥の声が、虚空に消える。
ここに居るはずのない人物が、何故かここに居る。
真っ赤な血を流しながら、光を失った目から涙のような血を垂らしながら……目の前の人物は死んでいた。

「そんな……なんで……」

何で、と言う権利が自分にはあるのだろうか？
目の前の人物を見捨てておきながら、死んでいる事実を目のあたりにして驚く自分。
馬鹿らしい。気持ち悪い。過負荷(マイナス)の彼等よりも最低な自分が、絶句する権利など無い。

「ご、ごめん……こんな……こんなふうになるなんて……」

考えていなかった？
嘘を吐くな。想定していただどころか、こうなると考えていただろう。
そして死体(こう)に成らないように、妨害だって出来たはずだ。

「ごめん……ごめんなさい……」

◇◇◇

夕方の鐘（チャイム）が聞こえる。
昼時と夕暮れ時を区別しているような気がする。
そんなどうでも良い事を考えながら、遥は顔を上げる。
何故自分が顔を伏せていたか理由は不明だが、それでも遥は顔を上げる。

自分は教室にいて、そして自席に座っている。
夕方なのに何故自分はまだ教室にいるのだろう？
そう思いながら目をこする。チラリと時計を見て、また思う。
……なんで待て、何で今日をこすった？
……あぁ、なるほど。自分は寝てしまったのか。

だからみんながすでにおらず、そしてじぶんひとりだけがここにいるのか。

そんなことを思いながら、イスから立つ。
帰ろう、と思い鞄を持ちながら教室を出る――前に、

「よう」

教室に、彼が入ってきた。
ニヤリ、と不敵な笑みを浮べながら手を上げた。

「……何かしら」
「いや、今日が闇の書の本当の覚醒の日だな、と思ってな」

十二月二十四日――あと数時間もすれば、事件の終わりが始まるだろう。

「……もう、転生者も全然居ないのよね」
「転生者は世界の異物だ。短命なのは、当然さ」
溜息を吐きながら、時計を見る。
あと五時間ぐらいだろうか？　そんなことを考えながら、
「帰りましょ」
「……あぁ」
遥達は帰ることにした。
結局、介入する危険性を恐れて、二人は帰(にげ)った。

◆◆◆

「……何今の」
放課後。
橙色の光を浴びながら、遥は自分の席で寝ていた。
キールが来るのを待っているうちに、寝てしまっていたようだ。
ふと、今見ていた夢の内容を思い出し、この状況に恐怖する。
何故あんな夢を見たのかわからないが、しかし先程の惨劇でしかない夢を思い出し恐れる。
今の状況と似すぎているからだ。
時計を見る。
夕方の時刻を差していることから少し安堵できた。

そして遥が安堵している時に

「どうしたんだい？　顔が真っ青だが……遥先輩」

キールがやってきた。

「あ、うん。ちょっと嫌な夢を見て、ね」

「そうかい？」

「平気よ。気にしないで」

キールの姿を見て、安堵の吐息を吐く。

自分でも顔色が良くなっているのがわかる。

「すでに作製出来ているわよ。名称は、『捏感知（センサーディセイブ）』」

「名の通り、感知される気配などを捏造できる、と言うものだね」

「えぇ。そうよ」

『貸出帰換（レンタルサービス）』によってキールに『捏感知（センサーディセイブ）』を渡す。

「馴染むには数日ぐらい必要だけど、構わないかしら？」

「あぁ。大丈夫だよ」

ニコ、とキールは笑い、

「ありがとう。遥先輩」

「ん？　まぁ……私でよければ頼って良いわよ」

「クックック。ありがたいね」

シニカルな笑みを、優しげな笑みを、寂しげな笑みを浮べながら、

「それじゃ、……さようなら。遥先輩」
「うん。それじゃあね」
――次の日から、キールは中庭に来なくなった。

二十四話　彼等の世界

今日は朝から気分が優れない。
朝食もそこまで食べる気はしなかったし、そもそも学校に行きたくないと言う感じに体からダルさを感じた。
しかし、昨日は早めに寝たはずであり不健康になるような行動をした覚えが無い。
そんな遥は適当に授業を聞きながら過ごした。
内端黒兎が休みだったが、そんな日もあるだろうと思い適当に無視した。
チラリ、と横目で見ると有熾亜はクラスの隅っこ辺りの席で授業を真面目に聞いている。

「過負荷（マイナス）とは言え、さすがに授業は受けるのかしら？」

と言う、何てこと無い遥の呟きに、

（まぁ、そうだね。初めてのことだし）

と言う念話が送られてくる。
有熾亜からだった。

「……一々返さなくてもいいのに」

溜息を吐きながら、授業を終えた。
さぁお昼休みだいつもの場所へ行こう。
そう思いながら弁当を取り出し、中庭へ行こうと思ったが――

「あれ、彼方君？　どうしたの？」
「いや、ちょっと浮鳴に用があってな」
「そうなの？……浮鳴さ～ん。彼方君が来てるけど」

教室の出入り口から、そんな声が聞こえた。
そちらに目を向けてみると、そこには行方が立っていた。
手をこちらに上げながら、挨拶してきた。
正直、驚いている。
行方は常に遥の隣のクラスであるが、遥の教室に来た事など皆無であった。
だから……あまり良い予感がしなかった。
教室に入ってきて、黒兎の席に座り持ってきていた弁当を置いた。

「……教室（ここ）で食べるの？」
「まぁな」

遥は机を後ろ向きにして、黒兎の机にくっつける。

「キールは良いの？」
「アイツは学校に来ていないぞ」

ふと思った疑問に淡々と答える行方。
転生者と言えど病気を患うことだってある。風邪でも引いたのだろうか？　と弁当の中身を突っつきながら思っていると、

「てか、もう学校には来ないと思うぞ」

ふざけた発言に、箸を止める。

「……どう言うことかしら？」
「そのまんまの意味だ。てか、黒兎も居なかっただろ？　それで気づいたと思ったんだが……さすがに言っていない以上、気づかないのも無理ないか」
いつもより無表情度を増した行方の言葉に少しイラっときた。
どこかしら無能め、と言われたような気がしたからである。

「現在、キールは黒兎と行動しているぞ」
「内端君と？」
「そうだ。――それが、アイツの任務だし」
任務。
その言葉に口を閉ざす。
弁当の中身を食べ終えた行方は箸を置き、

「……さて、そろそろオレ等の本当のことを話しておくか」
「え。何のこと……？」
「オレとキールの事だよ」
下がれ、と言う合図のような仕草をした。

「防音結界を展開した。空気の振動を操作し、一定以上の会話は聞こえないように仕組んだ。周りのことを気にしないで普通に話しても平気だぞ」
「……わかったわ」
遥の方も食べ終え、箸を置く。
それを見届け、行方は話し始めた。

「そもそも、オレとキールだけが『リセット』に巻き込まれなかったことに疑問を覚えなかったか？」
「……覚えなかった」
「『リセット』と言うのは文字通り、無かった事にすることだ。なのに、オレ達は無かった事にされていない。そこに違和感はなかったか？」
「……」

行方の言葉に、遥はあれ？　と思い始める。
そもそも遥は転生者に対しては疑った目で見ていたはずだ。
しかし行方達の言葉をあっさり信じた数ヶ月前の自分は、何だ？

「洗脳魔法とか使った？」
「使っていないが……もしかして本当に気づかなかったのか？」
「……」
「……続けるぞ。そもそも、オレ達を転生させた存在――天使は二次創作にいるような、あっさりと転生させてくれるような奴とはまた違った。例えば、オレが前回マテリアルに憑依した幼馴染と会えないようにしたり。……つまり、かなり捻くれた存在だ。そんな奴が、普通に転生させると思うか？」
「……無いわね」
「そうだ。無い」

溜息を吐きながら、行方は言った。

「……そもそもオレとキールは本格的に原作介入しないようにしていたわけではない。うつろ、キールは原作介入するよう言われていた」
「……誰に？」
「天使に」

――天使。

「名前はリジェティカ・エイルッス」

「……あれ？　その名前って――」

「言うな。明らかに介入する気満々なのは名前だけでわかるが、気にしないほうが良い」

疲れるだけだ、と行方は言う。

「天使はオレとキールに任務を渡した。キールの方はと言うと、A’s時に動く黒兎の手伝いをしろ、だ」

「……復讐、よね？」

「そうだ。そして、アイツの復讐対象はあと一人になった。最近――時空管理局の上役に居た奴を殺したようだ」

「……」

「そして指名手配。機械絡みには疎いからな」

「だから……元時空管理局元帥のキールが配属された、ってことね」

「そうだ。そもそもキールの感知能力は優れているからな。復讐対象を探すのにも使えるし、アイツ自身強い。――もっとも、復讐対象は正義の味方気取りの偽エミヤだ」

「……」

「普通に人を殺すぞ。だが自分は正義の味方気取りで、犠牲になってしまった命は自分が背負っていく、って言うんだよ」

「……酔っているわね」

「否定はしない。……そんな奴が相手だ」

つまり、そう言う事。

「キールも……死ぬかもしれないってこと？」

「あぁ」

シニカルな笑みを浮べる後輩を思い出しながら遥は弁当を片付ける。

「むつろ、キールが死ぬ可能性が高い。確かにアイツは転生者だが、他の転生者のように特別な能力をもらっているわけではないし」

「でも、最初に会ったときに彼女私の能力封じたわよ？」

キールが接触してきた事を思い出しながら遥は問う。

「固定登録（アブソルートタイム）と言う時間系能力で、お前が能力を使っていない時間を固定化しただけだ。結構準備が必要だっただろうし、戦闘で使うのは無理だろう」

「……貴方の、任務は？」

「……」

弁当を片付けながら、言った。

「お前の護衛」

「……」

「『孤独の書』は防衛能力しかない。つまり逃げる事とかは出来ないんだよ。オレにＳＯＳ信号を送る事はできるけど」

「……なんで、天使はそんなことするのかしら」

「転生者の中には、使えそうな人材が時たま現れるときがある。そいつを物語の世界に転生させ、強くさせる。生き残るために訓練をしたり、学習をしたりするしな。オレやキールの場合、前回の世界がそれにあたる。チェスで言う、昇格（プロモーション）だな」

嫌な言い方をする。

天使にとって行方やキールはと言うと、駒に過ぎないと言う事だ。

「オレやキールはと言うと、すでに天使の駒だ。例えこの世界で死のうが他の世界に転生させられる。その世界で天使にとって利益があることを行う」
「……今回の場合は？」
「黒兎が天使にとって良い人材なんだろう」

つまり、遥も目を付けられていると言うことだ。

「そもそも、だ。何故オレ達が『リセット』だなんて名前をつけたと思う？」
「それは単なる名前――」

なわけない。
意味があるはずだ。

「……」

『リセット』
すべてを元に戻すこと。最初からやり直すこと。また、状況を切り替えるためにいったんすべてを断ち切ること。よくゲームとかで使われる単語。

行方達は自分達の世界が最初からにされた、と言っていたから『リセット』と名称付けたはずだ。
しかし、それすらも若干違うのだろうか……？

「さて、問おう。お前だったらゲームとかでリセットする場面はどこだ」
「……？　それはやっぱり、ゲームとかで自分にとって都合の良く

ない場面にあたったときとかじゃないかしら？」
「その前に、何をしておく？」
「その前……セーブかしら？」
「そうだな。……さて、じゃあまた問おう。『リセット』とは？」
「……」

その言葉で、理解した。

「貴方……この世界をループしているの……？」

天使がどこかでセーブし、都合が悪くなったら『リセット』しているのだろうことを、遥は理解した。
そして行方もしくはキールも含める天使の駒は、その記憶を保持したまま『リセット』されている。
例にあげるのであれば、【涼宮ハルヒの暴走】『エンドレスエイト』での長門有希と同じ状況なのだろう。

「どこがセーブポイントなの……？」
「今は夏休みの途中辺りだ。最初の頃はオレとお前が出会う前。次に、三年生の最初辺り。そして無印の中盤。そして夏休みの途中の順だ。……現在は五十九回目だ」
「……そんなに『リセット』しているの？」
「お前が転生者に殺されたり、原作に巻き込まれて死んだりが多いな。次に黒兎が復讐を成し遂げられず死んだりして『リセット』されており……こちらは少ないがな」
「そんなに死んでいるの？　私」
「三十回は死んでいる。そして黒兎は三回。鈴仙が次に多いな」
「……なるほどね」
「ちなみに、原作登場人物が死んだりしても『リセット』されている」

全ては天使の手のひらの上。
天使が困ったときには『リセット』。
良い方向に向かっていれば、干渉しない。

「ちなみに一度、有熾亜が転入してきたと同時に学級崩壊仕掛けたときがあったぞ。その時にお前が頑張っていたけど」
「聞きたくない聞きたくない」

平行世界の自分の戦闘など聞きたくない。

「……それじゃ、昼休みも終わりだし教室に戻るわ」
「あ、うん」

それで今日は解散。
なんでもない日がまた始まる。

◇◇◇

その日、昨日見た惨劇の夢をまた見た。

二十四話　彼等の世界（後書き）

多分この小説、五十話までには終わると思います。
元々適当にしか書く予定じゃなかったですし。A，Sが終わったら
結構早いペースで終わりに向かうと思います。

ザ・マイナスワールド：壊れたこの手で

「ふ～ふん♪　ふ～ふ♪　ふ～ふ～ふ♪」

夕暮れ時。
機嫌が良さそうに有熾亜は帰宅していた。
三つ編みにした髪が揺れる。ツインテールにしたら、さすがに他称・妹に迷惑が掛かるのでしていない。
商店街を通り抜け、海の辺りにある公園に赴く。
そこで足を止め、見渡す。

「ふ～ん。ここがなのはちゃんやフェイトが戦った場所か」

儚げな笑みを浮べながら、有熾亜は周りを見渡した。

◆◆◆

アリシア・テスタロッサは破白の壊忌幻消（ポルターガイスト）によって死を否定され生き返った。
彼自身は気まぐれと言ったが、よくわからない。
とりあえずアリシアは着れる服を身に付けてから、壊れた時の庭園を探索した。
探索したと言っても、実際は母親の部屋だけであるが。
机の中を漁っていたら、日記を見つけた。

それは母がつけていた日記だった。毎日つけているわけではない、バラバラな日付の日記。
流し読みしていて、ふと目に付いたページを読み始めた。

『○月×日
ある少年が時の庭園に訪れ、私にフェイトのことを言ってきた。フェイトは死んだアリシアの妹も同然だ、と言っていたが戯言だと私は言った。

○月△日
フェイトがジュエルシードを持ってきた。アルハザードに行くためには数がまだ足りない。もっと取ってくるように命令した。フェイトが行った後、彼女が持ってきたケーキの箱が目に入った。もったいないから食べよう、と思い食べた。

○月□日
最近、ある少年が言っていた言葉が頭で反響する。確かに、フェイトは私の娘で、アリシアの妹なのかもしれない。そんなことを考えてしまう。……だが、もう戻れないのだ。アリシアを生き返らせるためには、もう戻れないのだ』

そんなことが日記には書かれていた。
母の日記を読み、彼女の頭は真っ白になってしまった。
妹……？　あぁ、確かに自分は妹がほしいと言った。
だが、クローンが妹？

「違うよ、お母さん。フェイトは私の妹じゃないよ」

クローンとは対象の細胞を使って生み出された存在。
いわば、分身だ。
分身は、妹であるはずがない。
疎遠されていたようだが、結局のところフェイトは九年間も母親と一緒に居たのだ。
生きていた年月が、たったの五年であるアリシアと違い自分(フェイト)の分身は九年間も一緒に居たのだ。そして、母親が会話した相手が、フェイトなのだ。

「なに、それ……」

妹？　そんなわけない。
フェイト・テスタロッサを自分は妹だと認めない。
彼女はアリシアの分身だ。そんな分身如きが、自分(ほんもの)よりも母親と長い時間一緒に居たと言うのだ。

「ちっ……」

思わず舌打ちしてしまう。
アリシアは優しく純粋な子、とプレシアは言っていたが……彼女はただの人間だ。
聖人君子のように負の感情を持たない、と言うことは不可能だ。
そもそも、過負荷(マイナス)である水俣破白(マイナス)に、能力(マイナス)によってアリシアは生き返ったのだ。
影響がまったく出ない、と言うのはありえないであろう。

「ずるいよ……私のことを差し置いて……」

フェイトに向けるのは、嫉妬・憎悪……そして劣等感。

何故、母を助けられなかったのか。
魔法が自分と違って優れているのだろう？　なら、ソニックブームを使うなりして救えば良かったのだ。

「……」

ふと、細胞を活性化させる薬が目に付いた。
生物は怪我をした時など、細胞が覆い怪我が治るのだ。
それを促進させるための薬だろう、と五歳ながらもアリシアは考え付いた。

そして、それを口にした。
見つけた限りの薬を口に含み、飲み込んだ。
自棄くそ酒を飲む大人のように、彼女は飲んでいく。
ごくごくごくごく……そんな彼女が液体を飲んでいく音だけが静寂な部屋に響く。

「お、いたいた……って、何しているんだ」

飲んでいる最中、破白が入ってきた。
部屋に入りアリシアに挨拶をしてきたが、どこか呆れたような声音を出した。

「何って、背を伸ばすために活性剤を飲んでいるんだよ」
「……おい。副作用とか考えているのかよ？」

薬は良薬にもなるが劇薬……毒薬にもなる。
それを気にせず、アリシアは飲んでいく。

「考えていない。元々死んでいた命だし～」

「……何をするつもりだ？」
「フェイトと戦う」
最後の一本を飲み終え、投げ捨てる。
「まっず」
「だろうな」
「……まだフェイトが釈放されるまで時間があるわけだし、その間に戦い方でも覚えておかなくちゃ」
「……テスタロッサのことを恨んでいるのか？」
その言葉にアリシアは振り向き、疲れたような笑みを浮べた。
「妬んでいる」

◆◆◆

夏休みの期間を使い、有熾亜は戦い方を学んだ。
その間に背も成長し、八歳ぐらいまでに伸びた。
「まったく～魔力はフェイトと同じぐらいあったって言うのに、資質がそんなに無いってどんだけ～」
有熾亜は母親譲りの魔力を持っていたが、魔力資質――つまり、魔力を使いこなす能力が無かったのだ。せっかくたまたま手に入れた性能の良いデバイスも、ほぼ無駄になった。
「私は優秀者（フェイト）と違って、所詮劣等者（マイナス）かぁ」

人生に疲れたような笑みを浮べながら、有熾亜は呟いた。
――ふと、魔力の気配。

「結界？」
「すまないが」

背後から声を掛けられた。
振り向くと、剣を携えた女性が立っていた。

「貴様の魔力を頂く」
「……ん？　どう言う事？」
「リンカーコアから蒐集させてもらう、と言う事だ」
「あ～なるほど」

ふと、女性……シグナムは違和感を覚えた。
普通戦線に出る魔導師でさえも、いきなりの状況に驚くはずだ。
すくなくとも動揺はするはず。なのに、彼女はするどころか軽い口調のままだ。

「……以外だな。この状況に驚かないのか？」
「別に～理不尽には慣れているし」

懐から黒色の三角の形をしたデバイスを取り出し、展開する。
バリアジャケットは某箱庭学園の制服。デバイスは――

「黒刀・堕落墜落」

黒い刀身を持つ、刀であった。

「それじゃ、戦おうか。見たところ貴方は騎士のようだけど……」

騎士って優秀な人しかなれないんだよね、とか思いながら、

「気をつけてね？　過負荷（わたし）は、骨を折らずに心を折る戦いをするから」

「……」

疲れたような笑みを浮べた。

ザ・マイナスワールド：壊れたこの手で（後書き）

よくフェイトはアリシアの妹だと言う二次創作を見かけるので、クーロンはクローン……つまり分身であって妹じゃないよ、と本編のアリシアに否定してもらいました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4580z/

魔法少女リリカルなのは　～転生者によるIFな物語～

2012年1月14日19時09分発行